ロウきゅーぶ！　妹観察日記

ドン・タコス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ロウきゅーぶ！　妹観察日記

【Ｎコード】
Ｎ６４７４Ｗ

【作者名】
ドン・タコス

【あらすじ】
ロウきゅーぶ！を題材にして書かせていただきました
主人公はロウきゅーぶ！のメイン（？）ヒロインの智花の兄という設定にしました！

出だしの勢いの良さとは反転して、ｇｄｇｄ感が否めない作品になってきました
キャラ崩壊、設定がちょっと意味がわからない
どう収集つけるんだこれ

プロローグ（前書き）

駄文ですがご容赦下さい

一成の苗字誰か知ってる人教えて下さい

一応原作視点で話が進みます

プロローグ

この俺湊恭平（みなときょうへい）は七芝（なしば）高校に通う高校1年生である。
べつに俺のステータスなんざどうでもいいと思うが一応いっておこう。

俺には『妹』がいる。
それはそれは可愛い妹で思わず抱きしめちゃいたいくらいの可愛さだ
その妹なんだが小さい時からバスケとかいうスポーツをやっている
んだ。
それはもう熱心に取り組んでいる
その妹がやってるバスケ、親父曰く『不良のスポーツ』なんだそう
だ。

俺は別に不良のスポーツだなんて思ったりしてないが俺の通ってる
高校のバスケ部のせいで変な印象を持っちまった。

バスケって変態がやるスポーツなんだなあって。

なんでそんな印象を抱いてしまったかと言うとうちの高校の男子バ
スケ部の部長さんがバスケの顧問の娘さんと恋仲になってしまって
休部になってしまったからだ、1年間だけ
1年っていうのは長いんだか短いんだか良くわからないが俺もスポ

ーツをする身として言わせてもらえばものすごい体が鈍るであろう期間だ・・・・・と思う

別に俺はバスケ部のメンバーと特別親しいわけでもなかったから「へえ大変なロリコンさんだねぇ」で反応を終わらせた。

俺のクラスにも長谷川とかいうバスケ部志望だった男子がいるんだが・・・

なんせ入学して間もないからな。そいつと会話なんてしたことないしかもその長谷川はまともな友達ができる前にロリコン騒ぎがおきたからな

みんな長谷川をまるで腫れ物に触るかのような態度だった。

しかも長谷川はスポーツ選抜で高校に入ってきたのだからなおさら話しかけづらい位置にいる。

ちなみに余談だが俺も陸上で推薦入学したので長谷川とは同じクラスだ

今は四時限目がおわって昼休みだ。あいつはいつも一人で飯を食ってる。

たまに眼鏡の男と飯を食ってるが。

そんな長谷川に俺はなぜか声をかけたくなった・・・だって便所飯とか悲惨すぎるじゃん

「は、長谷川」

「あ"?」

・・・・・・・・・・・・・・・・

おーけいおちつけ俺なんか不良っぽいけど大丈夫。俺ならいける。

「あーなんだ一緒に昼飯でもどうだ？」
「え？」
「え？って聞こえなかったか？一緒に飯食わんか？って」
「え、いやでも・・・悪いし・・・」
なにがだ・・・こいつ遠慮深い性格だな？きっとそうだ。そう読んだぞ俺は

「いいからいいから！中庭いこうぜ」
「お、おう」
長谷川は突然の飯の誘いに戸惑ってる様子だった
だがそんなこと俺には関係ない、ずんずん中庭へ進んでいく
その後をちゃんと長谷川は追いかけてきていた

ちなみにまた余談だが俺達が所属する１年１０組は面倒な事に様々な場所へのアクセスの悪い旧校舎の三階に位置している。
進行方向の反対側は普通科のクラスだ。まあ俺には関係のない話しだが・・・
「いよう！ロリコン一味！」
そんな事を考えていたら変な眼鏡が長谷川に声をかけていた
「・・・だれ？」
おそらく長谷川の知り合いだろうから長谷川に聞いてみる
バキッ！
「へんぶっ！」
・・・いきなり殴ったぞこいつ。
「こいつは一成頭の良いバカだ」
「ああ、なるほどね」
長谷川の説明にうなずいていると一成とか言う奴が起き上がってきた
「ちょ！殴っておいてその紹介はどうなの？もっとちゃんと紹介しとけよ！」
あ、鼻血でてるぞあいつ

「だまれ今から飯なんだ、じゃあな」
長谷川・・・おまえすげえ冷静に対処してんな・・・
「ん？へえ友達できたんだあんな事があったのにまだお前と付きあってくれる物好きがいたのか」
あの事とはバスケ部部長のロリコン騒ぎの事であろう。

「ん・・・まだ一回しか話してないから友達とはよべないけどな」
「え？」
「え？」
長谷川の発言に俺は思わずアホみたいな声をだす。
すると向こうも同じ声で返してきた
「え、うそ友達じゃないの？」
「え、ああそう思ってていいんだちょっと不安だっただけ」
「なんだよ～結構心にグッときたぞお前の言葉」
「ごめんごめん。じゃあ一成俺達はこれで」
「ええ！？ちょ、まてよ！そっちのすこしでかい人を紹介してよ！」
「ん？ああ紹介がおくれたなこちら『湊恭平』俺の高校初の友達だ」
「よろしく・・・えーとなんて呼べばいい？」
「ああ、一成でいいよじゃあ俺は学食だから」
そういって一成は学食へ走っていった

「あ」
「どうした長谷川」
「・・・俺も学食だった」
「多分もうパン売り切れてるな」
「「・・・」」
長谷川には俺の弁当を分けてやった

プロローグ（後書き）

前書きにも書きましたがだれか一成の苗字を・・・

小学生のコーチやるんだって。（前書き）

だめだ・・・うまくかけない

読みづらいと思いますがお付き合い下さい

小学生のコーチやるんだって。

「そーいや長谷川ってバスケ暦どんくらいよ」
放課後校門まで一緒に帰るのでそんな話をふってみた
「ん～と・・・6年くらいかな？」
「なんか曖昧だな、俺の妹もバスケやってるんだぜ」
前にもいったとおりそれはそれは可愛い妹で（以下略）
「へ～てか妹いたんだ初耳」
「いやだってあって1日じゃん。初耳もなにもないだろうよ」
「はは、確かに」
他愛のない話をしていると校門までついてしまった
「んじゃあまた明日な」
「おう・・・て待て長谷川」
「ん、なんだ？」
俺は反対の道に歩こうとしていた長谷川を呼び止める
「アドレス交換しとこうぜ」
「ああ、そうだなじゃあ赤外線よろしく」
「おう」
長谷川とのアドレス交換も無事に終わり今度こそ解散になった

夜に長谷川から意味不明なメールが届いた。
『例えばの話しだけどもし湊が女子小学生のバスケチームのコーチやることになったらどうする？』
なんだこれ？
とりあえず質問されてるみたいだったから返信しとくか

『捕まらないように努力する』
別にコーチすること自体は問題ないんだろうけど・・・俺は小さい女の子大好きだからそんな状況になったら社会的に死なないように努力する。
そんな意味を込めて送信してみたら
『やっぱり捕まるかな・・・いやきっと大丈夫だよな』
・・・・なんだこれ？
いかにも自分がそんな状況に陥ったようないいまわしだな
まあそんな事あるわけないしあったとしても羨ましすぎて俺が死ぬだけだから問題ない。

そんなことを考えていると1階から俺を呼ぶ声が聞こえてきた
「二人とも降りてきて！ごはんできたわよ！」
1階から母さんが呼んだので返事をする
「ああ！今いく！」
そのまま飯食って風呂入って寝た。

次の日、1年10組教室にて
「なあ長谷川、昨日のメールなんだったんだ？」
「ぶほ！」
！？

「どどど、どうした？」
驚きのあまり若干どもりながら聞くと「いや、なんでもないから気にすんな」って返された
そんなこんなで1時限目。ちなみに数学だ

「・・・ｚｚｚ」
俺は当然のように惰眠をむさぼっていた。
数学の教師は初老のダンディな先生。名前は茂松
「おい湊」
「・・・ｚｚｚｚ」
聞こえないふりをして寝ているとダンディ茂松は黒板の方へ歩き出した。
「おい湊あと5秒カウントして起きなかったら俺の必殺チョーク投げをおみまいするぞ」
・・・今なんつったダンディ茂松。聞き取れなかった
「5～、4～、3～」
あ、あれかカウント内におきなかったらチョークスリーパー決める見たいな奴か。中学時代によくやったりやられたりした。
「に～～～い、い～～～～ち・・・おい本当にやるぞ？やるぞ？いいのかやるぞ？じゃあこれで最後のカウントないいな絶対これでおきろよ？い～～～～～～～～ち・・・あ、もう知らないからな。いくぞ～・・・」
ヒュン！一瞬風を切る音がして何事かと顔を上げた俺の額にシュパン！

「痛！なにするんですか？ダンディしげｍ・・・茂松先生！」
「お前が寝てるのが悪いんだろ。お前今日の宿題皆より多く出すから」
「ひど！よーしわかった先生がそんな無理難題を出すってんならその無理難題に俺は答えてやろうじゃないか」
ドヤ顔でそう宣言したら本当に皆より多く宿題出されて若干後悔した。
そんな事があって展開速いけど放課後。

「じゃあ俺こっちだから」
「おうじゃあな長谷川」

俺は長い道のりを歩いてマイホームに到着した。
ちなみに現在の時刻３時１５分。
なぜに陸上で推薦されてきたのにこんなに早いかと言うと単純な話
やめたのだ、陸上を
理由は飽きたから。結構期待されてたっぽいけどそんな理由で即行
退部届けだした
父さんには渋い顔されたけど気にしない。

で、とりあえずは皆より多く出された宿題を片すわけだが・・・
なんとなく長谷川に電話して見る事にする。本当になんとなく

ｐｒｒｒ・・・ｐｒｒｒｒ・・・・
呼び出し音がなってしばらくしたら長谷川が出てくれた。
『も、もしもし湊か？お前もしかして妹いたり・・・うわ！『すば
るーーん！なに電話してんのさー！』『ちょっと真帆！迷惑でしょ
うが！』ごめんあとで電話する！」

・・・・・・・え？
ちょ、まってなにあの状況？小学生くらいの子の声がしたんだけど・
・・
「まさかあのメールって・・・ガチだったのか？」
電話口を見つめたまま独り言をもらした。

５時３０分、我が妹の智花が帰ってきた。

「ただいまー」
「・・・おう、おかえり」
「あ、た、ただいまお兄ちゃん・・・」
「・・・」
最初は妹の事を褒めちぎってたけど実はあまり妹と仲が良くない。俺は仲良くしたいんだけど向こうから距離を置かれてる感じだ。いつからそんな子になっちゃったんだ・・・・

そしてあっという間に時間が過ぎて夕食の時間

「あ、あのねお母さん。今日バスケ部にコーチさんが来てくれたの！」
なに？本当か智花
・・・本当はこんな言葉を出したいんだが勇気が出ない。恥ずかしい話しだが・・・
「へ～、そのコーチ名前はなんていうの？」
「えっと長谷川昴さんっていうんだけどね」
「ぶーーーーー！！！げえっほ！むっほ、げふおふう！！」
激しくむせた。
マジか長谷川のやろう・・・
「え！？恭平どうしたの？変なところはいった？」
「いや、ちが・・・げっほ！うぇぇ・・・吐きそ、えっほえっほ！ふーーはあーーー・・・落ち着いた・・・・おれもう飯いいわ。歯ぁ磨いて寝る」
「あ、そう？じゃあ片して置くわね」
「ああ、ありがとう母さん」
さて・・・長谷川に問い詰めにいくかな・・・

「どういうことだゴルァ」
部屋に戻ってすぐに長谷川に電話をかけて説明を要求した
『あ、ああやっぱり智花って湊の妹だったんだ・・・はは」
「いや、湊ってややこしいからやめろ。恭平でいいよそのかわりお前の事も昴ってよぶ」
『構わないけど・・・ていうかこれには深い事情があってだな・・・』
「いや、お前が女バスのコーチしてるのはそれほど問題じゃない」
『え？』
そうもっと別の問題だ
「智花は・・・ちゃんと部活できてるか？」
『はい？』
そりゃそうだろうな。何も知らないのにこんな事聞かれたらそんな反応とるわ

「ちゃんと部員と仲よくできてるか？」
『あ、ああ見た感じはな』
「そうか・・・良かった・・・まあそんだけだ。このこと口外するつもりねえから安心しろよ」
『わかったサンキューな』
「でも智花に手ぇだしたらどうなるかわかってんだろうな・・・」
この部分だけ声のトーンを下げて脅すように昴に聞く
『わ、わかってるよていうか小学生相手にって無理があるだろ！』
「おうじゃあまた明日」
『ああ、おやすみ』

昴との電話をきって次の行動へと移す。

「さて・・・智花と話しにいくかな・・・」

もちろん、コーチと部活について。

小学生のコーチやるんだって。（後書き）

中途半端なところで終わらせてすいません。

感想よろしくお願いします！

学校に凸してみる。（前書き）

ながったらしくなった・・・

学校に凸してみる。

俺は今智花の部屋の前にいる。
先ほど智花は飯を食べ終えて部屋に戻って来ていた

「・・・・・・」
ドアノブに手をつけようとしては引っ込めて手をつけようとしてはひっこめて・・・
さっきからこんなかんじだ。
「お兄ちゃんがこんなんじゃ駄目だよな、よし！いざ出陣だ！」
ドアノブを握って思いっきりドアを引こうとすると向こうから開いてきた

ガン！
「ふぉあああああああ！！！」
「ふ、ふえぇ！？お、お兄ちゃん！？」
智花がドアを開けてそのドアがおもいっきり俺の頭にぶつかった。
やべえ超痛い・・・
「ごごご、ごめんなさいお兄ちゃん！悪気はなかったの！本当にごめんなさい！！」
むぅ・・・そこまで真剣に謝られると逆に傷つくな
「いや、智花と話をしようと思ってな。今どこいこうとしてたんだ？」
「えっと、歯を磨きにいこうと・・・」
「そ、そうか。俺はもう磨いた・・・」
「うん・・・」
「「・・・」」
え・・・なにこの沈黙。気まずいんですけど
ドアの前でしばらく沈黙していると智花から話を切り出してきた

「あの・・・歯を磨きに・・・」
「え？ああ、ごめんな。でもお兄ちゃんお話したいことがあるから歯磨き終わったらいってくれないか？」
「うん・・・わかった」
そういって智花は一階に下りていった」

・・・・・・やばい、智花との距離が縮まらない・・・このままじゃだめだ。怖い兄というイメージをぶち壊さなければ！！

距離を縮める方法を試行錯誤しているとドアのひらく音がした

「お、お兄ちゃん。終わったよ」
「ああ。・・・・智花の部屋で構わないか？」
「え？・・・うん、わかった」

智花の部屋

「それで、お話って？」

「うん。コーチの事なんだけど・・・」
「長谷川さんがどうかしたの？」
智花がキョトンとした目で見上げてくる。やべえ抱きしめたい
「あ～、そのなんだ・・・そのコーチって俺のクラスメートなんだよね」
「ええ！？本当？お兄ちゃんの知り合いなんだ・・・そうなんだ・・・長谷川さんは、その・・・良い人だよね？」

え・・・？なにその『お兄ちゃんは怖いけど長谷川さんはどうなの？』みたいな聞き方。こまるよそんなのお兄ちゃん泣いちゃう！

「いや、普通に言い奴だよ昴は。で、その～・・・智花は俺のことどう思ってんの？」
「え？どういうこと？」
「その・・・怖いかなって・・・」
「・・・」
あ、黙った。やっぱり怖がられてんのかな～俺
「正直に答えてくんね？なにもしないし言わないよ」
本心を伝えてほしい。あのことでまだ俺の事を怖がってるんだとしたら・・・誤解を解かなければ！
「正直・・・怖い。こうしてしゃべってる間もなにかされるんじゃないかって・・・不安だよ」
あ、駄目だこれ。完全に怖がられてんじゃん・・・くそ、どうやって昔見たいに仲良くできるんだ・・・！？男子高校生が女子小学生と仲良くなりたいとか世間的にやばいと思うけどさ。

「そっか・・・じゃあなんで俺の事怖いと思ってる？やっぱり去年のこと？」
「去年の事もあるけど・・・中学はいってからお兄ちゃん髪の毛金色にそめて怖かったんだもん」

あー・・・あれか。俺が通ってた中学で悪ふざけで友達と一緒に髪の毛染めたら先輩から目つけられて怖かったな。・・・喧嘩売られたらぼこぼこにしてたけど、先輩いように弱かったのだけは覚えてる

「そっか、そうだよな・・・ごめんな怖い思いさせちゃって・・・じゃあ部屋もどるわ」
「え、あ・・・うん」

自室

「ああーーーーーー・・・どうすりゃいいんだろうな・・・」
まさか智花にあそこまで怖がられてるとは思わなかった・・・やばい泣きそう。
どうやったら仲良くできるか、色々考えて思ったのがこれだ
「そうだ、俺もバスケやりゃあいいんだ」
そうと決まったら明日昴にいってみよう。

翌日　水曜日

「おはよー昴」
「おう恭平、で、智花ってお前の妹で間違いないんだよな？」
「ん？ああ、そうだよ。てか今はそんなことどうでもいいんだよ」
俺は真剣な面持ちになって話を切り出した
「バスケ、教えてくんね？」
「え」
まあそうだろう。いきなりこんな事を言われて驚かない奴などいない。

「でも俺はほら・・・あれがあるし」
あれとは女バスのコーチの事だろう。その事も視野にいれてある
「でも1日おきだろ？女バスって。智花がそういうペースで帰ってくるから知ってるんだよね」
「まあそうだけどさ・・・」
昴は納得がいってないようだった
「・・・同年代の男友達より女子小学生とよろしくやってたほうが楽しいんだ・・・」
「え？どういうことだよ」
「昴は俺なんかに教えるより女子小学生が汗をたらしてかすかに膨らんできた胸が揺れるところを見てたほうが楽しいんだ！」
「ちょ、声でけえよ！」
幸い教室には人がいない。これを踏まえて大きな声でいった
「え？聞こえないって？しょうがねえな・・・窓を全開して教室のドアも全開にしてと・・・まったく昴は耳が悪いな！学校中に聞こえるように言ってやるよ」
「いや、まじホントすいませんでした。」
うお！スピーディに土下座してきたぞ。どんだけ言われたくないんだよ
「いや、言うつもりなんかないけどさ。教えてほしいのはわけがあるんだよ」
「どんな？」
俺は昴に昨日の事を話した。
「・・・智花と仲良くなるためにバスケやるって・・・それはちょっと違うんじゃないか？」
「どゆことよ」
「こういうのもなんだけど、やっぱり妹と仲よくなるためだけにバスケやるのって不謹慎じゃないか？」
「どこがだよ」
ていうか不謹慎ってなんだ。帰ったら辞書で調べよ

「やっぱりそういう理由でバスケやってもつまらないだろうし・・・なにより真剣さがたりないんじゃないか？」
「・・・おい」
俺は声のトーンを落として昴を見据えた
「智花と仲良くなりたいってのは本当だ・・・だがそれが理由だと真剣さが足りないってのはちょっとカチンときたぜ」
「あ、ああ悪い・・・」
「決めた。絶対にお前にバスケ教えさせてやる。多少卑怯な手を使ってでもな！」
「ええ！？卑怯ってどんなだよ！」
「安心しろ。皆にお前がコーチやってる事はバラさない。まあ楽しみにしてろって」
「できるか！」
昴には悪いがバスケを教えてくれるまではつづけるぜ・・・この作戦を・・・！

放課後になる前に俺は学校を抜け出した。先生の目をかいくぐるなど・・・造作もない！
目的地は慧心学園。昴がここの女バスのコーチをやっていて俺の妹、智花が通っている学校である

部活は体育館でやるって言ってたからな。体育館を目指せば余裕よ余裕。
警備員が不審な目で見てきたから笑顔で会釈した。堂々としてたからそれほど怪しまれなかった

で、いま体育館の入り口。これまた堂々とドアを開けた。
ガラガラ・・・

「こんにちはー」
「遅いぞすばるん！まちくたび・・・れ？」
栗色の髪の毛でツインテールの元気そうな女の子が駆け寄ってきて驚いた表情をしていた。
「えっとどちらさまでしょうか？」
腰まである髪の毛を静かにゆらして近寄ってきて冷静に質問された。こういうのいいわ。クーデレとみたぞ
「おーだれ？おにいちゃんとおなじせいふくだー」
身長がものすごく小さくてゆったりとした口調の女の子も話しかけてきた。めちゃくちゃ可愛い。

「・・・あれ・智花は？」
三人を半ば無視して元気っ子にたずねた。
「え？もっかんの知り合い？もっかんなら愛莉と一緒にトイレにいったけど」
ああ、この子あれだ。声から察するに俺が昴と電話してるときに邪魔してきた子だ。名前は確か・・・
「真帆だ。」
「うえええ！？なんで私の名前しってんのさ！まさかストーカーじゃないだろうな！」
「いやそんなんじゃないから。うーん・・・智花はトイレか・・・どうするかなー」
「あの、つかぬことをお聞きしますが・・・トモとどういう関係ですか？」
ロングヘアーの女の子が話しかけてきた。
「彼氏」
「「えええええ！？」」
「おー。ともかの彼氏さん？」
なんだこの子達・・・・・面白いな。
「冗談冗談。智花の兄です。名前は湊恭平です、君達のコーチの長

谷川昴と同じ学校で同じクラス。今日はある作戦を決行しに来た。」
「なーんだお兄ちゃんだったのか～・・・・・てか作戦ってどんな！？私にも教えて！」
うむ・・・作戦ときいて興奮する辺り、この子とは気が合いそうだ。
「なんか昴にバスケ教えて～って言ったら『ふざけんなばーか！俺は女子小学生にバスケ教えてたほうが興奮するんだよ！お前なんかに絶対おしえｎ』痛い！！！」
「だれがそんなこと言った・・・お前の作戦ってこういうことか・・・」
「げ、昴・・・なんでこんな早くに！？」
後ろには俺にゲンコツ食らわせた昴がいた。
「お前が作戦だとかなんだとかいってたから不安になってダッシュで来たんだよ」
く、勘のいいやつめ・・・

「こらすばるん！きょーへーにバスケ教えなきゃ駄目だぞー！」
きょーへーって・・・ガキかこいつ・・・・・ガキだな。
「でもほら、真帆たちにも大事な試合があるだろ？恭平にバスケ教えてる暇はないかなって思って」
「そうだとしてもあの言い方はあんまりだと思います。ああいっていただけるのは嬉しいですがもう少し言い方があると思います」
ロングヘアーの子が言う。
「そうだそうだ。もっといってやれ」
「いや恭平がいってたこと嘘だから！断りはしたけどあんな断り方してないよ！」
「おーおにいちゃん。きょうへいにバスケおしえないの？」
小柄な女の子が恭平に尋ねる。ていうかなんだお兄ちゃんって。昴お前ぶっ殺すぞこの野郎。
「ふー・・・さてと・・・体操服に着替えるわ」
「なんでだよ！皆も何かいってやってくれ！」

「私三沢真帆！まほかまほまほって呼んで！」
「永塚紗季です」
「ひなた。袴田ひなた」
「ってみんな！？」
ふ・・・どうやらこの勝負、俺の勝ちのようだな昴よ・・・
「やーいやーい！振られてやんの昴！俺のギャルゲーで鍛えたコミュ力舐めんなよ！」
「うっせえ！ていうかギャルゲーってなんだ？」
「いやそこかよ。そこつっこまなくていいよ」
「あれ？お兄ちゃん？」
盛り上がってるところに智花と身長がやたらでかい女の子がやってきた。
「え？智花ちゃんっておにいさんいたんだ。」
でかい女の子よ・・・おぬし身長のわりに声がふわふわしてるな・・・
「こんにちは。湊恭平です。以後よろしく！」
「え、あの・・・その・・・よろしくお願いします・・・」
・・・この子は照れ屋とみたぞ。おそらく身長のこともコンプレックスなはずだ。つまり打ち解けるためには・・・
「君身長」
「バカ！恭平！それはいっちゃだめ！」
「小さいね」
「「「「「え？」」」」」
ひなたちゃん以外のその場にいたメンバー全員が口をそろえてそういった
ふ・・・だからいっただろう・・・俺のギャルゲーで鍛えたコミュ力を舐めんなよって・・・
「そ、そうでしょうか？・・・でも私他の皆より身長がおおきくて・

・・・」
「いやいや、中学高校ではそんな身長普通だし。そもそも君は他の人よりほんの少し成長が早いだけなんだから気にしちゃだめだよ。俺からしてみれば君はまだまだちびっ子だ」
「ほ、本当ですか！？ありがとうございます！えへへ、ちびっ子かぁ」
これで愛莉とかいう子はクリアしたな・・・あとの3人なんだがどうすりゃいいんだろうな

「すげーきょーへー！初対面の人が愛莉を泣かさなかったのってはじめてみる！」
「そうだろうそうだろう。そこが俺のすごいところだ」
「確かにそうね。恭平さんは乙女心をわかってる人と見たわ」
「うむ。散々女の子と話してきたからな。」
「おーきょうへいはすごいひと」
「ああ、ありがとよ」
口々にお褒めの言葉を受けて少々天狗になっていると智花が視界に入ってきた

「・・・あ～、智花」
「な、なに？お兄ちゃん」
・・・やっぱりまだ怖いか？
「その、兄ちゃんバスケやることにしたから・・・」
「え？本当？」
ビックリ顔の智花。可愛いなやっぱり
「ああ、智花に兄ちゃんは怖くないって認めさせてやるからな！」
「おい恭平。それいったら意味ないと思うぞ」
「細かい事はきにするな。あ、昴。練習していいぞ俺はバスケってどんなもんかなって見学しに来ただけだから。」
「お前作戦がどうとか言ってなかったか？」

「気にするな。練習してってば」
「まあ・・・・わかった」
そういうと昴は5人に指示を出した。
2対3の模擬戦をやるらしい。智花がどんな動きをするのか見物だな

・・・うん。智花以外みんなへたくそだったわ。なんかこう・・・
微笑ましいレベルだ。
「昴・・・」
「ん？どした恭平」
「もう俺帰るわ」
「ほらな？やっぱり飽きるだろ？」
「いや飽きたとかそういうんじゃなくて・・・なんかとりあえず帰るわ。じゃあな」
「お、おう」

家に着いたのは5時だった。
「ただいまー」
「お帰り恭平。ご飯にする？お風呂にする？それとも・・・べ・ん・きょ・う？」
出迎えたのは母さんだった。まあこの時間は母さんくらいしかいないが
「なんで帰ってすぐ勉強しなきゃいけないんだよ。俺は真面目人間か。風呂にする」
「あらそう・・・じゃあお風呂入り終わったらご飯食べてね。お母

さんでかけてくるから」
「わかった～」

風呂から上がって飯も食べ終わった時に智花が帰宅してきた。
「ただいまー」
「お帰り」
「あ・・・・ただいま」
く・・・あんなことがあったのになんで『お兄ちゃんどうしてバスケやろうと思ったの？』って聞いてこないんだ・・・そこから会話を膨らませる予定だったのに・・・

まあいい・・・母さんが帰ってくるまで時間はたっぷりある・・・
その間に智花との親睦を深めればいいだけの話しだ！
ふはははははははは！！！！！

学校に凸してみる。（後書き）

長々と駄文にお付き合いしてくださりありがとうございます。
感想ありがとうございました！
これからもがんばります！

妹との距離がやばいくらい縮まった気がする（前書き）

今回も駄文ですいません・・・

あと勝手にオリストいれてしまいますのでそのときはお許し下さい

妹との距離がやばいくらい縮まった気がする

・・・・・・・・・・

智花は今シャワーを浴びてる最中だ。

この間にどうやって智花との親睦を深められるか作戦を練っているがちゃ

風呂の扉が開く音がした。やばいぞあともう少ししたら智花が飯を食べにリビングにくる・・・

・・・・ッハ！！

妄想

『智花、今ご飯温めるからまっててくれ』

『うん！ありがとうお兄ちゃん！大好き！！』

『あははは！可愛いやつめぇ～！！』

妄想終了

・・・・イケる！！

「っていけるわけねえだろうがあああああ！！！」

「お、お兄ちゃん！？」

なん・・・だと？

まさかこんなに早く出てくるとは・・・普段から智花を観察しておけばよかった。

てっきり女は皆1時間くらい風呂入ってると思ってた・・・
「と、智花ご飯温めるからそこで少し待ってな」
「う、うん・・・」
くそ・・・手ごわいな。いや流石に妄想のとおりいくなんて全く思ってないが・・・なんの効果もなしだと傷つくな。
「カレーだけど・・・智花中辛大丈夫だったっけか？」
「う～んと・・・少し、苦手かも・・・」
会話ができたあああああ！！！
いや待て落ち着け俺・・・ここは笑顔で対処するんだ・・・
「そ、そっか。でもカレーしかないしな・・・よし、兄ちゃんが簡単におかず作ってやるよ」
よし・・・こういったら遠慮深い性格の智花のことだ・・・断りに来るはず！
「い、いいよ。中辛でもがんばれば食べれるから・・・」
来たな・・・？さあ俺のターンだ！
「いや、がんばって食べることないよ、俺の作った料理が嫌なら一緒に作ろうぜ」
さあ・・・来い！！！
「え、う、うん・・・わかった・・・」
ミッションコンプリート。帰還します

いやいやいやいや、帰還してどうする。むしろここからじゃないのか？
「適当に野菜炒めでもつくるか・・・智花冷蔵庫からナスとか取って」
なんだナスとかって、まあ智花もうちの野菜炒めの具材くらい知ってるだろうしな・・・全部とってくれるだろ・・・
「あ、お兄ちゃん。ピーマンがないよ？」
「いや、むしろ好都合だ。オレ、ピーマン、ニガテ」
「そうなんだ・・・」

「じゃあ智花は野菜切っておいてくれるか？俺下準備するから」
「うん」
さて・・・フライパンどこにあったけかな・・・？
ストンストンストン・・・
リビングには野菜を切る音だけが響く。会話は一切ない。

「・・・いた！」
「ど、どうした智花！」
みると智花は包丁で指を切ってしまったようだった。
「指洗ってまってろ。消毒液と絆創膏もってくるから」
あくまで冷静に・・・俺があせっては駄目だ。冷静に・・・冷静に・・・
「ほら智花指出せ」
「お兄ちゃん・・・サイダーとセロハンテープで何するつもり？」
「え？あ・・・」
「・・・」
「これはちょっとしたボケだ。次はちゃんともって来る」
「クス」
あ、笑った。
多分俺に向けて笑ってくれたんだよな・・・久しぶりにみたな智花の笑顔

「・・・ほら今度はちゃんと持ってきた。指、出して」
ス・・・
「ちょっとしみるぞー・・・いやまった。やっぱりしみないかも」
消毒の一連の作業が終わって絆創膏をはっつけた
「お兄ちゃん」
「んー？」
俺はわざっとぶっきらぼうに答える。バカだな、こんな態度だから

怖がられるんだ
「あ、ありがとう・・・」
キタアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！
きましたよ解説の恭平さん！この技名は何でしょうかね！？
そうですね恥ずかしながら上目遣いでお礼をいうとでも名付けておきましょうか。
ながいですね！まあそんなことどうでもいいからこの幸せを噛み締めちゃったりしましょうかね！！

「いや・・・智花も気をつけろよ？包丁で指切ったら痛いだろ？」
「うん・・・ごめんなさい」
「なんであやまるんだよ。それに、指切ったらせっかくきれいな指が台無しじゃないか」
「あ・・・・ごめんなさい・・」
若干頬をそめてうつむく智花。あー可愛い。１００点満点中１０００００００点くらいかな
「だから謝らなくていいって。続けようぜ。俺も切るの手伝う」
「うん」

その後は会話はなかったけど有意義な時間を過ごせたような気がする

自室
「・・・母さんおそいな」
7時をまわっているのだが・・・まだ母さんは帰ってこない。
「どこほっつきあるいてんだか・・・電話してみよ」
prrrrrr・・・prrrガチャ
『もしもし恭平どうしたの？』
「どうしたのじゃねえよ。今どこにいるんだ。」

『あら心配してくれるの？そうねぇ・・・とりあえずあと1時間したらかえるわぁー』

間延びしてる口調で母さんはしゃべる。どこにいるのかって聞いたのに・・・まあいいや

「じゃあできるだけ早めに帰って来いよ」

『は～いじゃあねえ』

・・・あと1時間・・・智花はなにしてんのかな

「さて、また性懲りもなく智花の部屋の前だが・・・」

そういえばこの前はノックしないで入ろうとしてたな・・・レディの部屋に無断で立ち入るのはいささか紳士道に反する行為じゃないか？・・・紳士じゃないけど

コンコン

「智花、はいっていい？」

「ど、どうぞ」

「うぃーっす」

「ど、どうしたの？お兄ちゃん・・・」

「母さん1時間したら帰ってくるってさ」

「そ、そうなんだ・・・なにしてるんだろうね」

「まったくだ」

・・・・・・・・・・・・・・

また沈黙・・・なんで会話が弾まないんだろうな

俺が会話をきりすててるのかな？

「智花折り入って頼みがあるんだが」

そう。智花の部屋に来た目的は母さんの帰宅時間を伝えるためではない
「なに？お兄ちゃん」
「バスケ教えてくんね？」
「ふぇ！？」
なんでそんなに驚く・・・
「いきなりどうしたの？」
「いきなりってわけでもないだろ・・・今日言ったし・・・」
「あれは、その・・・」
どうやら智花は戸惑ってるようだ。そりゃあ年上に物教えるのってなかなかないからな
「頼むよ。基礎の基礎でいいから！」
拝むようにして智花に頼み込む
「わかった・・・今から？」
「え？今からできんの？」
「うん・・・ハンドリングっていうんだけどね？右と左の指でこう・・・」
お、お、お、おう・・・よくわかんねえや・・・てかうまく文にできねえ
「それと首のまわりとかおなかの前とかでこうやってボールをまわすの。」
はや・・・ちょ、はや！すげえ・・・できる人はできるのか・・・
「こんな感じかな・・・？はい、やってみて」
「お、おう」

「す、すごいよお兄ちゃん・・・見ただけで全部完璧だなんて・・・」
「え？そう？あとはこれの反復練習？」
室内でできる練習は一通り終わった。けっこうできてたらしい
「うん。あとは外の練習だけど・・・」
「いや、外でやるようなことは昴に教えてもらうよ。ありがとな」
「うん。きにしないで」
「そーいや智花ってどこでシュートの練習してんの？あの公園？」
昔近所の公園にバスケのゴールがあったんだが、そこによく智花をつれっていってはシュートに付き合わされたもんだ。
「あそこのゴール撤去されちゃってて・・・休日に学校へいって練習してる。」
「え！？あそこ壊されちゃったの？」
「うん・・・」
残念だ・・・俺と智花の数少ない思い出の場所だってのに・・・
「そっか・・・ところで智花さ・・・今のバスケ部ではうまくいってるみたいだな、見ててわかるよ」
「え・・・・・・・うん。皆、優しい人ばかりだよ」
「よかったな・・・この前の学校の時はその・・・ごめんな」
「ううん・・・あのときのお兄ちゃん怖かったけど・・・嬉しかった」
智花は慧心に転校してくる前の学校でいじめにあっていた。バスケ

に関係することだ。
智花は試合になると熱くなってしまうクセがありそのせいかまわりに敬遠されがちだった。
そしてついには直接的ないじめも起きてしまった。前までは陰口程度だったがある6年生が女バスに智花をいじめるように命令したのだそうだ。
暴力は振るわれなかったものの。靴が隠されていたり、バッシュがはけないレベルに汚されていたりと散々だった。
中学で髪を染めてから智花に避けられていたが親と会話してるのを偶然聞きつけて俺は行動に移した。

「お兄ちゃん・・・髪元の色にもどしてくれたね」
「・・・ああ、悪ふざけだったからな。染めたのも。別に不良になったわけはないんだぞ？智花が嫌がるようなことは絶対にしないし、してくる奴がいたら全力で止める・・・大事な妹だからな」
「うん・・・ありがとう。でも前みたいにやりすぎちゃ駄目だよ・・・？本当に怖かった・・・」
そういう智花の声は震えていた。
もう二度と、あんなことはしないって誓った。

妹との距離がやばいくらい縮まった気がする（後書き）

智花のいじめがエスカレートというオリストを作らせてもらいました。

智花と恭平の過去（前書き）

やりすぎた・・・

やっちゃ駄目なようなこともやっちまった・・・

智花と恭平の過去

1年前、智花が慧心に転校してくる前の話しだ

俺は髪の毛を染めてから智花に避けられてるのを理由に智花とはあまりしゃべらなくなった

智花を怖がらせないためだ。

智花は遠慮深くて、頼まれたら断れない性格の持ち主だ。
俺と会話なんかしたら恐怖でストレスがたまってしまうだろう。
なにかと敏感な歳なので智花には細心の注意を持って接していた。

智花と会話するのをやめたから何ヶ月たっただろうか・・・いや実際そこまでたってないけど

母さんと智花の話し声が聞こえた。

「智花・・・また靴あんなに汚してきて・・・どこで遊んでるの？」
「え・・・大丈夫だよ、学校の友達と遊んでただけだから。いまから靴洗うね？」
「そう・・・いじめられてないわよね？」
ビクッ！
智花の肩が少し震えた。母さんは気付かなかったようだが俺には見えた。
どうやら学校でいじめを受けているようだった。
それがわかったと同時に俺は行動を開始していた

「おい智花」
「あ、な、なに？お兄ちゃん・・・」
身長差が激しいので智花を見下ろすように話す。そのせいで智花は怖がっているようだった

「靴、俺が洗う」
「え・・・？」
「聞こえなかったか？俺が靴を洗う」
「だ、駄目だよ！自分で洗うから・・・」
「俺が洗ってやるっていってんだから黙って聞いてろ！！」
ビク！！

智花はまた肩を震わせた。今度は母さんにも見えるほど大きく

「ちょ、ちょっと恭平？妹にそんな口の聞き方はないでしょう・・・謝りなさい」
謝るわけにはいかない。わざと怒声をあげたのだから
「知るか。靴は俺が洗う。母さんは風呂場に入ってくるなよ

靴を風呂場に持っていき洗う前によく確認しておく。
「・・・やっぱりな」
俺の観察眼をもってすれば簡単にわかる。いや素人でもわかるはずだ。
鼻をつんざく異臭。ウサギの糞であろう。
これで智花がいじめを受けているという事実ははっきりとわかった。
後は靴をきれいに洗って智花に問い詰める。本来ならば問い詰めるなどという行為は愚の骨頂だが今回は状況が状況だ。

コンコン

「智花入るぞ」

「グス・・・・はい」

少し泣き声になっている。悪い事をしたな・・・

「靴・・・洗っておいたから・・・」

「・・・がうから」

「？」

声が小さくてよく聞こえない

「あのウサギの糞は・・・自分でつけたやつで・・・いじめられてるとかそんなんじゃないの」

聞いてもいないことをぺらぺらと・・・それだけあせっているのだろうな

「・・・いや、違うね。自分の靴に自分でウサギのクソを擦り付け程お前はバカじゃない・・・誰にやられてるんだ」

遠まわしな口調は一切しない。これが俺なりのやさしさだ

「ちがうの・・・いじめられてなんか・・・」

「それこそ違うだろ！！」

「！！」

智花が泣き腫らした目に涙を浮かべる。

「お前はいじめられてる・・・そうだろ？母さんや父さんにはまだいわない。ただ俺には・・・俺だけにはいってほしい。」
「まだっていうグス・・・ことは・・・いつかいうんでしょ？ぐす・・・」
泣きながら智花が質問してくる
「・・・俺がいわなくてもあんなに靴が毎日のように汚れてたら誰でも気付く。しかも俺の見た限りでは母さんはお前がいじめられてることに気付いてるぞ」
「・・・！！どうして！？」
金切り声に近い声で智花は迫ってくる。
「・・・あんだけ玄関を糞の匂いでいっぱいにしたら気付くだろ・・・」
「え・・・？」
「お前は匂いに慣れちゃったんだろうな。気付いてないだけですごい異臭だぞ。お前が風呂に入ってる間や飯を食べてる間、母さんはそこの掃除と匂い消しをやっていた」
「そんな・・・お母さんが・・・」
智花は絶望したような目をしている。このままじゃ自殺しかねない

「いいか智花。お前がいじめられていると自分の口からいわない限り母さんも父さんも詳しい事は聞かないだろう。だけど俺は父さんたちとは違う。誰にいじめられてるんだ。言え」
「だめだよ・・・いじめてくる人たちの事はいわない・・・だっていじめられてないもん」
墓穴を掘ってる事に気付け智花・・・それは『私はいじめられてます』っていってるようなもんだ

「いわないのか・・・そうか・・・じゃあ今から俺は母さんに智花はいじめられてるっていってくるからな」
「そんな・・・駄目だよ！いっちゃ駄目！！」

「じゃあ俺に誰にいじめられてるのか言え。そうしないと・・・わかってるな？」
ズルイ気もするがしかたない。聞き出すためにはこうまでしないと智花は口を割らない。
「・・・うう・・・ぐす・・・ひどいよぉ、ぐすん・・・」
「・・・・言え」
もらい泣きしそうになったがなんとかこらえた。

「・・・女子バスケットボール部の5、6年生の人たち・・・」
「・・・クラスにはいないのか？」
「・・・いる・・・その子達の影響でクラスの皆も・・・ぐすん」
小学校のいじめってこんなに酷かったか？なんにしても俺の可愛い妹に酷い仕打ちをしたんだ・・・・責任はとってもらうぜ
「男子もか？」
「・・・男の子達は、なにもしてこない・・・先生や男の子にばれないようにしてるから」
・・・陰湿な奴らだな・・・親がなってないんだろうな

「わかった・・・言ってくれてありがとうな、それと・・・ごめん。どうしても知りたかった。じゃあな」
「ぐす・・・」
返事は帰ってこないがすすり泣きだけが聞こえる智花の部屋を後にした

翌日。
今日、智花の授業時間は6時間だったはず。掃除などは朝にやって

６時間目が終わったらすぐに帰るはずだ。６時間目が終わる時間は３時２０分。それまでに智花の教室に・・・乗り込む。
理想は３時だが、警備員どもの目をかいくぐるのは難しそうだ。質問などを受ける時間を考えれば２時４５分ほどに智花の学校につくようにする。

「今は２時３０分・・・そろそろいくか」
俺は智花のかよう学校へと足を伸ばした。
ちなみに中学校は早退して来たんだが・・・理由もあんまり言わないで飛び出してきたからな・・・家に連絡がいってるはずだろうな

校門の前には警備員がいた。
案の定そこの警備員に声をかけられた。まあ当然だろう、こんな時間に中学校の制服をきた男が学校内に入ってくる事はまずないのだから。

「君、その制服だと中学生だよね？学校はどうしたんだ？」
チッ・・・覚悟はしてたが質問に答えるのが面倒くさい。このまま殴り倒すこともできるが社会的に死ぬからやめておく

「ああ、今日は午前授業だったんです。家に帰ってご飯を食べた後に制服のままくつろいでいたらこの学校から電話がかかってきて・・・妹が体調不良を訴えているから迎えに来てほしいって言われたから迎えにきました。両親は仕事で家を空けているので僕が迎えにきました。」
・・・まあ実際は母さんいるけどなw
「ふむ・・・名前は？」
げ・・・名前言わなきゃ駄目か・・・

「湊です。もういっていいですか?結構発熱やばいらしいんで・・・・」
急いだような顔をして質問を切り抜けようとする。
そんな様子をみた警備員はあわてた様子で通るのを許可してくれた
頭の悪い警備員でよかったぜ

「・・・2時50分・・・予定より早いけどまあいいや」
迷わず智花の在籍しているクラスを目指す。
途中で他のクラスを通ったので多少はめだったが、そんなことは些細なこと。関係ない
俺が今考えてるのは智花をいじめの現場からすくってやること・・・
昨日智花の部屋を出た後に約束を破る事になるが父さんと母さんに事情を説明して転校手続きをするようにいっておいた。
3日後にはこの学校にはいないであろう。

あれこれ考えているといつの間にか智花のクラスの目の前まで来ていた。
あとはドアを開けて計画を実行するだけ・・・

ガララララ・・・

ドアを開けると全員が驚愕の表情で俺を見ていた。智花もふくめてな
「お、お兄ちゃん!?なんで・・・」
おい湊の兄さんだってよ

まじかよ！かっけえー
ちょっとなんで智花の兄がきてるわけ？
マジ意味わかんなーい！

・・・好き放題いいやがって・・・特に女子。そのニヤニヤ顔をやめろ殴り飛ばしてぐちゃぐちゃにしたくなる

「君、湊さんのご家族ですか？今は授業中なんですが・・・それに来校許可証もつけてないじゃないですか」
男のいかにも熱血って感じの先生が尋ねてきた。
よかった、こういうタイプの先生なら話を十二分にわかってくれる！悪いところもあるけど・・・

「あ”あ？なんできたのかわかんねえだぁ？そりゃそうか。あんたは知らないんだもんな、うちの智花がいじめられてること」
「お、お兄ちゃん！？」
・・・すまんな智花・・・約束破った兄ちゃんを許してくれ
「・・・・湊、いじめられてたのか？なんでそういうこと先生にいってくれないんだ！」
「・・・あんたわかんねえのか！！あんたみたいなタイプの先生にいうとすぐ学級問題だなんだっていって大事にするだろうが！生徒はそういう事になるのを望んでないんだ！そのあと表面上は仲良くしていても裏ではもっと酷い事をやられる！あんたはそれをわかってない、だから智花はいわないんだ！それに智花は優しいからな。自分のことよりも自分をいじめる人の事をきづかっちまう。あの人達が怒られたらどうしようってな！だからいえないんだよ！わかったか脳なし！！！」
「な・・・ひとの事を脳なしって・・・ふざけるな！！」
激昂した熱血先生は顔を真っ赤にして俺に意見をしてきた。智花のことよりも自分の体裁が大事だってか・・・まあそれがあたりまえ

だろうけど。熱血の売り文句の生徒と真っ向勝負はどこいったんだか

「この中に智花の事いじめてた奴いるよな・・・手ぇあげろ・・・」

シーン・・・と誰も手をあげようとしない。男子勢は本当に困った様子をしているが、女子達はばれるんじゃないかとハラハラしている様子が顔に見え隠れしている。

女バスの5年の顔は全員昨日の内に覚えてきたので、嘘をついてるなんてすぐにわかる。

見たところクラスには女バスのメンバーが6人ほどいた・・・・・

手ごわいな

なにが手ごわいかって見てればわかる。おそらくすぐに

「て、ていうかさ」

口を震わせながら女バスの一員が声をだした

「来校許可証つけてないって事は不法侵入じゃない？すぐに追い出せば良い話しじゃね？ねぇせんせーこの人追い払ってよ、早く！」

「そ、そうよ！不法侵入！！」

「犯罪者！」

「帰れ犯罪者！！」

「そうよそうよ！」

ここまで全員女バス・・・真相が表に出るのが怖いのか。他の女子達は暗い顔をして目を伏せている。なにも知らないフリしやがって・・・

バコオ！！

「「「「「「！！！！！」」」」」」

近くにあった空き机を蹴りとばすと瞬時に黙った。
あ、机のねじ外れてる。

「うるせえよいじめの主犯格。女バスがいじめてたって事はわかってんだ。クラスの女子に言って一緒にいじめるようにいったんだろ？クズどもが・・・こっちこい。気合入れてやる」
ドスの利いた声で呼ぶと全員おびえきった表情をする
「お、おい、いじめの主犯格って本当なのか君達・・・先生いじめはゆるさないって１学期になんどもいっｔ」
「うるっせえ黙ってろ！！！」
「な・・・」
言うと熱血先生は黙ってしまった。ヘタレじゃんｗ
髪の毛が金髪のせいもあってか俺の事を不良だと思ってるようだ。わざと制服を校内にはいったら第二ボタンまであけてズボンからシャツをだしていかにも不良スタイルをかもし出したのがきいたな

「前にでろっていったよなぁ・・・でねえっつうんだったらこっちからいくぞコラァ！！！」
前に歩き出そうとすると眼鏡の女子が割って入ってきた。
「す、すいませんでした！女バスの子達に非はないんです！私がやれって言いました！！」
「あ”あ？レベルの低いデマ垂れてんじゃねえぞ。女バスの６年が主犯ってのはわかってんだよ。どけコラ。お前委員長か？友達守ろうとすんのは良い根性だと思うが今は守るときじゃねえだろ・・・どいてくれ」
どいてくれの部分だけ優しくいうとすぐにどいてくれた。

チョロイw

「おら、てめえさっきなんつったよ。不法侵入だから追い出せってか？別に出てってもいいけどてめえらの家の電話番号全部把握してんだかんな？俺が帰ってもてめえらの家に電話して親話しにだすだけだぞ？いっとくけどこっちの方が圧倒的に有利だから。勝てるって思うなよ？小学生」

そう。たかが小学生。こうやって脅しておけばすぐに萎縮する

「お、お兄ちゃんもうやめて！！」

後ろから黙って聞いてた智花が声をあげた

「やめてって・・・お前をいじめてた奴だぞ？けじめつけさせなくていいのか？」

できるだけ優しく・・・・怖がらせないように

「もう・・・いいの。これだけの騒ぎにするつもりはなかったし・・・・

「バカやろう！！許すなんていうな！いいな、絶対に許すなよ！俺がいいって言うまで許すな！！」

「ど、どうして！？」

「理由はあとで説明するからもうしゃべるな」

「・・・・」

涙目で黙る智花。もうすこしがまんしてくれ

「謝れ。」

「は？」

「は？じゃねえよクズ。智花に謝れ」

「・・・・・・」

「謝れって言ってんだろうが！！！」

「「「「「ごごごご、ごめんなさい！！」」」」」

「よし。今はそれでいい。あとはてめえらの親引っ張り出すだけだな」
「な・・・！？あやまったんだからいいでしょ！？」
「智花。帰るぞ」
「え・・・でも授業が・・・」
「こんな状況で授業なんかできるか。帰るぞ」
「・・・・・・うん」

このあとすぐに帰って例の子達の親に事情を説明したら、子供をつれて新しく買った靴を持って会いにきてくれるそうだ。場所は俺は指示して、こちらは智花と両親を連れて行って話しをしにいく

公園

「どーも」
俺が挨拶すると全員頭を下げてきた
みんな決まって『娘がごめいわくを～』とかそんなんばっかだった
・・・聞くわけねえだろうがカス！

「で・・・買ってきた靴出してくださいよ」
俺が偉そうにいうと父さんや母さんが失礼でしょとかそんなことをいってきた
昨日まで雨が振っていたので大量に水溜りがある。5人分の新しい靴を受け取ると箱から靴を出して力いっぱい水溜りに投げた。

バシャ！と大きな音がしてその場にいた全員が驚愕の顔をしていた。
「ちょっと恭平！なにするの！せっかく買っていただいたものを！」
「そうだぞ恭平！謝りなさい。すぐに！」
「・・・れ」
「え？なに？きこえないわ」
「黙れっていったんだ！！」
力いっぱい叫ぶ。これまた全員がビクっと肩をすくめた

そういったあとに自分の手がよごれるのも気にせずに全ての靴に泥を塗りたくる
「返します」
泥が沢山こびりついた靴を地面に投げる。
「ちょ・・・人がせっかく買ってきたものになんて事を！！」
「・・・うちの智花はな・・・泥じゃなくてウサギの糞のついた靴で毎日下校してたんだよ」
「え・・・」
5人の親達は目を丸くする。女バスメンバーは目を必死に合わせまいと下を向いている
「智花は決まって帰ったあとにすぐに靴を洗った。ウサギの糞でぐちゃぐちゃの靴をな・・・そこの5人がやったんだ」
「そうなの！？そんなことやってたの！？」
「ちがうよ！私やってないよ！」
私も！

うちも！

・・・責任の擦り付け合いか・・・見たくもない

「どうやってウサギの糞を毎日集めてたかはしらないが泥も混ざってた辺り少量の糞と大量の泥で靴をよごしてたんだろうな」

「ちょっと！なにしてるの！」

「だから私じゃないってば！」

あせった顔をして否定する女バスメンバー。このあとやらされる仕打ちも予想できないで・・・バカな奴らだ

「どうやって糞を集めたかなんて重要じゃない。重要なのはこのあとだ」

みんな俺を見つめてる。智花が味わった屈辱を味あわせてやる・・・！！

「履け。その靴を、女バスの5人で。履け！」

「な・・・できるわけないじゃんそんなこと！」

「そうだよ！そもそも汚いし！」

一人がそういった直後俺はブチギレた。

「智花はその汚い仕打ちを毎日受けてたんだ！履け！」

そうさけぶと

しぶしぶといった体で一人が履きだした。

それにつづいて他の4人も泣きながら履く。いい気味だ

脱いできれいなままの靴も水溜りに落としてどろでぐちゃぐちゃにした。帰りの道で履き返させないためだ

「じゃあ俺達は帰りますんで。あと明日から智花は学校にいませんよ。転校しますから」

そういって家に帰った。智花の手を引いて

両親は頭を下げた後にそれに続いた

家に着いたら父さんにはこてんぱんに殴られた。そりゃそうだろう。
智花の学校へ乗り込んだことを言って、公園の事があったのだ。殴られるに決まっている。
智花は終始泣いていたがもうあの学校とはおさらばだ。忘れろとは言わないが気にしなくてもいいんだ
母さんは何も言ってこなかった。これが一番効いた

そんな事があって今に至るわけだが・・・あのころの俺ははっちゃけすぎていた。今思い返して見るとアホらしくて恥ずかしい。

昔話はこれでおしまい・・・

智花と恭平の過去（後書き）

感想いただけると嬉しいです

けじめくらいつけろ（前書き）

いつのまにかＰＶ１万超えてた・・・
読んで下さってる方々ありがとうございます！

あと前の過去編の話し読み返してキモっ！って思ってしまいましたｗ
自分の文才のなさがわかる話でした

けじめくらいつけろ

智花と昔話をしてから二日たった。
４月２２日。金曜日

今俺は学校で授業を受けている。

４時限目の数学である

「ｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚ」
当然・・・寝る！！

「・・・おい湊。今週で何回目だ、お前が寝てるのは」
「ｚｚｚｚｚｚ・・・ｚの数だけ・・・・・」
「そう。７回だ。１週間全部ねてるんだ。ていうかお前寝てないだろ。起きてるだろ」
「ｚｚｚ・・・いや、寝てるけど」
「なんで寝てるのに会話が成立してるんだ。この時点でもうおかしいだろ」
「ｚｚｚじゃあおきたらいいんですか？」
「いいんですか？じゃなくておきろ。内申さがるぞこのやろう」
そう聞いて俺は急いでおきた

「いまさら下がってもかわらないでしょ！！」
「そこかよ！ていうか十分かわるわ！」
「まじですか。じゃあ授業受けます。」
「それでい・・・いやよくない。反省文書いとけよ。４００字詰め

の原稿用紙1枚分な」
罰は結構ぬるかった

授業を真面目に受けているつもりをして授業中に反省文をかいて今昼休み。
「恭平・・・真面目に授業受けたほうがいいぞ？」
「え？受けてただろ」
昴と昼飯をくいながらの会話。すでにこの行為は日常化しつつある。
「お前真面目に受けてるフリして反省文書いてただろ」
「そんなに私の事をみつめていたの・・・？だめよ、私には夫と浮気相手と子供もいるのに・・・」
「気持ち悪いぞ。ていうか浮気相手いちゃ駄目だろ」
昴は初日に比べれば俺のボケに付きあってくれるようになった。大変進歩である。
最初は
『あ、屁こいちゃった。でも大丈夫。俺の屁は腐った魚の匂いだ』
っていうボケをかましたら
『ああ・・・おう』って返された。めちゃくちゃきまずかった。

「そういやお前今日コーチの日だよな？」
ふと思って口に出したのがこれ。なんとなく言ってみた
「ああ・・・・そだな」
返ってきたのは元気のない返答。なにかあったのは明白だ

「なんかあったか？」
興味本位できいてみる
「真帆が・・・ちょっと・・・あと変な手紙来た」
「真帆ってあの元気っ子か？ていうか真帆より手紙の方が気になる

んだけど」
「いうより見たほうが早いよ。これ」
昴に手渡された手紙には文字（？）が書いてあった

「ふむ・・・・・・・・・昴、汚くて読めない」
「だろ？俺は解読するのに３０分かかった」
かかりすぎだろと思うかもしれないが、これが本当に読めない。みた瞬間はミミズが張り付いてるって思ったほどだ
「で、なんて書いてあったんだ？」
「ん～・・・『いますぐ女バスのコーチをやめろ！さもなくば不幸がおまえに襲い掛かるだろう！」って書いてあった」
「ふむ・・・・一昔前に流行った不幸の手紙（笑）ってやつか」
「うん・・・でも別に本当に不幸が起きるってわけでもないだろうけど・・・真帆のことがあったから学校に行きにくいんだ・・・」
「ほう。どんなことがあった？智花を視姦してたら怒られたって言ったら俺は全力でお前をコロスぞ」
「視姦ってなんだ。真帆に１時間で３くらいレベル上がるような練習作ってくれって言われて・・・１日２時間練習だから３日練習して１８までレベル上がったら地区大会優勝って楽勝だよね！って言われたから、それは無理だって言ったら急に怒り出しちゃって・・・・困ったよ」
１レベルがどのくらいの実力なのかわからないからはっきりいえないが３日で地区大会優勝ってどんなチートだよ。ＮＢＡも真っ青だわ・・・・・・・・・・・・・多分
「そうか～・・・にしても地区大会優勝か・・・」
「無理な話しだよな～智花以外素人のチームが地区大会優勝レベルって・・・とてもじゃないけど無理だよ」
昴は困った顔をしている。なんにしてもコーチは今日で最後なのだ。
昴は絶対慧心に向かうだろう

「なあ、今日もついていっていい？」
「またか・・・ていうか一昨日のはついてくるっていわないぞ」
「いいから。俺も一緒に行きたい」
「・・・いいぞ。邪魔はするなよな」
「今日で最後なんだ。けじめくらいつけさせるさ」
「・・・おう」

そして放課後。
バスで慧心に移動している最中だ。
「そしてボブにいってやったのさ『俺の背中を預けられるのは君だけだ』ってね・・・そしたらボブはなんていったと思う？」
「知るか。ボブって誰だ」
くだらないやり取りを続けていると慧心学園に到着した。

体育館へ向かっている途中俺達の横を1匹のアゲハチョウが飛んでいった
「あ！アゲハチョウだ！！まて～！」
「おい恭平！？・・・・ったく先いってるぞー」
昴は俺に一声かけて体育館へと向かっていった。昴と別行動をとってちょっとたってからアゲハチョウは俺の手の届かない所まで飛んでいった
「むう・・・体育館いこ・・・」
俺は少しすねた様子で体育館へと歩き出した

「ん・・・？なんだあれ」
俺の視線の先には昴が大勢の小学生にぐるぐる巻きにされている光景があった
「なにしてんだろ・・・あ、走った」
昴はずた袋のようなものに入れられて台車でどこかへ連れ去られてしまった。
「・・・おいかけるか」
俺は昴が連れて行かれたほうへ走っていった

『手紙で忠告はしたはずだぞ』
男子が昴に話しかけている。男子の容姿はショタ顔で一部の層から絶大な支持を獲得しそうなやつだ

『ああ、忠告ってあの手紙のことか？俺ああいうの読むと逆にわくわくしちゃうタイプなんだよね」
昴は挑発するようにしていうと男子は怒った顔つきになった
『おい！小学生だからって甘く見るなよ！あとで謝っても遅いからな』
『ふんいいね、震えるね。どうなるのか楽しみだよ』
『おい、お前らこいつに小便かけるぞ』
俺はその言葉を聞いた瞬間にその場から逃げた。

友達が小学生に小便をかけられてるところを見たくなかったのだ

俺は昴より先に体育館についた。
「こんにちは～」
「長谷川さん！よかった、今日はきていただけないのかと・・・あれ？」
智花がドアの前まで走りよってきて目的の人物ではないと確認するや驚きの声を漏らした
「お、お兄ちゃん・・・？」
「よう智花。昴はちゃんときてるから安心しな・・・今頃大変なことになってるだろうけど」
「ふえぇ！？大変なことって！？」
「俺の口からはどうも言えない・・・ごめんな・・・」
「お兄ちゃん・・・」

気まずそうに目をふせた直後に後ろのドアが開いた
「ん・・・？どした恭平。なんかあった？」
俺は昴の顔をみるなり驚きの表情をした。なぜなら制服が汚れたいなかったからだ・・・小便で

「昴・・・かけられてないのか？」
「なにをだよ」
俺の質問の意味がわかっていないらしく昴は訝しげに俺の顔を覗き込んできた
「いや・・・その・・・にょー・・・を」
智花に聞こえないようにいってやると昴は微笑した
「お前あの時みてたのか・・・」
「ああ・・・小便かけるぞって少年がいった直後にダッシュで逃げたけどな」
そういうとホッと胸をなでおろす仕草を昴はした。なにがあったんだ。まじで

「あ、あの長谷川さん・・・お話してよろしいでしょうか？」
「あ、ああ智花ごめん。なに？」
智花が話を切り出そうとすると他の４人の部員も近くに寄ってきた。
昴はきつそうな顔をしてる。なんなんだろう。襲うのをがまんしてるのか？

「あの・・・コーチの約束今日まででしたけど・・・もしできるなら・・・」
「男バスの子達から事情は聞いたよ。試合があるんだってね」
「え・・・」
なるほど。小便をどうにかして阻止した後に昴達はそんな事を話してたのか

「ごめん・・・無理だ。試合するのが良いとか悪いとかじゃなくて・・・俺には君達を試合に勝たせてあげるような指導はできない。勝ちたいのならもっと別な方法を考えたほうがいいこのまま俺がコーチを続けても結果は変わらない」
「・・・・・ごめん。力になれなくて・・・短い間だったけど楽しかったありがとう」
そういって昴は踵をかえした。
「すばるん！」
昴がドアノブに手を伸ばしかけたときに真帆がさけんだ

「他の方法なんてないよ！私達にはすばるんしかいないもん！お願い・・・助けてよ！！」
真帆は力の限りそういうと目に涙を浮かべ始めた。
あーあー女の子泣かせるのは最低だぞ昴

「・・・ごめん、無理だ。それに少しだけど男バスの子達の気持ちもわかるんだ・・・」

その言葉が、トドメになった。

「！・・・ひどい・・・ひどいよ！！！」
昴とは逆の方を向いて顔を伏せる真帆・・・それを見ずにかえろうとする昴をみて俺の堪忍袋の在庫が切れた。あとで補充しとかないと。

「まてよ昴」
俺の一言で昴はようやくこちらを向く。
女バスのメンバー全員が俺に視線を向ける・・・真帆だけを除いて
「あんな言い方はないんじゃないか？俺にはあまり関係のないことだが流石にいいすぎだとおもうぜ」
「しょうがないだろ・・・どんな指導をしようが結果は変わらない。真実を伝えたまでだよ」
「真実はいつも一つ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」
「「「「！！？」」」」
俺のアホみたいな言葉に皆困惑の表情を浮かべる

「・・・ってわけじゃないんだぜ。いくらでも勝利への道はある。殺人事件の犯人ってわけじゃないんだ。バスケはスポーツだろ？ス

ポーツなら、戦略しだいでどうとでもなる」
今いいことといった。俺今いいことといった。

「仮に、そうだとしても・・・3日間じゃむりだったんだ」
昴は申し訳なさそうに言う
「そうかよ・・・だけどまだ今日の練習時間は残ってる・・・そうだろ智花？」
「う、うん・・・長谷川さん、最終日のコーチお願いします。少しでもいいから、アドバイス下さい」
智花は笑顔そういった。バスケには真剣なんだ。智花は
「だとよ、学校でもいったけど・・・今日で最後なんだ。けじめくらい、つけろ」
「・・・・・・わかった」
昴は首を縦にふり、コーチをすることを表明した

ただ部内のムードメーカーであろう真帆は参加しなかった。
そうだろうな、直接あんなことをいわれて参加できるはずがない。
葬送のような部活は終了を告げた。俺はずっとハンドリングしていた、指が痛い。

昴はそのまま家に帰り、俺は智花と一緒に家に帰った。

空気が、重かった。

けじめくらいつけろ（後書き）

前書きでも言いましたが、読んで下さってる方々ありがとうございます。
がんばって更新して行きますので応援よろしくお願いします

感想や、指摘がありましたらよろしくお願いします

いまさらだけど主人公のプロフィール（前書き）

題名のとおり、プロフィールです

いまさらだけど主人公のプロフィール

名前　湊恭平《みなときょうへい》
年齢１５歳
生年月日　８月１１日
血液型　Ａ

身長１８７センチ
体重６４キロ
クラス　七芝高校１年１０組

好きな食べ物
・和食全般好き。
肉が大好物で野菜も人並みに食べられる（好きではない）

部活　今は帰宅部

若干ロリコンでシスコン気味。妹の智花を溺愛しているが、本人の前ではややどもってしまう

抱き枕を抱かないと寝付きが悪い

家族をとても大事にしていて携帯の待ちうけは家族の集合写真でファミリーコンプレックス。略してファミコンｗ

運動はとても得意。智花にハンドリングを教えてもらった時に見ただけで完璧にこなせるほど。

陸上は先生が期待してたからいやいや続けていたが本当はカバディをやっていたかった。レイダーが得意（友達を誘って遊びでやってはいたが）
バスケの基礎を智花に教えてもらってから本気でバスケに興味を持ち始めた。

犬か猫かっていわれたらどっちかっていうと犬。
どんな動物がすき？っていわれたらジャイアントパンダかウリボーの二択。

オタクではないが深夜アニメはわりと好き。
そしてどうでもいいが作者もアニメ好き。

面白い事が大好きで面白そうな事があると首を突っ込む癖がある。
真帆はテンションが高いので同類と見ている。

いまさらだけど主人公のプロフィール（後書き）

こんなところです。

他に質問があれば書いてください

うまくやれよ（前書き）

なんか自分でかいてて思ったけど今回適当な気が・・・
気のせいかな？

うまくやれよ

今日は４月２３日の土曜日。
智花は部屋で出かける準備をしているようだ。おそらくは学校へ行くのだろう。

「うむ・・・暇だ・・・」
なにもする事がない。ゲームは部屋にあるがやりつくしてしまっている。
じゃあテレビでも見るかと自室のテレビをつけたが面白そうなものはなにもやっていない
「アニメは全部みて消しちゃったし・・・あ～ミスった。ダビングすんの忘れてた・・・ブルーレイ買うか」
部屋で独り言をいう男子高校生。うむ。危ない。ひじょーにあぶないよ

「昴でも遊びに誘うか・・・？」
そう思って俺は昴に誘いの電話をかけた

ｐｒｒｒ・・・ｐｒｒｒ
『はい』
「おー昴、今日暇だったら・・・・・・やらないか・・・」
『悪い、今からミホ姉に弁当届けなきゃいけないんだ。だから遊ぶのは無理だ、すまんな』
俺の渾身の一撃がスルーされた。ていうか元ネタがわからなかったんだろうな・・・
ん？てかまてこのやろう今、姉っていったか昴の奴

「なあ昴・・・今姉っていったよな。お前姉貴いたのか？」
気になって聞いて見ると叔母だそうだ。叔母か・・・歳によるな・・・
『あ～・・・ていうかきっていいか？今急いでるんだ・・・』
なん・・・だと・・・？
「あ～！！まってまって！一緒にいきたい！いきたいいきたいきたいきたい！！！！」
『駄々っ子か！・・・わかったよいいよ別に来ても』
「さんきゅー！お前のそういうところ大好きだ！・・・・・・・愛してるよ・・・」
『気持ち悪いからやめろ。じゃあ駅で待ってるから。』
「おっけーじゃあ2分後に会おう！」
『そんな早くこれねえだろお前。じゃあな』
そういって昴は電話を切った。
さて、昴の叔母はどれほどのレベルなのか・・・

駅にて

「よー」
「おーはやかったな恭平」
2分とは行かないが10分で駅について見せた。元陸上部なめんな
「じゃあいこうぜ」
「おう・・・ていうか行き先聞いてないんだけど」
「え？ミホ姉の職場しらない？」
「うん。全然」
「慧心学園の教師やってんだよ」
まじかよ・・・・
今日は智花が慧心にいく予定なんだが・・・

「そっかー・・・慧心いくの？」
俺は昴を見下ろして聞いて見た。
「そうだけど・・・ていうか今すんごい急いでるから。ガチ漕ぎな」
「おう・・・なんでよ？」
「とにかく早く！ガチ漕ぎだぞ元陸上部！」
ほう・・・ガチといったな昴・・・チャリにのった元陸上部をなめちゃいけねえぜ・・・？

「じゃあガチ漕ぎでいってみよー」
「おー・・・ってはや！ちょ・・・はや！？」
いわれたとおり全力で漕いでみたら昴が３ｍくらい後ろについてきていた

「ほう・・・体育館か」
「ああ」
ガラっと音をたてて扉を開けるとものすごい光景が見えた
『はあん！激しすぎるうう！！』
『うふふ・・・まだよこれからもっと激しくなるんだから・・・さあ一緒にイクわよ！！』
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ママさんバレーだった。体育館でママさんバレーやってた。

「昴・・・お前このために・・・？」
「いや、違う！断じて違う！その・・・俺は今日が智花達の試合だって勘違いしてて・・・」
昴は地面にへたり込んだままいいわけをつづける
「いや試合は来週だぞ？ああ・・・お前もしかして気になっちゃっ

たんだな？きになっちゃったんだろ」
「わ、わりいかよ・・・」
別に悪いわけじゃないが・・・昨日あんなこと言っておいてまったく素直じゃないやつめ

「あれー？昴じゃん。弁当届けにきてくれたの・・・って隣のその人誰？」
「笑え・・・笑えよミホ姉・・・」
「いやなんかもう無様すぎて笑えないよ・・・ここじゃ目立つから端っこいこ」
あれ？俺スルー？質問しといて俺スルー？

「・・・で、どったの？あんなビックリして」
「いや、だって・・・今日が最後の監督って・・・」
「ん？あー高畠のお母さん腰痛になっちゃってさーだから今日で最後の試合、引退試合ってとこ・・・ところで最後って・・・にゅふ・・・」
昴の叔母さんが黒い笑みを浮かべる。なんかミスったな昴
「そっかー昴あの子達の試合だとおもったんだー・・・だから弁当届けてくれたってわけ・・・なんだかんだいってあの子達のこと気になってんじゃんあんた」
「く・・・」
昴ざまあw・・・といいたいところだが俺が完全に無視されてて他人事だと思えない。ロリ可愛くて好みなんだが23歳・・・若干年上だがいける・・・ロリは正義だ！！

「昴さー・・・あと1週間つづけてみなよ、コーチ。そしたらスッキリするでしょ」
「・・・もう任期は完了したはずだろ。」

「ふーんまあいいけど、んでさっきから気になってたけどとなりの人だれ？」
お、ようやく話題転換きた。ここでアピールしとけば後々いい関係に・・・？
「ああ、智花の兄さんの湊恭平。俺の友達だ」
「どうもです。来る途中に色々昴から聞かせていただきました。智花の担任の先生だそうで。いつも智花がお世話になっています」
「へー智花兄ちゃんいたんだ。私たかむら美星。よろしくー」
「はいよろしくおねがいします！」
緊張して声がうわずっちゃったけどなんとか自己紹介できた・・・
「ちなみに好きなものはネトゲ！！」
なん・・・だと・・・？
ネトゲなら俺もはまっている。はまると面白いのだがはまりすぎると死ぬので注意。
「へーどんな名前ですか？俺もネトゲやってるんでもしかしたら知ってるかもしれません」
「〇〇っていうネトゲだよー知ってる？」
「あ、それやってます。面白いですよねー」
「んじゃあこれ私の名前ね・・・・・ネカマとかしてないでしょうね」
美星先生が俺をジト目で見つめてくる結構可愛いな。セーラー服着せたい。
「そんなのはやってませんよ。ちゃんとした男キャラです。暇だったらログインします」
「おー、よろしくよろしくじゃあ私戻るから。じゃねー」
「さよならー」
俺は歓喜の表情で美星先生を見送った。ちっちゃって正義だよね。まじで
「恭平・・・お前・・・」

「ん？なにさ」
「熟女好きだったのか！？」
バカかこいつ！？あの容姿で熟女とかありえねえだろ！ていうか２３歳って熟女じゃねえし！食べ頃だし！！！
「いや。強いて言うならロリコンだ」
「え・・・」
昴が若干引き気味になった。
「いやいや、女バスを変な目で見たりしてなかったから大丈夫だよ」ていうか、ロリコンってきいてそんなに引くぐらいならコーチ続けろよ・・・気になるんだろ？

「あ、れ？長谷川さんとお兄ちゃん！？」
「と、智花？」
昴はあせった表情をして１歩あとずさった。
顔をあわせづらいんだろうな

「・・・じゃあ昴。俺はこれで」
「ま、まてよ恭平！どこいくんだよ」
そういう昴の肩に片手をおいて耳元で
「うまくやれよ」といった

智花に目配せをして若干キョドりながらも笑顔を向けられた
「じゃあな智花。今日は昴と一緒にいろ」
「え・・・？」
「がんばれよ」
そういい残して俺は自転車にのって全力で家を目指した。
なんで全力かって？後ろから昴達に追いつかれたら恥ずかしいじゃんかよ

夜に、長谷川家から電話があった。智花は晩飯くってから家に帰って来るそうだ。もちろん了承した

智花が家に帰ってきたときは笑顔だった。

続けてもらえるようになったんだな。コーチ

よかったな、ともいえずに俺は床についた。

うまくやれよ（後書き）

感想いただけると嬉しいです

ディフェンス（前書き）

感想ありがとうございます！
アクセス数や感想などを励みにして書いているため、感想をよむと
本当に元気がでてきます！
今回は恭平が若干空気になりますw

ディフェンス

４月２５日月曜日。
時刻は４時１５分。
今俺は昴と共に慧心学園の体育館へやってきている。

「・・・・・」
「どうした、入りづらいのか？」
からかうようにいってやると昴は意を決したような目になり
「うるせっ！・・・・くそ、悩むだけ無駄だ！」
昴がいきおいよくドアをあけた瞬間・・・

『お帰りなさいませ！ご主人様！』
Ｏｈ．．．ｙｅｓ．．．

なぜか全員メイド服。そんな格好に昴は少し動揺したもののコーチらしくちゃんと指示を出していた。
「みんな体操服に着替えてきてくれるかな？急いで」
で、全員想定内だったらしく皆してメイド服を脱ぎ始めた。どうやら下に体操服を着込んでいるようだった
「ちょっとまてえい！！！」
女バス５人は俺の言葉を聞いて着替えをやめて、不思議そうな顔をしている

「・・・・・・写真・・・撮っていいですか？」
俺は今年一番いい顔になるであろう顔でそうのたまった
「恭平・・・時間がないんだ・・・」
昴にあきれ笑いを向けられた・・・・なんか負けた気分
「お兄ちゃん・・・・」

智花にも呆れられてる！？まあそりゃそうなるだろうけどショックだよこんちくしょう！！

そのあと普通に着替えた（脱いだ？）のだが

「うううう・・・」
小さい（仮）女の子が恥ずかしそうにして目に涙を浮かべている。人前で脱ぐのを渋ったために元気っ子の真帆にひん剥かれてしまったためだ（メイド服を）
えーと・・・大変俺得なのだが、今にも泣きそうなため目のやり場にこまっていると智花が無言でジャージを差し出していた。さすが我が妹、よくできている。

この後は昴のターンだ（ずっとではないぞ）
「えーと・・・智花から聞いてると思うけど、今週またコーチをやらせてもらう事になりましたなんか色々ゴタゴタしててごめん・・・この前のこともできたら許してほしい」
ほう・・・なかなかの滑り出しだと思うぞ昴。
「しょーがないなー、許してやるよすばるん！」
真帆が笑顔で許す事を宣言する。その影響からなのか、他のメンバー４人の顔にも笑顔が宿った
「じゃあさっそくだけど男バスに勝つための特訓をしたいと思いま

す」
・・・・・あれ、俺の紹介は？
なんか先週は皆に名前と智花の兄っていうことだけ言って終わりだったから色々言いたいんだけど・・・それで皆と早く仲良くなりたいんだけど・・・あれ？そういや女バスのメンバーもおれのこと気にしてなくね？写真撮らせてっていったからかな・・・へこむわー・・・まじへこむわー・・・

「まずは二つにチーム分けしてもらいます。そんで別々の練習をしてもらうから。Aチームが真帆と紗季。Bチームが智花と愛莉とひなた。とりあえずはAチームに練習のやり方を教えるためにこっち見とくから・・・Bチームは外走ってきて。1週間で少しでも持久力上げときたいからね・・・Bチームの方は恭平が・・・あれ、恭平？」
名前を呼ばれた気もするが気のせいだろう。だって今の時間は俺空気だもんね・・・知ってるよ・・・
「おーい恭平ーどうした？」
端っこで体育座りして先ほどの発言を悔やんでいると昴に肩を叩かれた。
「え・・・・・なに・・・？」
「ええ！？どうしたのお前、言葉に重みが感じられないんだが・・・逆の軽みも感じられねえよ。Bチームの外周組の面倒見てやってほしいんだ、お前陸上推薦だったろ？」
ふう・・・そんなことですか・・・
「いや・・・俺って多分必要ないだろ？さっきだって俺の存在無視して話し進められてたし・・・俺空気だったし・・・俺いらなくね？てかここにいる意味なくね？智花と一緒にいたいからって理由でひっついてきたけど・・・俺いらなくね？」
「そんな理由でついてきたのかよ・・・ていうかお前性格めんどくさいな！お前の力が必要だからたのんだんだよ」

・・・え？
今なんていった？聞き取れなかった・・・
「わ・・・ワンモア」
もう一回いってほしかったので頼んで見ると
「いや、だからお前の力が必要だって・・・」
ああ・・・昴、お前・・・

俺を惚れさせるきだな・・・？
だが残念・・俺はＢＬ趣味はないんだ・・・だけど昴の一言で性格が正常に戻ったのには感謝しよう

「昴・・・わかった。やってやんよ俺やってやんよ。で・・・Ｂチームってなんぞ？」
「お前はなし全然聞いてなかっただろ・・・Ｂチームは外周組だ。外を走るからお前に面倒見てもらいたかったんだよ。元陸上部」
「わかった。引き受ける」
俺は昴の提案に乗ってやった。よーし貸し一つ。勝手に貸し一つゲット。
「お兄ちゃん・・・私をみるためって・・・」
智花がなにかいっていたような気もするが聞き取れなかったのでスルー

「よーしＢチーム、外でるぞー」
「「はい！（おー）」
二人はきちんと返事をしたのだが一人は間延びした返事だった。その声の主を見て見ると・・・

なん・・・だと・・・？

なんなんだあの小動物は・・・なんだろうこれ・・・なんかその・・・守りたくなる！！

まあそんな事はあとで小一時間程考えるとして・・・今は与えられた仕事をするだけだ

外

「うっし。じゃあ俺は後ろから見とくから自分の走りやすいペースで走ってね。無理はしないようにねいいかもう一度いうぞ無理はするなよ？・・・念のためにもう一回いうけど無理はするな。いいな？無理だけは・・・・・・・・」

ああ・・・視線が痛い・・・

「あの・・・さ、誰かつっこんでよ・・・一人でボケ倒してるみたいになってんじゃん・・・まじで・・・」

気まずそうに目をそらしていうと

「おーわかった、きょうへい。はやくはしろう？」

これは予想外。小柄なつるぺた幼女がつっこんでくれた。いや、智花と比べたらつるぺたではないが

「よし、ツッコミ感謝。さっきもいったとおり自分のペースで走ってね。はい、走ってきて」

「え、と・・・きょ、恭平さんは走らないんですか？」

小さい（仮）女のこの愛莉にそういわれた。いや、走るよ？俺だってはしるさ。

「うんにゃ、走るよ。3人走ったら俺も後から続くから・・・・」
「わ、わかりました。いこう？智花ちゃん、ひなちゃん」
「う、うん」
「おー」
・・・・結局智花とは話せずじまいか。
だけどまだ時間はある。チャンスはいくらでもあるんだ！

タッタッタッタッタ・・・・

ここまで無言。辺りには下校する生徒もいないほどの無人さだ。3人の少女達の息使いしか聞こえてこない。
学校の外周を1週して体育館の前に差し掛かったとたん。
ひなたの体がふらつき始めた。これはいかんと思って止めにかかろうとした瞬間。

ひなたが前のめりに倒れ掛かってしまう。やばい、これでは顔から地面まで一直線だ！
「うおおおお！あぶねえええ！！！！！」

俺は全力でひなたの前にスライディングをしてなんとか受け止める事ができた。

「ど、どうしたんですか？・・・・ってひなちゃん！？」
「ひなた！どうしたの！？」
俺のスライディングの音を聞きつけて2人が後ろにやってきた

「無理してたみたいだな・・・俺にいってくれればよかったのに・・・智花」
「な、なに？」

・・・・やっぱりまだ嫌われてんのか？昔話してもう仲良くなったとばかり思っていたのだが・・・まあ今はその事を考えているときじゃない。

「昴を呼んできてほしい。俺と愛莉はひなたのことをみてるから・・・」

「わ、わかった。すぐに呼んでくるね！」

「頼む」

智花は全速力で体育館の中に入っていった。

汗でもふいておくか

しかし俺はタオルをバッグの中にいれっぱだ。つまり俺はタオルを所持していないわけだが・・・

「愛莉」

「ひゃ、ひゃい！」

え、なにその反応。この子にまで嫌われちゃってんの？

「タオルかなにか持ってるかな？ひなたの汗をぬぐってやりたいんだけど」

「あ、タオルならポケットの中に・・・はい、使ってください」

手を洗ったあとにふくような小さいタオルなのだが、これでもいいや。変わらんし

ひなたの顔をふき終えた所に昴と智花がやってきた

「ひ、ひなたちゃん！大丈夫か！？」

今こいつ『ちゃん』づけしたな？いや、たしかにそんくらい可愛いけどよ・・・

昴に呼ばれて薄く目を開けたひなたは口を開いた

「・・・・だいじょうぶだよ・・・・・・・・・おにーちゃん」

「どがふさ！！」

なんて！？
今なんていったの昴！？ていうかそんなことはどうでもいい・・・
おにーちゃんってどういうことじゃボケええええ！！
「んメディイイイイイイイイック！！！！！！！・・・・・・・・・・
いや、救急車だ・・・」
そんなことを呟いて昴は脱兎のごとくかけだした
「待てや昴！！おにーちゃんってどういうことだこらあああ！！！！！」
俺はそんな昴の背中を追いかけようとして・・・やめた。
「元気っ子と紗季。智花と愛莉のケアよろしくたのむ・・・・・っていうかめんどくさいから追いかけんのやめるわ。俺も休む。」
そういって体育館へと5人でもどった。

「こらきょーへー！私だけなんで名前で呼ばないんだ！なんだ元気っ子って！私も名前でよべー！」
体育館で駄弁ろうと思ったら真帆がつっかかってきた・・・つーより要求してきた。
「なんとなくそんな感じがするからだ。ちなみに他のメンバーのイメージは紗季は眼鏡っ子で真帆はさっきもいったとおりのイメージ、愛莉はミニチュアドール、智花は可愛い妹でさっきのひなたは小柄な女の子・・・イメージっつーよりみたまんまだな。わかったか元気っ子」
「だから名前でよべっつーに！！」
クスクスと周りの子達が笑っている。よかったな元気っ子、笑われ

てるぞ（笑）
「か、可愛いって・・・」
智花は顔を赤く染めてうつむいていた。風邪か？
「ど、どうした智花。顔赤いぞ？どっか悪いのか？」
心配して聞いて見ると智花はなんでもないから大丈夫とだけ返してまたうつむいてしまった
「な、なあ智花やっぱりどこか悪いんじゃ・・・」
「違いますよ恭平さん」
横から紗季に話しかけられた
「何が違うんだ？風邪じゃなくて熱いからとかそういうオチか？」
「いや、そうじゃなくて・・・トモは単純に恭平さんに『可愛い妹』と言われて照れてるんです」
「ちちち、違うよ紗季！照れてるとかそんなんじゃ・・・」
あわてて智花は紗季の意見を否定しにかかる。傷ついたぞ

「そういやなんで男バスと試合すんの？俺なんも聞いてないんだけど」
ふと気になったので聞いて見ると真帆説明してくれた

「夏陽と・・・男バスとちょっと喧嘩しちゃって、試合することになっちゃったんだ。その試合にうちらが勝ったら今までどおり練習していいんだけど男バスが勝ったら・・・女バスは廃部になっちゃうんだよ・・・」
なんだそりゃ、話が読めん
困惑の色を浮かべていると紗季が補足してくれた
「男バスが私達の練習を遊んでるっていいがかりをつけてきて、顧問同士の話し合いでなんとかしようって話しにまとまったんですけどみーた・・・美星先生とカマキリが試合で決着つけようって話しにしちゃったんです。だから試合をすることになっちゃったんです」
へー・・・てかなんだカマキリって、美星先生カマキリと話せるの

か・・・
「あ、カマキリっていうのは男バスの顧問の小笠原先生のことです」
お、おお・・・今思ったんだが紗季はできる子だ。しかもものすごく。
「ふーん・・・ていうかもう俺って帰っていいのかな・・・外周って終わったよね？俺お役ごめんじゃない？」
「えー！駄目だよ帰っちゃ！・・・もっかんが泣いちゃうし」
「な、泣かないよ！」
まあ俺が帰ったところで智花にはなんの影響もないだろうけどな・・・悲しいことに

「うん、じゃあ智花は泣かないから帰っていい？」
「ええ～！なんかして遊ぼうよう！」
この子はバカなのかもしれない。夏休みに宿題溜めちゃうタイプだこの子。
「真帆、アホかお前。このあとも練習するんだろ？なら遊んじゃ駄目だって・・・ん・・・？あ、まった今ちょっといいこと思いつきそう」
「え！？なになに！？面白いこと？」
真帆は目を輝かせて聞いてきた。真帆にとっては面白くないことかもしれんがな

「・・・真帆がアホで、りゃくしてア帆ってどうだろう」
「ちょ！！ひとの名前で遊ぶなー！！」
真帆が拳を掲げてきたので全力で逃げた。
「うわ！はや！！こらきょーへー！手加減しろー！オトナゲないぞー！」
「大丈夫！オトナ毛あるから！ほらほら捕まえられるんなら捕まえてみな！・・・ア帆・・・」
「今またア帆っていっただろ！もうゆるさん！コアラアタック食ら

わせてやるー！」
なんだそのかわいらしい名前wだがそっちが攻撃態勢をとるのならこっちにだって考えがある
「かかってこい・・・俺の動きについてこられるならな！！スウゥゥゥゥ・・・・・・・・・・・・」
「な、なんだよそんなに息吸って・・・」
真帆は俺の行動に若干おびえつつもちゃんと走ってきていた。バカな奴め

「・・・カバディカバディカバディカバディカバディカバディカバディ・・・」
「ぎゃあああああ！！！気持ちわりいーーー！！」
真帆は絶叫して動きを止めた。
「おらおらかかってこいよ！・・・・・・・ア帆」
「ううう！！また言ったなー！くらえ！コアラアターック！！」
いつのまにかすごい近い距離にいて真帆に飛びつかれた。
が、すんでのところでよけて真帆は無事着地していた。
「はいディーフェンスwwwディーフェンスwwwディーフェンスwwww」
手をたたきながらディフェンスと連呼して真帆の周りをまわってやる
「なんかむかつくーー！！受けてみろ！！渾身のコアラアタックだー！！！」
バッ！
と、とびつかれて、俺はふざけて動いていたため真帆のコアラアタックなるものをモロに受けてしまった
「ぬっほ！息が・・・・・息がーーーー！！！」
なんだこれ・・・なんだこれ・・・息ができないぞ！？コアラアタ

ック・・・恐るべし・・・

「皆ー練習再開しよう・・・ってなにやってんだ恭平！？」

ああ・・・昴・・・ナイス・・・タイ・・ミン・・・グ・・・

昴に向けてグッ、と親指をたてたあとに俺は意識を失った。

ディフェンス（後書き）

感想や指摘があればドシドシ書いてください
よろしくお願いします！

想いの告げ方（前書き）

展開が・・・展開が早いようなきが・・・

この話でこの小説を見限る人もいるかもしれませんが、最後までお付き合いしてくださると嬉しいです

想いの告げ方

俺がコアラアタックとかいう名前の技で気を失っている間に練習は終わっていたらしい。
昴が帰り際に教えてくれた。

・・・・・で

今智花と下校中。

「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
会話が恐ろしいほどに無い
これはどうしたらいいのかと・・・俺が話せばいいんだろうけどなにぶん気の利いたセリフなんて言える柄じゃない。

でも智花との距離は縮めたい、二つの考えが交差してだした結論は俺から智花に話しかけるということであった。

「智花」
「え、な、なに？」
「・・・練習、どうだった？」
しゃべり方が硬い気もするが今はこれで合格ラインだろう
「えっと、がんばってるよ？」

「そか」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・

ここで話し切っちゃ駄目だろ！バカか俺は・・・
「あ、そうだ。俺今日自転車できてるから・・・後ろ乗ってけ」
「ふえ!?え、あの・・・その・・・」
「あー、そうか。二人乗り駄目なんだっけ?んー・・・まあ今日くらいいいだろ。乗って」
「う。うん・・・ただ」
「ただ?」
「どうやって乗ればいいの?」
えーー・・・んなこといわれてもなぁ・・・

「好きなように乗ればいいよ。自分が乗りやすい乗り方で」
「う、うん。わかった」
ようやく智花は後ろに乗ってくれたんだが・・・

荷台に横座りして俺の腰に手を回した乗り方である。
胸が・・・胸があたってますよ智花さん・・・
そんなことでプレッシャーを感じてる俺とは違い、何も気付いていない智花はなんで漕ぎ出さないかのかと疑問に思ってるところだ。

「あー、行くぞ」

「うん・・・」
こんなやり取りをしてようやくこぎ始めた。家まで半分ほどの距離に差し掛かって智花が話しかけてくれた

「二回目・・・」
「ん？何が？」
二回目とは何を意味するのだろうか？

「ふ、二人乗り！・・・これで、二回目だから・・・」
「・・・まあそうだろうな。昴がはじめてだろ？」
「う、うん・・・昴さん、家のゴール貸してくださって・・・優しかったなぁ・・・」
・・・・・俺はそこまで優しくないってことか？さいですか・・・

「え、いやちょっとまて、智花、昴さんってどゆことよ」
「ふえ・・・？え、いや、その・・・なんでもないよ・・・」
昴の野郎・・・うちの妹に名前で呼ばせるとはいい根性してんじゃねえか・・・
「好きか？」
「だ、誰を？」
「昴のこと」
「好き・・・だよ？」
・・・・・コロス。あの野郎、昴こんちくしょう。ブチコロシテヤル・・・コロスコロスコロスコロスコロス・・・
「お、お兄ちゃん？」
「は・・・！な、なんだ？」
智花に呼びかけられてふと我にかえることができた。
「その・・・コーチとして好きってことだからね？決してその・・・恋愛感情とかそういうのじゃ・・・」
恋愛感情って・・・小六ってそういう言葉知ってるもんなのか？

「そか・・・学校に好きな子いないのか？」
「い、いないよ！昔から・・・一筋だから」
・・・？一筋ってことは誰かの事を昔から好きだったてことか？よし殺そう。そいつ今から殺しにいこう
「・・・誰？昔からって事は・・・幼馴染なんていないしなぁ・・・昔から一筋って・・・だれ？」
ものすごい聞きたい。聞いた後にそいつとゆっくりお茶飲みながら話したい。・・・・・どこに埋葬してほしいかきくために・・・

「え・・・？き、聞こえなかった？その・・・一筋って言う前に・・・」
ああ・・・あの変にあいた間になんかいってたのか、誰だ、誰なんだちくしょう
「聞こえなかった。もう一回言ってくれる？」
はやくそいつ殺りたいから。
「え、その・・・はぅ・・・」
え！？なにその可愛いリアクション・・・そんなに好きなの！？そんなやつならなおさら殺さないと！智花のために殺らないと！！
「・・・いいたく、ないのか？」
「え、と・・・いつかは言おうと思ってたんだけど・・・その、振られるの怖いから・・・」
「え・・・大丈夫じゃね？智花に告白されて振る奴いたら俺がバックドロップ１２回かけた後にコブラツイスト３２回かけて崖から突き落とすよ」
今さらっといっちゃったけど流石にバックドロップ１２回は無理、コブラツイストも。できないわけじゃないけどさ・・・

「え・・・・？本当に？」
「おう。ほんとほんと。智花振るとか頭おかしいからね。死んでもいいレベルだと思うよ」

智花には見えないだろうけどいまいい顔でいった。満面の笑みだった。
「え、じゃあ・・・その・・・好きな人なんだけど・・・」
「遠慮すんなよ。はっきり言えって・・・あー家ついちゃった。話はまたあとでな・・・・って智花？どうした？」
智花がうつむいたまま震えている。どうしたんだ？おしっこか？
「智花？どうした？・・・・・・おしっこか？」
「！！！！！・・・・・・・お、お・・・」
「なんだやっぱりか。はやくいってこいよ」
そういって自転車を元あった場所にもどそうとしたら・・・
「お兄ちゃんのバカあああああ！！！！」
「えええええええ！！？？」
智花は叫んだ後にまるで銃弾のような速さで家に飛び込んでいった

「・・・智花・・・あんな声出せたのか・・・」
智花の隠された一面を見る事ができた。
ていうかこれは智花との距離が縮まったと見て間違いないだろう。
嫌っている奴にあんなに大声でバカっていえるはずが・・・・・・
俺バカっていわれた・・・

家

「ただいまー」
俺は嬉しいやら悲しいやら、複雑な気持ちで家の中に入り帰宅した事を告げた
「おかえり恭平・・・・智花になにかした？手を洗ったら泣きながら部屋にいっちゃったわよ？」

泣いたの!?なして!?

「うーむ・・・なんでだろうなぁ・・・あれ?智花トイレにはいってないの?」

「え?どうして?」

「いや、だって・・・智花家についたらうつむいたまま震えてたから・・・てっきり小便したいのかと思ったんだけど・・・ちがったみたいだな」

「それで恭平?智花に『おしっこしたいのか?』なんてこと聞いてないでしょうね?」

「ん?よくわかったな。いったけど・・・ヒィ!!!」

情けない声をだしてしまって恥ずかしいが今はそんな事を言っている場合じゃない。母さんが・・・背後に鬼を召喚してる!!

「女の子にそんなこと聞くなんて・・・恭平!謝ってきなさい!謝らなかったら晩御飯ぬきだから!」

「わかりました・・・」

どうやら俺は重大なミスを犯してしまったようだった。そうだ。女子にあんなこときくなんてタブーだった。俺とした事がなんて単純なミスを・・・・

「と、智花〜・・・入っていいかー?」

「・・・うう・・・うん・・・・」

めっちゃ泣いた後だ・・・声枯れすぎだろ・・・

俺は智花の部屋に入り、目的の言葉を告げる。

「あのさ・・・悪かったな」

「ぐす・・・なにが？」
えー・・・謝る内容って一つしかないでしょうに・・・
「その・・・家に入る前にあんなこといって・・・ごめん」
「・・・それはもういいよ。だけど・・・」
「だけど？」
「お兄ちゃん・・・私の話し最後まで聞いてくれなかった・・・」
「・・・・・うん」
「聞いてくれる？」
「おう」
話しっていうと好きな人のことだろう。俺も気になっていたのだ、早く名前をきいて埋めにいかなきゃならんのに・・・

「その・・・好きな人なんだけど」
「昔からその人のこと好きなんだってな・・・特徴教えてくれるか？」
「じゃあ・・・言うね？」
俺は智花が次の言葉をしゃべるまでずっと待っていた。

「・・・・・髪は少し長めで、目にかかるかどうかっていう長さで・・・身長はすごく高いの。前まではちょっと怖い雰囲気だったんだけど今は昔みたいな優しい性格にもどってくれたんだよ・・・」
「ふーん・・・・全然わからねえ」
「ふえぇ！？うぅぅ・・・・恥ずかしいけど・・・・今いわなきゃチャンスがなくなっちゃうかも・・・！」
「・・・？智花、どうした？」
「その好きな人の名前なんだけど！」
おお！？ようやく核心にふれるぞ！さあはやくゲロッちまえ！そいつの家に乗り込まなきゃ！

「恭平っていう・・・・・・名前で、その・・・・・・お兄ちゃん、で、す・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

why?

え？まじで？うっそまじで？いや、ちょ、ま・・・え、ちょfdj

jkwjhdglふじこffgぶえwsd？？？？？

「え、いや・・・なんつーか・・・その・・・えぇー・・・？」

「こ、告白したら断らないっていったよね・・・？」

えー・・・いや、兄弟で付き合うって・・・・ないわー・・・

「つきあって・・・くれるよね？」

俺がずっとだまってると智花は泣きそうになりながら俺に聞いてくる。涙目で上目遣いいただきました

「えーとだな智花。確かに俺はお前を可愛いって思ってるし、好きだよ。うん大好きだ。・・・でもその好きっていうのは妹としてってことなんだ。お前はまだ小学生だから兄として好きっていう感情を勘違いしちゃってるんだよ、うん、きっと、そう。俺と智花は

血が繋がってないわけでもないし戸籍上も家族なんだ。だからそのーなんだ・・・・・」
長々と、やんわりと、智花の告白をはぐらかそうとしていると智花はいきなり立ち上がった。

「確かにお兄ちゃんのことを兄として好きかもしれないよ？でも、昔から好きだったんだもん・・・無理だよ、いまさらそんな・・・そんな・・・うぅ・・・」
最後までいえずについには泣き出してしまった。これ俺が悪いの？うん、俺が悪いな。

「よ、よーし！じゃあこうしよう。しばらく様子をみて、智花の好きが家族としての好きだったらそれはそのまま、恋愛感情てきな意味で俺の事を好きだったら・・・そんときは・・・えーと・・・そのときだ」
自分でもずるい逃げ方だってわかってる。でも混乱してるんだ。こんなに可愛い妹から好きだっていわれたら混乱だってするだろ。
「・・・わかった・・・でも・・・・」
「な、なんだ・・・？」
「私、がんばるから・・・」
え・・・・・・
「お兄ちゃんに振り向いてもらえるまで！がんばるから！」
おいまて。智花お前考える気ないだろ。考えて結論だせっていって振り向いてもらうようにがんばるからってどういうことだ。

「えー・・・・・・まあ、今はそれでもいいから・・・飯いくぞ」
「うん！」

まあ・・・結果的に仲良くなれたからオッケーってことで・・・

想いの告げ方（後書き）

智花に告白させちまった・・・

やりたくてやった。後悔はしていない

誘拐されたらしい（前書き）

今回の終盤は完全オリ展開です。
納得のいかない人は次回は飛ばして読んで下さい。

誘拐されたらしい

☆男女対抗戦特別ルール☆
・試合時間は前後半６分ずつの計１２分（通常の半分）
・両チームとも途中選手交代は不可（女バスが不利にならないため）
・累計５ファウルによる選手退場は無し。そのかわり一人の選手が通算で五回以上ファウルしてしまった場合、それ以降のファウルはどんな状況であれ必ず相手に二本のフリースローが与えられ、その上ボール権も相手に移る。

火曜日。今日は体育館が使えないから個人練習をやるって昴がいってた。ていうか昴の奴がバスケ教えてくれない。学校で幼馴染っぽい人とイチャコラしてるときに頼んでみても駄目って言われた。次の授業は寝た。

で、そんなことは今はどうでもいいわけです。真帆と紗季の練習場所が確保できたらしいからそっちはそっちで勝手にやってもらうっていう話なんだが・・・

今俺どこにいると思う？昴の家だよ昴の家。
なんか智花が学校から家に帰らないで昴の家に行くって俺の携帯に電話がかかってきたんだよ。俺はもちろん了承したさ。だって呼んだ本人の真横にいたしね。
本人の目の前で『いくな、家に帰って勉強してろ』なんていえるわけねえじゃん・・・

で、その智花が俺に電話かけてきたときの言葉がこれだよ？

『あ、お兄ちゃん？あのね、今日昴さんのお家にお邪魔するからすぐには帰れないってお母さんにいっておいてくれると嬉しいな、お兄ちゃんに会えないって思うとすっごく寂しいけど・・・男子バスケ部に勝つためだから。ごめんね？』

なにこれ。

別に電話してくんなとは言わないよ、念願の夢が叶って智花と仲良くなったんだもん。

でも仲良くなったきっかけがあれってどうよ？だめでしょ？

で、今日家に帰っても何もする事がないから昴に頼んで俺も家にあげてもらうことにした。

家について智花も昴の家に到着した時は智花が結構驚いていたが

『おー智花、よく来たな』

っていったらニコッて笑って嫌な顔一つ浮かべなかった。まあそりゃそうだろうけどさ・・・

「え・・・？真帆達にルール教えないんですか？」

「うん、今教えても逆に自分のバスケができなくなっちゃうかもしれないからね。だから今はあえて教えない。」

「そ、それで勝てるんですか？」

「うん・・・ある一つの条件をクリアできれば・・・のはなしだけどね」

「愛莉、ですよね？」

「うん・・・バスケやってる身としては背が高いのが嫌なんて普通考えないからね。・・・でも４月生まれだから背が高いってやつ、

いつからあったんだろう？」
「私が来たときにはもうすでにありましたからだいぶ前から言われてたんだと思います。あ、でも愛莉勉強はすっごくできるんですよ？決してその・・・そういう子ではないんですあれを真に受けるのは一種の防衛本能みたいなものだって紗季がいっていました。」
「へー・・・・・ん？まてよ？これは・・・いけるかもしれない」
「え・・・？昴さん？」

「たとえばさ、愛莉に背が小さい人がやるポジションがセンターだっていったら信じるかな？」
「それは・・・無理だと思います。愛莉も部内で一番自分の背が高いって自覚してますし・・・なにより初めて会ったときに私がセンターの役目を教えてしまいました・・・」
「うーん・・・そんなに愛莉は身長のことに敏感に反応しちゃうのか？」
「え、たぶんそうですけど・・・誰かに週三で筋トレしたら身長が伸びにくくなるって教えられてからずっと続けてるって言ってました。私はそれたぶん意味ないよ？ってそれとなく伝えたんですけど聞く耳をもってくれなくて・・・もう愛莉の気の済むまでやらせればいいかなって思って・・・別に体を鍛える事は悪いことじゃないですし・・・」
「ふむ・・・他にはそういうエピソードとかある？」
「ええと・・・好きなものが小豆で、嫌いなものが大豆っていってました」
「んんー・・・一種のゲン担ぎみたいなもんか・・・そうなると・・・・よし！恭平！ちょっといいか・・・・って恭平？」

「・・・・え？何？今話しかけた？」
なんだよ、二人で仲良く話してりゃいいだろ・・・
「いや、その・・・頼みたい事があって・・・ていうか何でそんな

暗いオーラだしてんだよ。怖いからやめてくれ」
怖いからやめてくれだと？ふ・・・そんな思ってもいない事を・・・
俺なんかいてもいなくても同じだろうが

「おーい・・・恭平？」
「いや、もうまじでいいからそういうの。可愛そうだとおもって話かけてくれてんならやめてくれる？俺そういうの一番心に響くから」
「ああーまためんどくさいのがでてきたよ・・・そんなんじゃないって、大体なんでそんなにへこんでんだよ」
「お前ら二人がナレーションとかいれずにバンバン話ってからだよ！なんだよ俺！俺ここにきて何で空気になってんの！？わけがわからないよ！！」
思ってる事を全部ぶちまけたら昴は本気で引いてた。なんで？
「お前ナレーションとかわけわからんこというなよ・・・いまのは本気で引いたぞ・・・で、頼みたい事があったから話かけたんだけど駄目だったのか？

なんだ・・・頼みたいことか・・・それならそうとハッキリ・・・・・・・・は！！！

「ま、まさか焼きそばパン買って来いとか言うんじゃないだろうなぁ・・・」
「言わねえよ！お前どうせ明日も練習見に来るだろ？そんときにいってほしい事があるんだ」
なぜか智花を部屋から出して昴は俺に話しをしだした

翌日の部活中

「ん・・・？おーい愛莉」
「ひゃ、ひゃい！なんですか、恭平さん」
「なんか背縮んでね？２ｃｍほど」
ピキッ！っと空気が凍りつくような音がした。おそらく愛莉を除いた女バス４人が放った空気だろう。あのひなたまで凍りつくほどやばいワードなのか？身長って

「ほ・・・ほ・・・・・・・・本当ですか！？」
「本当ですさ」
なんだ本当ですさって。ていうか愛莉これ信じちゃうのかよ。どんだけ身長のことで悩んでんだよ。
お兄さん心配だよ

「なんかいつもより縮んで見える。まあ俺はいつも愛莉のことは小さいって思ってるけどな」
「えへへ実はこのまえお父さんに頼んで特注のベッドを作ってもらったんです。競馬の騎手さんが夜の間に身長をのびなくするためにタンスの中で寝たと言う話を参考にしてマットを私の身長ぎりぎりに小さくして周りを板で囲ってしかも上から蓋をできるようにしてもらって・・・すごい、もう効果がでたんだ！」
いや出るわけないけどねそんな短時間に。ていうかそんな話どこできいたんだよ

「よーし！今日も練習がんばるぞ！」
すごいな・・・こんなことでやる気あがっちゃったよ・・・

月曜日に愛莉が守備の練習をしているときにこんなことがあったらしい

『愛莉には守りを練習してもらう。といっても今日はなにもしなくていい、ゴールの少し手前・・・そうそこらへんでＯＫ。もう少し腰をおとしてその態勢のままじっとしていてもらうことが今日の練習だ』

『で、智花。君はアウトサイドから愛莉の目の前までドリブルしたらターンかドライブで抜いて、シュートを打ってくれそしてそれをなんども繰り返す。ただし毎回必ず全力を出してくれ。
・・・愛莉。今いったとおり智花が体すれすれのところまで走ってくる。がんばってそこから動かないで。目も開けてること』

で、この練習をして愛莉があまりにも怖がって尻餅をついてしまったりしたため練習にならなかったらしい。

今日もまた月曜日と同じ練習をしたのだが愛莉は怖がってはいたものの智花から目をそらしてはいなかった。気分の問題なんだろうな。こういうのって。
しばらくして練習も終わり、皆家に帰っていった。

試合まで、あと４日。

木曜日、今日の放課後は昴の家で練習会をするらしい。
俺は今日も数学の時間居眠りしてしまったので宿題を皆より多くだされていた。今回の倍増量はなんと2倍！皆さん！お得ですよぉ～・・・・全然・・・お得じゃねえよ・・・
なによ2倍って？深夜の3時になっても終わらねえよ・・・あのダンディな先生は何考えてるかわからないよこんちくしょう・・・

夜の8時。非通知の電話が家にかかってきた。
セールスかなにかだろうなと思って無視していると2分程ずっと鳴り続けていた。流石にしつこいと思って俺はセールス（仮）の電話に応じることにした。

「はい、もしもし」
俺は不機嫌そうな声をだして電話に応じるといかにも悪そうな声が電話口から聞こえてきた。

『へへへ・・・おう、湊か？久しぶりだよなぁ・・・中学卒業してからもう2年たってるしな、お前は忘れてるかも知れねえな』
「ええと・・・すいませんいたずら電話ですか？」
こんな時間にいた電とは・・・暇な奴らもいるもんだな
『ちげえよ、全然違う・・・湊ぉ、お前中学の時に1年のクセに髪の毛染めてきたよな・・・そのことがきっかけで3年に目ぇつけられて大変だったよなぁ』
「・・・なんで知ってるんですか？・・・お前まさか・・・」
『へへ・・・やっと思い出したか・・・？俺だよ俺。3年の高橋・・・』
「おまえ鈴木か！？こんにゃろうお前よくもぬけぬけと・・・お前が髪の毛染めようぜって提案してきたせいでなあ！妹から怖がられてたんだよこっちは！お前のせいで妹との仲を直すのにどれだけ時間をかけたか・・・」
『鈴木じゃねえよ！高橋だよ高橋！！お前の可愛い妹ちゃんをあずかってるからよぉ、今いう場所に一人でこいや』
「な・・・！？お前ふざけんじゃねえぞ！！」
『ふははは！いいぜその反応。もっと俺のこと楽しませてみろや・・・じゃあ○○倉庫までこいよ。妹ちゃんと遊んでまってるぜ、ははははは！！！』
「てんめぇこらぁ！！！智花になんかしたらゆる・・・くそ！きりやがった！！」
急がないと・・・喧嘩になるだろうし前に買っておいたスタンガンももっていかないと・・・ああーバッテリー切れてる！そうだった・・・この前あそんでてバッテリー切れちゃったんだ・・・
「ね、ねえ恭平？智花がどうしたの？・・・さっきの話聞いてる限りだと・・・もしかして」
「いや・・・なんでもないよ母さん。父さんにはなにも言わないでくれ。ちょっと昔の友達が遊びに誘ってきたから、つきあってくる

わ」
「ねえ、やっぱり警察に・・・」
「駄目だ！俺一人でなんとかするから・・・母さんは何もしないでじっとしててくれ。すぐに帰ってくるから」
母さんは納得いかない表情をしていたが渋々納得してくれた。くそ・・・どこの漫画だよこの展開・・・ていうか智花たちは昴の家から美星先生の車で送られてくるんじゃなかったのかよ・・・

「あそこの倉庫まで走れば・・・１０分か・・・でもそれは普通の奴のペースでだ・・・陸上推薦なめんなよこのやろう・・・！！」
俺は動きやすい服に着替えて倉庫へと走り出した。

誘拐されたらしい（後書き）

智花が誘拐されたというオリ話です。

思いつきで書いてしまいました。

決戦前夜（前書き）

今回はすごい短い上に関係のない話が前半でてきます。

別にストーリー上本当に関係なかったのですが一応主人公の身体能力の程を見せておこうかと思って書いて見ました。

決戦前夜

「とぉもかあああぁあ！！！無事かあああああ！！！」
俺は全力で倉庫の重い扉を開け放ち、叫び声に似た声で智花の無事を確認した

「へへへ・・・よぉ湊ぉ・・・待ってたぜぇ」
最初に視界に入ってきたのは趣味の悪いドクロ柄の服に赤い髪の毛の男。ミスマッチだろあれ。

「久しぶりだな・・・えーと・・・・・た、たか・・・タカシ」
さっき名前聞いたばっかりなのに名前を思い出す事ができなかった。自分の記憶力の無さが情けない
「タカシってだれだよ！高橋だよ！これからお前は俺の下僕になるんだから憶えておけや」
「はあ？下僕だぁ？なに寝ぼけたこといってんだふざけるんならその髪の毛と服だけにしろ」
「ああ！？てめえ今なんつったこらあ！・・・今からてめえはボコられるんだからよ・・・口には気ぃつけろや」
・・・・・・？ボコられる？何をいってるんだこいつは

「ええーと・・・高橋先輩。智花はどこっすか？なんかしてたらお前の事を東京湾に沈めないといけないんで・・・智花だしてください。早く、ほら早くしろよ」
あくまで冷静に・・・いや冷静じゃないかもしんないけど冷静にだ・・・
「ふはははは！！！！お前信じてたのかよ！お前の妹の顔なんざ見たことねえし！ここには妹ちゃんはいませんよ～、お兄ちゃん。はははははは！！」

え・・・？智花がいない？・・・・・まあそりゃそうか。美星先生の車でおくられてくるよな。普通に考えたら。そこまで頭がまわらなかったな・・・完全にミスった

「えーと・・・智花いないんだったら帰ります。さようなら～」
倉庫の出口の所までゆっくり歩いているとガリガリな男が立ちふさがった。
「へへ・・・今日はかえさねえぜ・中学の時に高橋さんにナマやってくれたらしいじゃねえか・・・・高橋さん！こいつやっちゃっていいんですよね！？」
なんだこいつ・・・やっちゃっていいんですかって・・・

「ああ・・・お前ら！気の済むまで殴っていいからな！」
『おおおおおおお！！！！』
え・・・？なんかいつのまにか囲まれてるんだけど・・・面倒くさいな

「じゃあまずは俺からいきまーす！」
「おいまじかよ！じゃあ次俺な！」
どうやら最初に俺の相手をする奴は先ほどのガリガリガリクソンらしい。

「はぁ・・・家に連絡しとくか・・・」
ｐｒｒｒ・・・ｐｒｒｒ・・・
「てめえ！何余裕こいてんだ！！」
ガリさん（今命名）が殴りかかってきたので横に避けて背中を軽く蹴ってやったら自分から吹っ飛んでいった。不良って見た目だけでクソ弱いんだよね。

「おい！てめえ上島になにしてくれてんだ！」
先ほどのガリさんは上島とかいう名前らしいな。憶えるきないけど
「おらあああ！！」
「あ、もしもし？おー智花帰ってる？よかったよかった。」
電話で話しているあいだずっと不良達の相手をしてやっていた。

話してる途中に不良達が向かってきたので蹴りだけで倒しているともうほとんど地面に倒れこんでいたて、残りは高橋だけになっていた。弱すぎて3分もたたずに全員倒してしまったようだった
「うん。あー大丈夫大丈夫。うん、だから昔の友達と遊んでるだけだって。え・・・・？今の声？いやいや友達が犬の糞踏んじゃったからさけんでどっかいっちゃった。ははは」

「く・・・・てめえ・・・・少しは手加減しろやあ！」
高橋が俺に向かって吠えてる。あれか、負け犬遠吠えってやつか。ざまぁw
「うん。もうちょいで帰るから。じゃねー」
「きいてんのか湊ぉ！！」
「いやー・・・手加減してあのレベルだったていうか・・・あんた達がよわすぎっていうか・・・なんかもう見てらんないレベルで弱

いよ？」
実際、本当に弱い。不良ってこんなもんなんだな・・・カスだよまじで
「じゃー・・・どうする？俺としてはもう腹減ったから家に帰りたいんだけど・・・」
「な、なめんじゃねえぞ・・・あのときの俺とは違うんだ・・・」
あのときって・・・俺あんたのことさっきまで知らなかったんだけど・・・タカシっていっちゃうくらい知らなかったんだけど・・・
「うーん・・・じゃあどうするの？負けにくる？」
「うるせぇ！へへ・・・流石に刃物だされるとお前もビビるだろ？」
そういって高橋はサバイバルナイフをポケットから取り出した。お前刃をむき出しのままポケットに入れるって・・・バカかよ。危ないよこのやろう

「入院させてやるわあああ！！」
高橋はさけびながらつっこんできた。不良ってよく大声だすけどうるさいだけだよね。
俺は高橋の攻撃を華麗に避けて（ここ重要）後ろから高橋の腰をもってバックドロップを決めた。

「はぎゃあああ！！！」
なんだこの声。情けなwww
「いやー久しぶりだったから決まるかどうか不安だったんだけど決まってよかったよ。じゃあこのナイフは折っとくね」
バキっと音をたててナイフは折れた。脆い・・・安物買ったな？
「くそ・・・憶えてろ・・・」
でたw捨て台詞でたw憶えとくつもりなんてないんだけどねw

「こんど俺のこと呼び出したりしたら二度と太陽拝めなくしてやるつもりですから。そのへんよろしくお願いしますね。じゃあ俺はこ

のへんで～」

ふう・・・やっと家に帰れるよ・・・

家

「お、お兄ちゃん！大丈夫？」

家についたらさっそく智花が走り寄ってきた。返り血をみて驚いているのだろう。

「ああ、気にするな。それより飯だ飯。腹減っちゃったんだよね」

「うん！じゃあお母さんにいってくるから待っててね？その間お風呂に入ってて」

「ああ。わかった」

「いてててて・・・やっぱりいきなり走るモンじゃないな。足がいてえ・・・」

洗面所で服を脱いでるときに足に痛みがした。

「にしてもあのタカシはなんだったんだろうな・・・中学の時のことなんか全然憶えてないぜこのやろう・・・タカシってマジで誰だ・・・？」

風呂はいったあとに飯食って寝た。

金曜日。今日は祝日で学校は休みなのだが美星先生のおかげで体育館が使えるようになった

チームでオフェンスやディフェンスの練習をしたりしてとても有意義な練習時間だった。

次の日の土曜日は日曜日の試合に備えて休みなのだが、智花は昴の家に練習しにいった。

俺は邪魔になるだろうしいかなかった。

・・・足も痛いし

それまた次の日、日曜日だ。

今日はいよいよ男バスとの試合。智花は朝から緊張しているようだったがこの子なら大丈夫。

なんたって俺の、妹だからな！

決戦前夜（後書き）

ああ・・・短い・・・
もう少しで３万ＰＶいっちゃいます！
読んで下さってる方々に感謝！！

作者は喧嘩なんて小３以来やってなかったのでちゃんと喧嘩シーンかけてるか心配です（心配するほどボリュームないけど）

感想いただけると嬉しいです

ハーゲンダッツとかガリガリ君（前書き）

パソコン没収されてました・・・

しかも待たせてしまったわりにはあまり出来がよくありません。

そんなことよりＰＶ４万突破！こんなに読まれてていいのか俺！！

ハーゲンダッツとかガリガリ君

今日は智花の大事な試合の日だ。

で、俺は今慧心の体育館にいるわけさ。

俺が何をいいたいかってそりゃあ一つだけだよ

さっき美星先生と話してたカマキリみたいなやつは誰かってことだ・・・

「なあ昴」

「なんだ恭平」

「あれ、だれだ？」

「・・・・・わからん」

昴もカマキリ（仮）さんの事をしらないようだ。困ったな

「なあ紗季」

「はい。なんでしょう恭平さん」

長くおろした髪の毛にアイガードをした部の頭脳こと（俺が勝手にそう呼んでる）永塚紗季さんに聞いて見た

「あのカマキリだれ？」

「すごい・・・よく先生のあだ名見破りましたね・・・」

え。あの人のあだ名カマキリなのか・・・？

「あの人は男バスの顧問の通称カマキリです」

カマキリはカマキリ（仮）からカマキリ（正）になったぞ！

「へー・・・カマキリか。面白いあだ名だな」
「ふふ、そうですか？確かにカマキリって変なあだ名ですね」
「そうだな。っていうか男バスって強いの？弱そうな奴ばっかに見えるんだが」
「えーと・・・一応地区大会で優勝したチームです」
「ほー・・・」
「おはよう皆、最後の打ち合わせがしたいんだけど、女バスだけになれる場所ってないかな？」
俺が紗季と談笑していると昴が呼びかけてきた。

「おはようございます。体育倉庫でいいですか？散らかってて汚いですけど」
「皆さえよければ問題ないよ。いこう！」

「・・・あれ？美星先生、こないんですか？」
「作戦知っちゃったらつまんないだろ？ていうかあんたの先生になった憶えはない。みーたんと呼べみーたんと。にゅふふ」
えー・・・なに言ってるんだこの人・・・
「遠慮しておきます、美星さん」
「うむ。それでいいのだ」

美星さんと分かれて俺も体育倉庫に向かって歩き始めた

「おい」
「うい？」
あるいてたらこの前昴に小便かけようとしてた少年が声をかけてきた
「あんた、女バスとどういう関係なんだ？」
・・・・なんだこいつ、女バスの誰かのこと好きなのか？智花の事がすきなら俺を倒して行けこの野郎

「・・・・こういう関係だ」
俺は自分で自分の事を抱きしめ腰をくねらせて答えた
「うえぇ！？まじかよ！あいつよりロリコンの奴見つけた！」
「あいつって昴のことか。ていうか冗談に決まってるだろ、俺は湊恭平。智花の兄だ」
「へー・・・・湊って兄ちゃんいたんだな」
「・・・・む？貴様もしや」
「な、なんだよ・・・・」
俺にはわかる・・・こいつにはある独特の雰囲気が流れている・・・
同じ境遇の俺にはわかるぞ

「・・・お前、妹いるだろ」
そう、こいつには兄特有の『まったく俺の妹には手を焼くぜ』オーラが流れている・・・・！
「な、なんで知ってんだよ！まさか俺の妹を狙ってんじゃ・・・・・」
「いや、それはない。ただ・・・・」
「た、ただ・・・・？」
「お前にも・・・なんかこう、兄としての威厳てきなものがオーラとしてでてる」
「え・・・・あ、そうかよ。」
「おう。じゃあな少年」
俺は少年に手を振って体育倉庫へと急ぎ足で向かった

「ういーっす。おくれてすまそー」
俺が体育倉庫についたときには愛莉と昴がみつめあっていた。
「え・・・・昴？」
「恭平、遅いぞ」

「悪い悪い・・・っていうかなにやってたの？」
「え？ポジション伝えてただけだけど・・・」
「ポジション伝えるためにそんなにみつめあう必要があるのかーー！このやろう昴！・・・羨ましいことしやがってえぇ」
「みつめあってねえよ！な、なあ愛莉！」
「え！？えーとその・・・ふぁうう・・・」

結論　　愛莉可愛い

「それはいいけど俺がなんでここに来たかわかってるか、みんな」
『？』
全員が全員疑問に思っているようだった。しょうがないな、教えてやろう・・・

「写真撮りにきた」
「恭平お前またか・・・少しくらい我慢できないのかよ」
「無理だ！真帆ーはいチーズ」
「いぇーい！」
「真帆もあんまり乗っちゃ駄目だぞー・・・」
さすが真帆・・・俺が認めたロリっ子だな。ノリがいい

「お、お兄ちゃん・・・そういうのはあんまりよしたほうが・・・」
「む？なんだ智花、嫉妬か？」
「ち、ちがうもん！みんなそういうのは嫌かなーって思っていっただけだもん！」
「おー。きょうへい、ひなも撮ってー」
「ははは、よかろうよかろう。試合前に全員の写真とって試合が終わった後に皆が勝利の喜びに満ちた顔を写真に収めてしんぜよう」
「はい。よろしくおねがいします恭平さん」
「そんなにかしこまるんじゃないよ紗季。リラックスして試合にの

ぞむのだ！」
「恭平。皆に何かいってやってくれよ」
昴が俺にいってきた。もう紗季にいっちゃったよこんちくしょう
「えーとだな・・・とりあえずあんまり硬くなるな。体動かなくなるからな、元陸上部からの助言だ」
『はい！』
皆いい返事を返してくれた。いいこともなにもいってないんだけどな・・・ていうか俺いつのまに皆になつかれてたんだ・・・あ、カバディで真帆おっかけたときか。

「よし！じゃあ皆行こうか！勝とうな、絶対！」

「あー、皆待ちたまえ。一ついい忘れてたことがありましたよ」
『？』
昴がいい感じに送り出そうとしてたところに申し訳ないのだが・・・
これだけはいいたい

「勝ったら昴の家で打ち上げやろうな。俺がハーゲンダッツを買ってやろう」
「うおー！まじかきょーへー！燃えてきたぞー！」
真帆・・・お前ハーゲンダッツでつられるってどういうことだ
「恭平、お前勝手に約束すんなよな・・・まあ俺もそのつもりだったけど」
「そうだろうそうだろう。ちなみに昴。お前はガリガリ君だ」
「え？俺にもくれんの？サンキュー」
「・・・まあ、コーチ続けてくれたし。ていうか勝たなきゃ意味ないけどな」
「勝つよ。あの子達は・・・絶対に」

「負けたら、バックドロップだかんな」

ハーゲンダッツとかガリガリ君（後書き）

感想よろしくお願いします。

ていうか美星先生の『たかむら』って漢字が変換できない・・・誰か教えて下さい

決着（前書き）

秋の電撃文庫祭２０１１にいってきました！
もちろんロウきゅーぶ関連のグッズを一通り買いましたよ。
すごく面白かったです

今回は長い割に原作と酷似しているので不快と感じる方は飛ばしてください

決着

試合開始１０分前。
こういう待ち時間ってすっごく長く感じるよね

「あーそわそわするぅーもう駄目だわトイレいってくる」
「またかよ恭平・・・お前何回目だよ？トイレいったあとにお茶ばっか飲むから・・・ていうかそんな早く小便に変換されてしまうのか・・・」
昴のいったとおり。俺は5分くらい前からそわそわしていてお茶をのんではトイレに行きの繰り返しだった。ちなみに今回で４回目。
そこまでなんだけどね

「お兄ちゃんがなんでそこまで緊張するの？」
我が妹の智花が呆れ顔でいってきた。呆れ顔をすかさずメモリーに保存。

「ちょ、今なんで写真撮ったの！？」
「いやー、俺が試合出るわけでもないけど緊張しちゃってさ・・・」
「写真の所は無視なんだ・・・」
自分でもなんでここまで緊張してるかわからない。ていうかさっきから貧乏ゆすりが止まらないんだがどうしたらいいかなこれ？

「おー。きょうへい。手のひらに『人』ってかいてのむときんちょうしないよ？」
部内のマスコット（全員マスコットみたいなものだが）袴田ひなたがアドバイスしてくれた。愛い奴め
「ありがとうひなた。やってみるよ」
人ってかいて飲み込み人って書いて飲み込み・・・

結論を言おう。

まったく収まらない。逆に緊張したくらいだ。
あんな太陽みたいな笑顔で見つめられてたら緊張もするわ

だがここはひなたの顔をたてるため・・・俺はあくまで冷静にひなたにいわなければなるまい・・・
「ありがとうひなた。結構緊張収まったよ」
「おー？でもきょうへい震えてるよ？」
「はは、幻覚だよきっと。あと試合中怪我したらいけないからストレッチはよくしておくといい。」
「おー。わかった。いまからともかとやってくる」
「お、おーやってこいやってこい・・・」

危機は・・・去ったか・・・
いや人様の事を危機だなんて失礼だがひなたがもし自分が教えたおまじないがきかなかったとわかったらどうなると思う？
・・・想像するだけで恐ろしい（本当は想像できてない）

「恭平さん優しいですね。ひなたを傷つかせないために・・・」
部内の頭脳の紗季が俺の行動を褒めてくれた。小学６年生に褒められる俺・・・（高校１年生）
「ひなたが悲しんでるところとか見たくないしね。まさしく誰得って感じだよ。ああ、皆の悲しんでるところも見たくないし、悲しま

せた奴がいたら血祭りにあげてやるけどね」
「血祭りは流石にやりすぎですけど・・・やっぱり恭平さん優しいですねトモが好きになるのもわかります」
ダダダダダ・・・
「好きじゃないから」
智花さん、なんで会話の内容聞きとれてるんですか？
あと自分から告白しといて真顔で好きじゃないからっていわれるとお兄さん泣いちゃうカモ☆

「はは、は・・・傷つくわ・・・割とまじで・・・」
「ええ!?お、お兄ちゃんごめん・・・」
「いや、トモ。流石にあれは傷つくと思う。恭平さん風にいうなら割とまじで」
「ん？きょーへー泣いてるのか？」
金髪ロリの真帆が心配してくれた。ていうか一番恋愛の話に興味ありそうな顔してるくせになに悠長とストレッチしてんだ。フォローしてちょ

「泣いてねえよ・・・泣いてねえよ!!」
「なんで二回いうんだよ!ビックリしたじゃんかよう・・・」
え、なにこの真帆。可愛い・・・いや普段から可愛いけど
「めんごめんご・・・てか愛莉は？」
「あれ？そういえば愛莉いないな。ヒナー。アイリーンどこにいるかしってる？」
「おー。トイレいってくるっていってた」
トイレ・・・だと？

いやいや流石にトイレ盗撮とかはやらんが女子トイレってフレーズの響きいいよね。なんかこう・・・グッとくる

「でも試合開始まであと2分だぞ。誰か呼んできた方がいんじゃね？」
「よし！きょーへー出撃！」
チョップしてやった
「いたー！こらきょーへー！私のテンサイ的な頭脳をたたくなー！」
「俺に女子トイレいけっていったお前が悪い。ていうかテンサイって・・・頭おかしいんじゃないのか？」
「そんなことないよ！もう怒った！コアラアタックだ！」
「いやまじすんませんでした窒息するんであれだけはやめてください」
土下座した。
「いや別にそこまでしなくていいけどさ・・・私がアイリーンみにいってくる！」
「いてらー」
さて、この場で空気になってるのだーれだ？
正解はすばるんです。美星さんはよくわからん本読んでるからスルー。
「昴・・・お前もうちょっと会話入ってこいよ。」
「いやだって話すこととかないし・・・恭平が皆と話してて皆楽しんでるからそれでいいかなって」
「え？なになに？そんな卑屈になんなよ。めんどくせえな」
「いつもめんどくさいのはお前だけどな」
おっと俺のスピリットにクリーンヒット。どうしてくれる昴このやろう

「おーいアイリーンつれてきたぞー」
「ま、真帆ちゃん・・・引っ張らないで・・・」
真帆につれられてきた愛莉は少し顔色が悪かった。なにかあったのか？

「愛莉。顔色わるくね？大丈夫かよ」
「おー。あいり、ぐあいわるい？」
「試合前なのに・・・昴さんどうしますか？」
お、やっとここで昴の出番か。さあコーチさん。どうなんですか！
「うーん・・・別に風邪ってわけでもなさそうだしな・・・よくわからないかも」
おい駄目コーチ。投げ出すな
「愛莉・・・大丈夫？無理しなくていいんだよ？」
マイシスター智花が愛莉を心配してる。心優しきエンジェルさん。
「ううん・・・これから試合だって思うと不安で・・・でも大丈夫だよ！試合、ちゃんとするから！」
心が強いんだか弱いんだか・・・愛莉は自分で不安を克服しちゃったみたいだった。
「皆。そろそろ時間だよ。気合いれていこうね！」
『はい！』

そしてコートに全員集合し、試合開始のホイッスルが鳴った

★

女子０―０男子

審判がジャンプボールの指示を出す。

ここは愛莉がでるべきなのだがなぜか智花がでた。
その理由は簡単だ。愛莉はまだ身長のコンプレックスを克服できていない。
自分がジャンプボールに出されれば身長が大きいからお前がやれといわれているようなもの。さすがに出られる状態ではない

男バス顧問のカマキリさんはフンっと鼻で笑って試合の様子を眺めていた。
舐めやがって、目にもの見せてやる・・・って鼻が思ってると思うよ

パッと審判の手から空中へとボールが放たれた。
智花がボールをはじくのか、それとも男バスか・・・

勝ったのは智花だった。
智花は真帆へとボールをはじき真帆が受け取ったボールを智花にリターン
「おねがい！！」
智花はボールを高いところへパスした。まあとれる人は限られてるだろうし打つ人はわかってるよね
「はい！」
愛莉は智花からのパスをうけとりゴールへとボールをはこんだ。
あの身長だし、シュートとかじゃなくてゴールにおいてくればいい

だけだ・・・って昴が今言ってた

「よっしゃ！ナイスアイリーン！」

「愛莉すごいよ！今の感じわすれないようにしてね、どんどんパスだすから！」

「うん、シュート・・・私が・・・うん！がんばる！」

さてと・・・実況役辞めて作戦を実行にうつしますかな・・・

「目標を、撮影する」

「え？恭平・・・なんだそれ」

昴が目を開き驚いたように聞いてきた。まあ無理もないな。今俺が手にもっているのは

デジタル一眼レフカメラ

装備：望遠レンズ（あんま意味ない）

バズーカのような一台のカメラだ。普通の人が見たらドン引きする代物でっせw

「いやー愛莉がどんどんシュートきめてくねー・・・いいよー愛莉いいよー。いい顔してるよー」

「カメラマンかお前・・・まあ・・・愛莉があんだけがんばれたのも、俺が騙してるだけなんだけどさ・・・」

「ちょ、まて昴。いたいけな少女を騙してんのかお前ぶっ殺すぞ」

「昴、どういうこと？私にも説明して」

おっと美星さん。ここで乱入してきましたか。ずっと黙って試合みてたのに

「試合開始の15分前にちょっとな・・・」

「いや、いいから教えろってば・・・そろそろ美星さんのチョークスリーパーがとんでくるぞ」

「そうだぞ昴。早くおしえろ」
「なんで二人していうんだよ・・・まあいいや、俺が愛莉にいったのは大体こんな感じだ」

★

試合開始１５分前

こっから昴のナレーションw

俺は皆にポジションの発表をした。
真帆はパワーフォワードで
紗季がシューティングガード
ひなたちゃんはポイントガード
こんな感じで３人のポジションはきまったわけだ。

肝心なのが愛莉のポジションだろ？
智花が初めて愛莉とあった時に身長が高い人がセンターをやったほうがいいと説明されてしまってたから愛莉にポジションはセンターっていったら泣き出してしまうと思って俺は考えた

『香椎愛莉』
『は、はい！』
『・・・・スモールフォワード』
『え？』
『智花、以外だろ？自分がこのポジションを任せられると思ってた

のに』
『え、いえそういうことではなくて、いや思ってましたけど・・・』
『確かに愛莉より智花の方がこのポジションに向いてるかもしれない。ただ今回はちょっと冒険しようとおもったんだ』

『わ、私が・・・スモール』
『そう・・・愛莉、君が一番スモールだ』
『一番・・・スモール・・・』
『もういちどいうよ香椎愛莉、スモールフォワード』
『はい！！』
『湊智花、センター』
『え・・・はい・・・』

★

「まて昴・・・・・・・・よく、わからん・・・」
「まあ続きがあるからよく聞けって。愛莉の、スモールフォワードの役目は・・・ゴール下を守ることだ」
「ちょ、ちょっとまって昴。じゃあ愛莉は今スモールフォワードじゃなくてセンターの仕事をやってるってこと？」
「簡単に言えばそういうことだ。申し訳ないけど・・・勝つためにはしょうがない」
「昴・・・お前ガリガリ君抜きな・・・」
「えぇ！？・・・・ま、まあうん・・・わかった」
おい昴wガリガリ君くらいでそんなに落ち込むなよ・・・・可愛く・・見えるじゃねえか（冗談）

途中男バスが点をいれたが問題はないだろう。順調にいけている

女子８－２男子

「よし、みんなよくがんばったね。次もこの調子でいけば絶対勝てる！」

昴が皆に労いの言葉をかけてあとは休憩の時間にした。まあすぐに休憩の時間は終っちゃったんだけど

ピ！

審判のホイッスルがなって男バスからの攻撃。

こっちはディフェンスがきちんとしてないので簡単にゴールを決められた。

８－４だがまだ平気だろう。

今度は女バスからの攻撃だ。

「愛莉！」

智花が愛莉にパスをだして愛莉もボールを受け取る。パスは成功した

「ひゃ、ひゃう・・・」

愛莉にマークが二人ついてそれにビビッてしまった愛莉はその場で止まってしまった。
ここで審判のホイッスルが鳴る。
俺はよくわからんのだがバスケには3秒ルールというものがあるらしい。
で、その3秒ルールにひっかかってしまい今度は男バスから攻めの再開。
そういえば地面に落とした食べ物を3秒以内に拾えばセーフってのがあったけどあれってよくよく考えなくても汚いよね。
男バスはディフェンスもそうだがオフェンスの精度も高く、また簡単にゴールを奪われてしまった。
8―6・・・あと2点差だ

「昴、これやばくねえ？」
俺は多少不安になりながらも昴に聞いてみた。貧乏ゆすりとまらねえ
「いや、大丈夫だよ。むしろこれからだ」
これからという言葉の意味はよくわからなかった。今見ている限りでは愛莉にディフェンスが2人ついてしまいとても愛莉が攻められる状況じゃない。おいそこの男子。胸みながらにやけてんじゃねえよ殺すぞ。

「真帆！おねがい！」
「まってました！」
智花が愛莉ではなく真帆にパスを出した。だが真帆はゴールから結構離れた場所にいる。真帆が男バス相手にドリブルで抜けるとは思えないし・・・どうする気だ？
貧乏ゆすりしながら真帆をみていたらなんとその場でシュート。そ

れはボードにあたるまでもなくネットをあっさりとゆらした
「す、すげえ・・・」
驚いた声をだしながら真帆からカマキリさんに視線を移動させると俺だけじゃなく相手の顧問のカマキリさんも驚いているようだったまあその後にはあっさり点を返されたんだけど・・・大丈夫かこれ？

「マークは三沢だ！あのシュートまぐれじゃない！」
カマキリさんが指示をだすのと同時に真帆にマークが二人つく。これで真帆は封じられた。

「紗季！」
今度は智花が紗季にパスをだす。
「はいはいっと！」
紗季も真帆と同じような場所からシュートを決める。二人ともすごいな・・・ハーゲンダッツ2個分の働きだな
「く・・・バカな・・・」
カマキリさんが悔しそうに声をあげる。悔しそうな顔ってそそるわ・・・いや性的な意味じゃねえぞ

そういえばひなたの出番がないようにみえるのは気にするんじゃない。これはしょうがないことなのだ。初心者の俺でもわかる簡単なこと。
言い方が悪いがひなたは戦力になっていない。それは男バスもわかっているはず。よってひなたにはマークがつかない事になるのだ。
だからさっき愛莉にマークが二人ついたり、真帆にマークを二人つけることができるのだ
ここまでいえばわかるはずだ

愛莉にマークが二人つけば真帆か紗季がシュートを決める。真帆か紗季にマークが二人つけば愛莉がシュートをきめる。見てて気持ちがいいほどにシュートがきまるのだ

ある程度シュートを決めて前半は終了した。

女子１６－１０男子

「いやー３人ともすごいな・・・撮りどころ満載だったわ」
「え！？写真とったのかきょーへー！見して見して！」
「ならぬ！試合勝った後に見ようじゃないか」
「ちぇーいいじゃんかよー」
「別にいいでしょ真帆。今みても後見ても変わらないんだし・・・」
口を尖らせてる真帆を紗季がなだめる。そういえば幼馴染なんだっけこの二人。仲のよろしいことで・・・

昴はまた何もしゃべろうとしないだが今回は会話に入れないとかじゃなくて何か考え事をしている感じだった

「すばるん！何ボーっとしてんのさ。後半も同じようにしてれば大丈夫だよね？勝てるよね？」
真帆が昴に話しかけるが昴は慌てた様子で返事をしていた
なに考えてたんだろうな・・・は！まさか汗をかいた皆をみて興奮していたとか・・・いやまて・・・さっきまで昴は男バスの方を見てた気がする・・・昴の奴・・・・・目覚めたか・・・

昴の今後を考えているとハーフタイムは終了した。これから後半戦だ

「・・・・」
昴は後半になっても考え事をしているようだった。何を考えているんだろう？
友達としていってやるべきだろうか・・・？カマキリはやめとけって・・・いやでも他のことかもしれないしな・・・あー！どうすればいいんだ・・・いやまあ普通に聞いて見ればいいんだけど

「な、なあ昴なに考え事してんだ？」
「・・・今の女バスに足りないものってなんだと思う？」
いきなりそんなことといわれても困るだろうよ・・・でも今の一言でわずかだが確信がもてた。
昴は・・・目覚めてない！！

「んー・・・足りないものか・・・強いて言えば・・・・・胸、か？」
スパアン！
美星さんに蹴られた。超痛い・・・ていうか無言で蹴らないで下さい。怖いから。

「・・・まあその・・・そう意味ではないんだが・・・皆スタミナがないんだよ。1週間でつけられるスタミナなんてたかがしれてるし、もともと智花と真帆以外あまり運動してなさそうなイメージがあるしな。ほら、今も愛莉がついていけてない」

いわれてみればそうかもしれない。
愛莉は走るスピードが落ちてきてマークも外されてる。もうマークをつける必要性はないと判断されたのだろう
愛莉のマークがはずれたことで真帆と紗季のシュートも打てなくな

ってしまう。
しかも紗季まで疲れはじめてきている。真帆は・・・顔に見せないだけでかなりの疲労がたまってるはずだ。どうするんだ昴？
「タイムアウト！」
女子１８－１８男子
俺が昴の今後について考えてた時にかなり点を決められていたらしい。女バスのほうなんかまったく点をいれてない。まじでどうするんだよこれ・・・

「智花、フェイズ２だ。シュートはきめなくていいからなんとか３０秒ゴールを守るんだ。いいね」
「で、でもそれじゃあ」
「智花・・・」
「は、はい・・・」
智花がうつむいてしまった。だがそれもしょうがないことだろう。今の状況で攻めれば逆に点を決められるかもしれない・・・と初心者の俺がいってみたりする

「愛莉も。シュートはしなくていいからゴールに入らずに落ちてきたボールをとってほしい。今度は攻めるんじゃなくて守るんだ。いいね」
「はぁはぁ・・・はい・・・」
愛莉は相当疲れているようだった。酸素スプレーを口にあてて呼吸してる。俺酸素スプレー使ったことないんだけど効果あるのかな？

そうこうしてるうちにタイムアウト終了の合図

ここからは悲惨な光景だった
智花がパスをだしても受け取る側の方が疲労しすぎている。うまくボールをキャッチできずに相手にパスカットされる。

時間稼ぎの作戦は特に意味を成さなかった。逆に失敗に終わりどんどん得点を決められていく。
目も当てられない状況だった。
だが男バスもそう次々とゴールを決められるモンじゃない。シュートをミスったところを愛莉が泣きそうな表情でボールをもぎとった。
後半3分。ようやく出番がきた。

エースの・・・智花の出番が！

「智花ちゃん！」
愛莉が叫び、智花にパスを回す。
「任せて！」
智花も叫び、疾風のようにゴールへつっこみレイアップを決める。
もちろん男バスメンバーごときついてこれるわけがない。智花は俺に似て足が速いからな！

男バスの攻撃・・・なのだが
男バスはさきほどの智花の攻撃をみて萎縮してしまったのかパス回しが甘くなっていた
うちの妹がそれをみのがすわけもなくパスカットして3ポイントではないのかと思うところからシュートを決めた。ミニバスに3ポイントはないらしいが

「おい！こっちまわせ！マーク落ちたぞ！」
小便小僧（竹中という名前らしい）が乱暴に叫びパスを要求する。
「ひなたちゃん！竹中にマッチアップだ！」
・・・・マッチアップってなんだ・・・
「おー。わかった」
とてとてとかわいらしい足取りで竹中をマークするひなた。
ボールをもった竹中はその姿をみてドリブルするのを躊躇した
「なにしてる竹中！さっさとヌケ！」
前傾姿勢の竹中にカマキリさんは怒鳴り声をあげる。察してやれよ・・・今、奴は動けないんだよ・・・

「く・・・くそ！」
前傾姿勢の竹中君はひなたをぬいてドリブル再開・・・とおもいきや
「おー」
ひなたはそのまま倒れてしまった。
どういうことだ？

「な、ちょ・・・・ええ！？・・・だ、大丈夫かよ」
竹中は倒れてしまったひなたを心配して足を止めてしまった

審判が竹中にファウルを宣告。ざまあｗ
「ばか！タケなにやってんだよ！」
「え、いや俺は別に・・・くそ・・・」
チームメイトに攻められて竹中はいらついた。
フヒｗなんか優越感ｗｗｗ

ボール権がこっちに移り試合再開となった。
智花は速攻で点をとった。

これで2点差・・・もう少しで同点だ！
女子２４－２６男子
男バスチームの空気が重い。エースがファウル宣告を受けてしまったためだろう
だがエースもズルズルと失敗を引きずることもできない。
パアン！
と体育館中に音が響き渡った。
「うっし！」
エースの竹中が自分の頬を叩き喝をいれた。
やっぱりエースは違うな・・・なんかこう・・・叩く力が・・・
ここからはエース対決になった。
智花が点を決めれば竹中が点を決め・・・それの繰り返しだ。
そしてまた智花がレイアップを決めようとしたときに竹中はあせったのだろうか。
智花の腕を叩いてしまってこちらにフリースローを決めさせる失態を犯してしまった。
女子３１－３０男子
だが、そんな智花の猛攻も無限に続くわけがない。
ついに智花もスタミナが尽きてしまった。
竹中に追いつくこともできずにあっさりと点を決められる・・・
女子３１－３２男子

そして残り時間わずか、ここできめなきゃ負けて女バスは廃部・・・
なんとかしなければならないこんなときに
3人で智花をマーク。トリプルチームとかいうやつだ・・・
今の智花にこんなものかわせるわけがない・・・誰もが諦めかけたときに

「私が負けるなんて・・・些細な事！だって、今は・・・皆が一緒だもん！！！」

そう言い放ち智花が、飛んだ。

ジャンプシュートを決める、と思ったのだが放ったボールは空中で失速。ゴールに届かずに下へと落ちていった。

「まかせろもっかん！」
目を閉じて敗北を覚悟したとき、唐突に、さも当然のように真帆がボールをうけとって
シュートを放った。

その放物線はリングへと進み、ネットを揺らし、試合終了のホイッ

スルが鳴った

女子３３－３２男子

祝勝会（前書き）

竹中っていいキャラしてますよね

あと若干キャラ崩壊しちゃうのでご了承ください

祝勝会

試合が・・・終った。
女バスの勝利で長かった試合も終った。

コート内で女バスのメンバーが喜びを分かち合っている。今行けば合法的（？）に小学生たちと触れ合えるのだが美星さんが怖いからやめとく。まじで。

かわりにカメラで撮っておく。このあとの祝勝会で皆でみるんだ。

「くそ・・・！」
男バス達が悔しげに体育館を去っていった。まあこれが女バスの力よ！・・・・俺なんもしてないけど

「さあ皆！俺の家に祝勝会やりにいこう！母さんがまってるから！」
「おっしゃー！すばるんちに突撃となりの晩御飯だぜ！」
「真帆。あんたはしゃぎすぎ」
「あんだよーいいじゃんかよー」
「おー。おにいちゃんのおうち、たのしみ」
「長谷川さんのお家・・・私も楽しみだな」
皆昴の家での祝勝会を楽しみにしているようだった。俺もしてるけどね。
皆で昴の家にいくために体育館をでて校門近くまで談笑しながら話していたのだが・・・
一つ気になる事があった・・・っていうかお願いしたいこと
「昴、先にいっててくんね？俺体育館に忘れ物しちゃったからさ」

「え？ほんとか？じゃあまってるけど」
「いや大丈夫だよ。結構時間かけるつもりだし・・・じゃあまた後で！」
「え・・・？おう・・・」
忘れ物なんて嘘っぱちだ。本当はもっと別の理由で体育館にもどったんだ

★

「やっぱりいたな」
体育館のバスケットゴールの前で黙々とシュート練習に励む一人の少年の姿。竹中だ

「ん・・・？なんだよ、あんたか」
無愛想に返された。だがそんなことといちいち気にする俺じゃない。今回は目的があるからな
「なんでシュート練習してんの？帰って休めばいいのに」
「・・・小笠原先生にもいわれたよ。でも、負けたのは俺の力不足だから・・・人より多く練習しないと駄目なんだよ」
なんだこいつ。いい奴じゃねえか。いや、妹がいるやつに悪い奴はいない！・・・と信じたい
「ふーんそうかー・・・」
ゴソゴソと竹中のカバンをあさりながら返答してやる
「ちょ！あんた何勝手に人のバッグ漁ってんだよ！」
「よーし受信完了。竹中のアドレスゲットだぜ！」

「ゲットだぜ！じゃねえよ！消せ！」
「なんだよつれねえなー・・・俺が用もなくこんなことする奴にみえるか？」
「見える」
即答ですか。そうですか。

「用があるからこんなことするんだよ・・・今からその用を伝えようと思ったり思わなかったりする」
「いやそこは言っとけよ。イライラするから」
竹中は声のトーンを少しあげながら俺に言う。まじでイライラしてるっぽい
「うん。今日お前のバスケをみて思ったわけさ。こいつ小６のくせにうちの妹と対等に渡り合ってると」
「・・・対等じゃねえ。それ以上だ」
「そうかもしれないな。で、そこで相談があるんだ」
「・・・なんだよ」

俺は一呼吸おいてから竹中に言い放った

「俺にバスケ教えてくれ」
「嫌だ」
心が折れそうになった

「なんでだよ！いいじゃんか！」
「なんで俺があんたにバスケおしえなきゃいけないんだよ！変態ロリコンコーチに教えてもらえばいいだろうが！」
変態ロリコンコーチw昴のことかw

「それこそ嫌だね！なんか昴俺にバスケ教えようとしねーし！あとなんかお前とは仲良くなりてーし！」
「な、なんだよ気持ちわりーな！いきなりそんなこというな！」
「しょうがないな・・・これで手をうとう・・・」
俺は持ってきたカバンを漁り一枚の写真をとりだした。

「ひなたの生写真だ・・・一週間に一度ひなたの生写真をやる。月末は2枚だ。」
「な、ひ、卑怯だぞ！・・・くう・・・こんなことしてる暇ねーのに・・・大体小6に教えを乞うってどういう神経してんだこいつ・・・・・わかった！やるよ！やればいいんだろ！」
「おっしゃーす。おっしゃーす師匠おっしゃーす」
「うぜ・・・じゃあ俺の時間が空いてるときに連絡してやるからお前のアドレスよこせ」
「ほいほい・・・これでオッケーな。」
「時間開いてるときは近くの神社で落ち合うぞ。そこに俺の手作りゴールあるから・・・そこで練習つきあってやるよ」
「おう。基本な。基本からな」
「基本！？・・・めんどくせーなちくしょう・・・」
「じゃあ今日はこれで。また今度な。夏陽君。くくく・・・」
「な、君付けは余計だ！きもちわりー！」
「わかったわかった。じゃあな」

★

昴の家にいったら昴がグーで殴られてた。

いや、まじで。愛莉が大泣きしてて真帆に殴られてた。
俺も勢いにのってヘッドロックしたら昴が気失いかけてめちゃくちゃあせった・・・やばかった・・・あれはやばかった・・・

「で、なんで愛莉泣いてたの？」
気になったので聞いてみたら
昴が愛莉を騙してセンターをやらせていたといったら泣いちゃったそうだ。まあそうなるだろうな

「あ、ところで皆の衆よ。ハーゲンダッツ買ってきたぞ。」
「おおー！まってました！きょーへー、何味がある？」
「うむ。とりあえず全味2個ずつ買ってきたんだが・・・あまったら昴の家に寄付」
「お、まじか恭平。でもそれはないと思うけどな・・・」
「あ、昴。ハーゲンダッツがいい？ピノがいい？」
「え、俺だけ選択肢あり？じゃあ皆と同じハーゲンダッツで」
「がめつい奴め。はいストロベリー」
「えー・・・俺ストロベリー嫌いなんだよなー・・・」
「うっせ文句いうなら返せ」
「いやだ。食う」
なんてやつだ・・・あ、すぐ食い終わった。高いんだぞハーゲンダッツ。味わって食えバカやろう

「そーいや昴。お前コーチ続けんの？」
「いや・・・もう終わりにするよ」
「「「「「え・・・」」」」」
女バス５人。全員口をそろえていった。

「す、昴さんコーチ続けてくださらないんですか・・・？」
まず智花
「ちょ、すばるん！コーチ続けてよ！私らどうしたらいいのさ！」
次に真帆
「長谷川さん・・・どうしても駄目でしょうか？」
紗季がいう
「は、長谷川さん・・・私も続けてもらったほうがありがたいっていうか・・・その・・・」
恥ずかしがりながら愛莉
「おー。おにいちゃん。ひなも続けてほしい。駄目？」
最後にひなた。

これはあれだな。つづけないと男じゃないな。
「ごめん・・・この試合が終ったらって約束だったし・・・」
「おーい昴。じゃあこういうのどうよ」
酒のんで酔っ払った美星さんが笑いながらいった
「智花が連続で５０本シュート決めたらコーチ再開！これどうよ。にゃふふ」
いや・・・さすがに智花でもそれは無理・・・「やります！！」
やんのかよ

「いや、智花・・・無理しなくていいぞ」
「無理してません！皆のために・・・がんばります！」
「おーやれやれ智花。がんばれよー」
「お兄ちゃんも他人事だと思わないで！一緒に付きあってもらうか

ら！」
「うっそ。嫌よ私。だってそれ多分朝にいくんでしょ？無理無理。私そんなに早く起きられないわ」
カマっぽくいって弱弱しさを演出する。
そしたら美星さんがこっちよってきた
「うおーい！！恭平お前これ飲めー！！」
「うげぷ！」
ビール飲まされた。これは・・・うう・・・

「うやっしゃあああ！！！」
「お、お兄ちゃん！？」
「どうした恭平！酔ったのか！？ていうかミホ姉！酒飲ませんなよ！」
「だぁって男のくせにうじうじしてっから喝いれてやろうと思ってーにゃふふふ」
「智花あああ！！！」
「は、はいいい！！」
「胸もませろやーー！」
「ふ、ふええ！！？」
モニュ・・・・

「おもったよりなかったわ・・・」
「な、ちょ、色々言いたいことあるけどそれは失礼だと思うよ！」
「恭平！落ち着け！」
「うっさい昴！ショタ顔はひっこんでろ！！」
「ええ！？関係なくないかそれ！？」
「っしゃあああ！愛莉！」
「え！？ひゃ、ひゃい！！」
「胸もませろやーー！」
「い、いやあああ！！」

「ふん！」
「むほう！！」
「流石にやりすぎだぞ恭平」
「いや、ミホ姉・・・酒のませたのあんただから・・・」

★

翌日

なんか・・・頭がガンガンする・・・あれ？ていうか昴の家にいたような気がするんだけど・・・
今何時だ・・・？４時・・・・まだ寝れるな。
「お兄ちゃん！起きて！」
「なんぞ！？」
「今日から昴さんの家にいくから！準備して！」
「えー・・・いやいかないし・・・」
「駄目！いくの！」
「嫌だ！絶対いかない！俺は寝る！」
寝ると決め込んだら最後・・・俺は布団からは絶対に動かない・・・・・
「昨日私にあんなことしたくせに・・・」
「どんなこと！？記憶にないんだけどなんかしたの俺！？」
「お兄ちゃんが美星先生にお酒飲まされて酔っちゃったときに・・・私に・・・」
「と、智花に・・・？」
「駄目！恥ずかしくていえない！」

「なにしたの！？ねえ俺何したの！？」
「・・・昴さんの家に着いてきてくれたら教えてあげる」
「はい・・・・」
俺の決意はあっさり崩れて布団からでることになった

さてと・・・智花は５０本決めれるのかな・・・？
それだけ考えて支度を終らせて智花と共に家をでた。

祝勝会（後書き）

感想いただけると嬉しいです

フリースロー５０本とか無理だろちくしょう（前書き）

智花と絡ませるスキがない・・・

フリースロー５０本とか無理だろちくしょう

５時に家をでてバスに揺られること３０分。
チャリでいったほうが絶対速いだろ・・・俺が漕いだ場合だけど
５時３０分に昴の家に着き、昴の携帯に電話して昴を外に呼び出した

「おはよー昴」
「おうおはよう恭平、智花もおはよう」
「おはようございます昴さん！ではフリースロー５０本、挑戦させていただきます！」
「うん。がんばって」
「がんばってって応援するくらいならいっそのことコーチつづけりゃいいじゃんか」
「・・・俺なんかよりちゃんとしたコーチに教えてもらったほうがいいよ。」
「んー。そうなんだろうけどそういう問題じゃないんだよね・・・」
昴はわかってない。智花達が昴の事をどれだけ信頼しているのかわかってないんだ。いや昴の言い分は正しいけどさ・・・

「じゃあ智花俺と恭平でみてるから・・・５０本決めれるようにがんばれ」
「は、はい！がんばります！」
智花は真剣な表情をしている。それだけ昴に戻ってきてほしいのだろうな。ちくしょう俺も頼られたい・・・
『お兄ちゃん・・・勉強がわからないの・・・』
『おう教科はなんだ？兄ちゃんが教えてやろう』
『保健の・・・じ、実技・・・』

・・・・・・・・・ないわ・・・・・

流石に自分でもひいたわ今のは・・・俺きもいな。
ていうか智花は性関連の知識は全くないのだ。いや自分の胸が小さい事は気にしてるけど・・・

「３４・・・・・３５・・・・３ろく。あ！・・・外れちゃいました・・・」
「はは、しょうがないよ連続５０本なんて難しいんだし・・・」
「で、では明日もきますね！」
「・・・・・・え？」
「期限きめていませんものね！だから明日も挑戦しにきます！」
「あ、あはは・・・了解しました」
昴は困り笑いを浮かべていた。まったく贅沢な奴だよ・・・智花をみれるだけでもありがたいと思え

「昴ー。シャワー貸してー」
「お前は浴びなくていいだろ・・・じゃあ智花、汗かいてるしシャワー浴びてきな」
「い、いいんでしょうか・・・迷惑なんじゃ・・・」
「いやいや全然大丈夫だよ。ほら、早く浴びてきなって」
昴が優しく諭す・・・が、俺にはわかるこのロリコン野郎・・・

シャワー浴びたばっかの智花を見たいからってあんなこといいやがって。叩き潰してやる・・・

「なあ昴」
「ん？なんだ恭平」
俺も家にあげてもらい智花がシャワーを終らせるのを待つ・・・そのあいだに殺らないと・・・

「せいや！！」
「うお！あぶねーな！いきなり殴りかかってくんじゃねー！」
「黙れ・・・・うちの妹をエロい目でみようったてそうはいかん！智花とつきあいてえんなら俺を倒してからいけえ！」
「付き合うとかおかしいだろ！小学生相手にそんなこと思うはずないだろ常識的に考えて！！」
「黙れ！俺が思うんならお前も思ってるはずだ！！」
「え・・・」
「・・・？」
昴が沈黙した。なぜだ・・・？

「え、お前小学生恋愛対象にみてんの？」
「え・・・・？いいいいい、いやちげーし！ちげーーーーし！！今のは軽い冗談のつもりでいったんだけどね！別に俺はロリコンでもシスコンでもねーし！」
「じゃあなんなんだよ。いってみ？」
「はあ？いや別にそんなんじゃねーって。どっちかっていうと年上好きだし！」
「ミホ姉なんかどうだ？」
「うんいいね。美星さんは合法的なロリって感じでいいわ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

やっちまった・・・・・・・・・・・・・・

「やっぱロリコンじゃねーか！この変態！」

「違う！今のは違うぞ昴！ええいもういうな！もういわないでくれ！」

「なんだよミホ姉は嫌なのか？ん？」

こ、こいつうぜえ！！

「ちげーよ！美星さんと智花を比べんなら智花の方がいいけど美星さんも好きだし！でもどっちかっていうと智花の方が断然可愛いわ！！」

「え・・・お兄ちゃん・・・？」

わーお。偶然ってすごいね！

「お、お兄ちゃん私の方が可愛いって・・・その・・・」

「いや待て智花。顔を赤くするな。いったこっちが恥ずかしくなるからってそう意味じゃなくてそう！妹てきな意味で好きってことだ！」

「ほー。じゃあ私のことも妹的な意味で好き、と。そういうことか恭平？」

美星さん登場！なんでこうあなた達はタイミングが悪いんでしょうね！

「お、ミホ姉。また飯たかりにきたのか？」

「人聞きの悪いこと言うんじゃねーよ。そういうと私が毎日飯たかりにきてるみてーじゃねーか」

「飯たかりにきてることは否定しないんだな・・・」

「で、恭平。妹的な意味で好きなんだって？私がいつお前の妹にな

った。ていうか私の方が年上だぞ」
ふん・・・そんなジト目でみたって無駄さ・・・俺はそのていどじゃ動じない男だ！

「いやマジすんませんでした。これは一種の言葉のアヤって言うか二人とも小さくてロリ可愛いなって思ってただけです」

全力で土下座してなおかつ墓穴をほる。なかなかできることじゃないと思うんだ。
「可愛いとか気持ち悪いことといってんじゃねーよ。で、恭平と智花なにしにきたの？」
「美星先生、おはようございます！えっと・・・連続フリースロー５０本、挑戦しにきました」
「ほー、あれ本当にやるんだ。酔っててあんまりいったこと憶えてないけど」
「うう・・・お兄ちゃんにもうお酒飲ませないでくださいね？」
「ん？恭平になんかされたのか智花？」
「い、いえ・・・なんでもないです・・・」
「あ、そういや智花。俺が酔ったときに何したの？」
「い、いえないよ！絶対にいえない・・・」
「えー・・・約束やぶんのかよー！ぶーぶー」
「うっさいぞ恭平。男がうじうじいうんじゃねー」
美星さん・・・きびしっす・・・

★

昴の家で朝食をご馳走になり、昴と共に登校した。
ちなみに智花は美星さんに送ってもらってる。あと昴のお母さんのつくったご飯は美味かった

「昴よー。５０本決めたらとかいってないでとっととコーチやってやりゃあいいじゃねえか」
登校途中に先ほどと同じ質問をしてみる
「だから・・・さっきもいったとおりの理由で却下だ。ていうかいまさらコーチやりたいですなんていえっかよ」
「自分の体裁なんざどうでもいいだろうに・・・あ、数学の教科書忘れた。昴みして」
「いや無理だろ、席離れてるし・・・だいたいお前はいっつも数学中はねてるだろ」
昴が失礼なこと言いやがった。こいつにはいつか鉄拳制裁をくださねばならんだろう
「お前は本当に失礼な奴だな・・・数学中だけじゃないだろ、俺が寝てるのは」
「そうだったな。ていうか前の小テストでお前１００点とってなかった？」
「え・・・みたの？」

ふ・・・やれやれだぜ。俺が頭がいいということが世間にさらされてしまうじゃねえか・・・
「ま、お前が１００点取れるわけないよな。カンニングか」
「お前なんで友達にそういうこと平気でいえるの！？頭おかしいんじゃないの！？」
「うっせーな。ていうか学校みえてきたぞ、もうちょい声を小さくしろ」

「あんだよー・・・いいじゃんかよ・・・ていうかカンニングなんてしてないからな。俺の実力だかんな」
「はいはい、わかりましたよ」
昴め・・・信じてないな？まあいいだろう中間テストの時は覚悟するがいい・・・

そんなこんなで時間はたち、今４時間目の数学。

もちろん寝るさ。寝る以外どんな選択肢がある？
「おーいまたか湊。そろそろ寝るのやめたらどうだ？いいかげんあれだぞー。お前いいかげんあれになっちゃうぞー」
あれってなんだ茂松・・・あ、忘れてると思うから一応言っておこう。今俺に話しかけてるかまってちゃんなおっさんは茂松っていうんだ。俺はダンディ茂松ってよんでる。

「おい湊ー・・・はぁ・・・お前今日補習な。わかったか？」
・・・え・・・今なんと・・・？
「ちょ！補習ってなんすか！俺なんかしましたか！？」
俺は補習という言葉に反応して起き上がる。補習なんてまっぴらだ！誰がやるかバーカバーカ！！
「お前がいっつも寝てるからだ。放課後教室残ってろよ、いいな？」
「嫌です」
まったく・・・俺がなんでそんなことしなくちゃ行けないんだ・・・俺は今日夏陽と練習すんだよ！
「じゃああれだ。いまからいう問題こたえろよ？いいな？」
「ああいいさ。バッチ来いだよダンディ茂松。」
「誰がダンディだバカ。照れるだろ。因数分解の問題な。基礎の基

礎の問題だから間違えたら補習決定だから。３ｘ２－ｘ（三エックス二乗マイナスエックス）は？」
「・・・ｘ（３ｘ－１）」
「なん・・・だと・・・？」
「基礎問題間違うわけないっしょｗこれで補習は無しってことでいいっすよね？」
「な、なんでいつも寝てるのにわかるんだ・・・」
ふ・・・愚問だな・・・そんなの簡単な理由さ
「家で！予習！してきてますから！！」
『！！！？？』
クラスメート全員びっくりしやがった。お前ら失礼だろ、ていうか昴。お前胡散臭そうな顔してんじゃねえ

「まあできるのなら補習は無しにしてやるがこのまま寝てたら本当にやばいぞ。職員会議でも議題になるほどお前は授業態度が悪いからな・・・次寝てたら職員室にきてもらう」
「うーす了解しました。じゃあ授業続けましょう！」
「・・・本当にわかってんのかお前、まあいい次のページあけろー」

午前の授業が終わり昼休みになった。昴と一緒に弁当食おうと思ったんだが昴がみあたら・・・いた。
廊下で幼馴染と話してる。たしか名前は・・・荻山さんだったような・・・まあ俺にはそんなこと関係ない。昴があの人といい感じのムードになってる恐れがあるので会話に水を差しに行こう

「おーい昴ー。飯たべよーぜー」
「ん？おお恭平か。ちょっとまっててくんね？今葵と話してるから」

「葵？・・・ああこのひとのことか。俺湊恭平っていいます。よろしく」
さっそく自己紹介といきましょうかね。初対面のときにポイントあげとかないと後々の関係に響くからな・・・
「あ、どうも。荻山葵です。昴の幼馴染やってます」
「・・・で、なんの話してんの？」
自己紹介が終ったところで気になっているところ聞いてみる
「ああ、バスケ部が1年休部になっちゃっただろ？そのあいだに体鈍っちゃってたら話しにならないから・・・葵に頼んで同好会つくろうと思ってさ」
「同好会・・・？どんな」
「いや、今の会話きいてたらわかるだろ・・・バスケ同好会だよ。今メンバー募集してるところ」
「ふーん・・・で、荻山さんに声をかけたと」
「そういうことだ。で、どう？葵・・・やってくれる？」
「うーん・・・私としても昴がバスケ下手になっちゃってたら困るし・・・いいよ、入っても」
「おっしゃ！一名確保！」
確保って・・・ていうか俺は誘わんのか。ひどくね？
「ねえ昴。他にだれが同好会参加するの？」
「んー予備校があるっていって週に何回かしかこれないけど一成もやってくれるって」
「へー・・・じゃあこれで3人なんだ」
「おう。」
・・・・・・・・・・・・・・・・無視？俺の存在無視？普通ここは『湊君はやらないの？』とか聞いてくるんじゃないの？なんで無視するの？ねえ。
「じゃあ飯食うか。葵はどうだ？一緒に食べる？」
「ううん。私は教室に友達待たせてるから。じゃあね」

そういって荻山さんは自分の教室に走っていった。廊下は走っちゃいけないんだぞ！

「じゃあ俺達も飯くうか・・・ってどうしたんだ恭平」
「うっさいな・・・普通さ、あそこはさ、荻山さんか昴がさ、俺にさ、同好会入らないの？ってさ、聞く場面じゃさ、ねえのかよおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！」
俺の熱い咆哮！うけてみろ！
「うるさい。」
一言で片付けられた・・・昴こんなひどかったっけか？もうちょっと優しくしてくれてもいいじゃんかよ・・・
「ていうか入りたいなら入りたいって言えばいいじゃんか。わざわざいわれるの待つなよ」
「いやなんかいいづらいじゃん？初心者お断りって雰囲気じゃん？」
「別にそんなことはないよ。一成だって初心者だし。いっておくが一成は体育会系じゃないからな。」
「ほー・・・じゃあ俺も入っていいの？」
「いいよ。むしろ大歓迎だ。」
「じゃあ入る」
「おう。これで４人か・・・案外早く集まったなー・・・」
「いつ活動すんの？」
「さあ？そこらへん葵に任せるし」
「お前が作りたいっていったんだろうが」

★

昼休みも終わり、午後の授業も終わり、放課後だ。
今日は夏陽と一緒に神社でバスケの練習だ。短期間で上手くなって同好会の時に昴を驚かせてやる。

「おーい夏陽ー。待たせて悪いな」
「・・・別にまってねえよ。俺も今来たところだ」
とか言っておきながら汗かいてんじゃねえか。相当練習してたろ
「じゃあ準備運動終らせたあとに練習はじめるから。終ったら声かけろ」
「ういーっす」
いつのまにか夏陽ってよんでたけど別にいいよな。本人も気にしてるそぶりみせてねーし

「夏陽ー、終ったぞー」
「・・・じゃあまずはハンドリングからな。今からやり方教えるから今日1日それやってろ」
「なんか投げやりじゃね!?あとハンドリングとか余裕だし。やり方教えなくてもできる」
「ほー?いうじゃねえか。なら一通りやってみせろよ」
「ほいきた」

智花から前教えてもらったのを全部見せてやった。夏陽はできて当たり前みたいな顔でみてたけど初心者なんだからもうちょっとおどろいてくれていいじゃねえかよう！

「ハンドリングはできるのな。んじゃあ今度はシュート練習な。シュートの打ち方みせるからやってみろ」

夏陽は木と木にぶら下げられた簡易ゴールにシュートを決めた。智花には劣るがきれいなフォームだった。やっぱり上手い奴は違うんだな

「やってみろ」

ボールを渡された。打つの見せられただけでできるわけなくね？普通の人は。

・・・まあ俺は普通の人じゃないから簡単にシュート決めてやったけどな

「くっそ・・・なんか悔しいな。シュートフォームも問題ないし・・・まあ1回決めただけで満足してるようじゃ駄目だ。あと10本きめてみろ」

「任せたまえよ師匠」

そういって俺は10本はずさずにシュートを決めてやった。最初の内は皆はずすんだろうけどまあ・・・中学の時に体育でやったしある程度はできるわ

「なんでできるんだよ！？別に俺が教えなくてよくね！？そのぶんだとどうせレイアップも決めちゃうんだろ！？」

「まあそうだな。体育の授業でバスケやったし。基礎教えてっていったけど基礎はできるからやっぱいいわ」

「最初からそういえよ・・・じゃあ俺はなにすりゃいいんだよ、ま

ったく・・・」
「うーん・・・１ｏｎ１？」
「はあ？できんのかよ・・・ってこれは愚問だな。どうせこれもできんだろ」
「さあな。これはやったことないからなんともいえんな」
「わかったよ。色々教えながらやってやるからわからないところは聞け」
「うっす」
夏陽は試合の時は感じ悪そうだったけど面と向かって話してみると案外いいやつだったりするな。話しやすいし。

★

「・・・なんで初心者のくせに俺のこと抜けるんだよ・・・」
結果は俺の勝ち。わからんところとか夏陽に教えてもらってる間にどんどん上達していっちまった。
「さあ？俺が天才だからじゃね？」
「調子にのんな！くそ、自信一気になくなったぜ」
「しょうがないだろ。体格ちがうし」
俺１８０台だぞ？身長。
「そうだとしても今日バスケ始めた奴に抜かれるのは屈辱なんだよ！」
「へー・・・じゃあこうしよう。夏陽が時間開いてるときは俺も一緒に夏陽の練習につきあう。これでどうだ？」

ドヤ顔でいってやったぜ・・・・・今の俺かっけー！
「いや。もとからそうする約束だったろ」
・・・そうでした・・・ドヤ顔でいった自分がはずかしくなってきたわ・・・
「でも俺はルールわからないし・・・そこらへんは自分で調べてくるよ」
「当たり前だ。ルールも俺が教えるなんてごめんだね。つーか今度からは練習じゃなくて勝負だ。時間開いてるときは練習したあとに１ｏｎ１で勝負。こうしようじゃねーか」
「うん。俺も別にそれでいいわ。反対する理由もねーし」
「じゃあまた今度な。俺はもう家に帰る」
「え？もうか？はやくねえ？」
「うっさいな！なんかもうプライドがずたずたなんだよ！帰らせろ！」
「わかった・・・ああやっぱまて」
「なんだよ・・・なんか用あんのか？」
夏陽はちゃんと立ち止まって聞き返してくれた。ほんといい奴だなこいつ
「ひなたの写真どうする？」
カバンからひなたの写真を取り出して夏陽に見せる。一瞬夏陽が顔を赤くしたがすぐに顔をひきしめた
「いい。俺があんたに勝ったら、その・・・もらう」
ああ、もらうんだ。ていうかお前ひなたの事好きなの隠す気ないだろ・・・でもいい根性してると思うぞ。自分がもっと強くなったらっていう目標を決めて練習するってことだからな。まあその目標がちょっとあれなんだが・・・
「わかったよ。じゃあまた今度な。」
俺は夏陽と別れて家に戻った。

フリースロー50本とか無理だろちくしょう（後書き）

夏陽は結構好きなキャラです。扱いやすくて。

感想ありがとうございます。できるだけ毎日更新するようがんばりますので応援よろしくおねがいします

誤字脱字が多いので編集しました。
自分で読んで見てわかったのですが結構読みづらいですね・・・
どうやったら読みやすくなるのでしょうか？

ナルシストが勝手に怒ったぞ（前書き）

今回は感想で言われた点を違和感なく直し・・・たかったんですが結構むりやりな感じになってしまいました。見苦しいと感じた方、先に謝っておきますすいませんでした！

ナルシストが勝手に怒ったぞ

「こっち！パス！」
「へーい」

今俺と昴、それから荻山さんと一成で近くのバスケットコートがあるアミューズメント施設に来ている。
何を隠そう、今日がバスケ同好会の初活動日なのだ。
ただしさっきの掛け声は俺達が出したものではない。他のグループのものだ。
俺達は今さっき来たばかりで荷物もおいてない状態にいる

「昴ー、人多い」
俺が人の多さに嘆くと昴は息をはいた
「しょうがないだろ。平日だけど、俺達以外にも使う人なんてたくさんいるんだから」
「そうだけどさ・・・なんで学校でやらないの？」
「頼んでみたんだけど他の部活が体育館使っちゃってて・・・ごめんなさい」
昴の代わりに隣にいた荻山さんが答えてくれた。なぜか謝りの言葉と一緒に
「いやいや、確かに目的もはっきりしてない所に貸してくれるわけないよなー」
「目的ならあるじゃん。昴が復帰した時に体がなまってないようにーって」
今度は一成が答えた。君達チームワークいいね。
「確かにそういう事でもあるけど、みんなが楽しんでくれればいいよ」
昴め・・・とことん良い奴だなお前は。

「へー良い事いうじゃん昴。ていうかコート借りてあるんでしょ？時間もったいないし早くいこ！」
荻山さんが小走りで借りてあったコートへ向かった。
「・・・今頃コーチ続けてたら慧心の体育館だよな」
嫌な笑みを浮かべて昴に言う。
「うっせ。早くいくぞ」
「ういーっす」

★

その後普通に練習したり遊んだりしていた

「昴～。レイアップってどうやって打つの？」
俺のそばで一成が昴に教えてもらっている
「ん～？まずはここら辺にたってドリブルしながらいって……ジャンプしてゴールにボールを置いてくる感じ。よくボールを上に向かって投げる人がいるんだけどそうじゃなくて、ゴールに置いてくる感じでやると入りやすくなる。やってみ？」
昴は一成にやり方を教えると一成にやるように促した
「うっし！・・・・・・とう！」
一成がゴールに向かって走り、高くジャンプした。そこまではいいのだが完全にボールを投げてる。ボードにもあたってない
「う～む…最初はむずかしーもんだな…」
「まあ誰だって最初はそうだよ。最初からできる人なんてそういな

いし、いたらビックリするよ」
「ほう…勉強と同じだな…最初はできないが公式を憶えると問題を解けるようになる…似たり寄ったりだ」
「う…勉強でたとえるのはやめてくれ…」
昴が苦虫を潰した顔になった。それとは対照的に一成は隣でいやらしく笑っている

「湊君はやらないの？」
「あ、荻山さん」
俺が座っていたベンチの隣に荻山さんが座ってきた
「荻山さんこそ、練習やらなくていいの？貴重なあいつとの時間ですよ」
「な…！？べ、別に昴のことなんかこれっぽっちも、なんとも、思ってないし…ていうかその荻山さんっての、慣れてきたら普通に呼んでいいよ」
「いや俺昴だなんて一言もいってないけど。でも練習とかしなくていいの？」
「う…練習は今は気が乗らなくて」
昴についてはスルーされた。別にいいけど。
「ふーん…まあそんなこともあるよね」
「わかるんだ？」
「まあ一応陸上4年間やってきたし」
小学校の時に1年、中学の時に3年で合計4年だ。
「そっか、そういえば推薦できたんだったよね、なんでやめちゃったの？」
「うーん…なんかつまんなくなったっていうか、もともと嫌々やってたから4年続けただけでも俺としては十分だよ」
「へー。色々あるんだね」
「そう。男には色々あるのです」

「女もだよ」
「そりゃそうだ」

なんて会話してると昴達がこっちへ寄って来た

「葵、恭平。ミニゲームやろうぜ」
「ミニゲーム？なにやんの？」
「二人チームになってゲームしようぜって話。じゃあぐーとぱーで別れよう。せーの、グッパージス」
「ねえ、俺前々から思ってたんだけどグッパージスってなに？普通ぐっとっぱーで、わっかれましょって奴が主流なんじゃないの？」
どうでもいい事を質問してみた。別に知らなくてもいいのに。
「地域によって違うんじゃね？茂松先生がぐっとっぱーでって奴だったぞ」
なんだそれ。どうでもいい情報だな…
「葵と恭平がパーか…じゃあ一成と一緒のチームだな」
「優しくしてねん？」
「気持ち悪いぞ」

俺と荻山さんが同じチームということか

「よろしく、湊君」
荻山さんが笑いかけてくる。結構可愛いなこの人。惚れるまではいかんが
「よろしく、荻山さん。」

★

1分後にミニゲームが開始された。
ルールはバスケと基本おなじだがルール知らない初心者が二人いるのでそこは少し多めにみてくれるらしい
ちなみに5点先取で勝利
俺達の先攻でゲームは始まる。

「湊君。まずは気楽にね？昴も初心者相手に本気だすなんて大人気ないことしないと思うし

「おし。恭平！いっきまーーーす！！」
俺は某ロボットアニメの名台詞を叫んで昴に突進していった
「体の力ぬけよ恭平。あんまり力むと体がかたくなるぞ」
ふん。余裕をかましてられるのも今の内だ！すぐにお前ごときぬいてやる！
「ほいっと、お前抜くとき腰ひくのな。それじゃあ動けないぞ」
「なん…だと？」
とられた。それはもう簡単に。
「な、なんでこんなにあっさり？」
夏陽を抜いて自信満々だったところに簡単にボールをとられてしまった・・・
「ドリブルとかは初心者のわりには上手いと思うし、なんか自信あり気な顔してたから結構身構えてたんだけど。まあやったことないんだし、しょうがないよ。じゃあ次俺達の攻めな」
「くっ…」

俺は昔からスポーツをやれば人並み以上にできた。それは吸収力が速いからだと周りの大人達に言われて、俺は自分の事を天才だと思っていた。

完全に自己陶酔して小学生のときに周りからナルシストだとか言われて冷やかな目で見られている時期もあって
中学からはなにも言わないようにして、隠していた。

でも、俺はスポーツならなんだってできる。そう思ってはいた。
勉強は苦手で、この前皆の前で問題に答えられたのも運良くその公式が載ってるページを開いてたからだ。
テストで百点取れたのも問題数が少なくて、しかもその問題は前の日に気まぐれで勉強したところだったからであって

結局は運だった。

だがスポーツならなんだってできる。それには自信をもっていた。

でも今抜かれた。今まで才能で勝負してきてこんなことは一度もなかった。
まあそれはきちんとした選手と対決しなかったせいでもあるだろうがそれでも俺は思っていた。
俺はやればできる奴だ、と。

だが密かに自信をもち、昴や夏陽を若干舐めていた。
その結果、昴にぬかれた

「ちくしょう……」
「え？そんなに悔しかったのか？で、でもミニゲームなんだしもうちょっと遊ぶ感じでやったほうが…」
「うるさいな。楽しみ方は人それぞれだろ、ほら早く始めろよ」
「なんだよその態度…いくぞ」
自分でもわかってるつもりだ。結局は才能。努力しなければその花は開かない。天才といわれた人だって陰ながら努力して、その結果すごい事をなしとげたんだ。
俺の感じていたのは自惚れ。俺は天才なんかじゃない、ただの自意識過剰な痛い男子高校生だ

わかってるつもりだけど、むかつくもんはむかつく！

「ふん…ディフェンスなら自信あるんだよ。小４のときからやり続けていたこの国技のおかげでな…」
勝つ。絶対に勝つぞ。自称天才の痛い男子高校生の名にかけて！

「すぅぅ…カバディカバディカバディ！！」
「うお！？カバディって国技なのかよ！怖い！ちょ…怖い！」
怯えてんのか？ならもっとみせてやるよ…
「あーもう…一成、パス」
普通にかわされた。
「ほいほいっと。お、はいったぞ昴！ジュースおごって！」
「よっし、やったな一成。つーかお前がシュートいれるごとにジュースはきついから無理」

「くそ…」
「ねえ湊君。どうしてそんなに熱くなってるの？」

荻山さんが聞いてきた。まあそりゃそうだろうな。さっきから目をギンギンにして昴の事を睨んでるし
「なんでもない。次は俺らの攻撃だよね？荻山さんがやっていいよ」
「うん。でもちゃんとパス出したりするから、ミスしても気にしないでね？」
「うす」

★

そのあとも攻守交替しながらも順調にゲームはすすんでいった。

結果、惨敗

理由は一人で攻めた俺の責任だ。
荻山さんがパスを出してくれても一人でつっこんでボールを取られてその後点を決められて……
それの繰り返しだった。
荻山さんは終始笑顔だったが内心穏やかじゃなかっただろうな

「荻山さん、すいません。ちょっと熱くなりなりすぎちゃって…」
「ううん、大丈夫だよ。ミニゲーム楽しかったし」
嘘だ。なにもやってないのに楽しいはずがないだろ。
「俺のせいですよね、負けたの。怒らないんですか？」
「えっと…なんでそんなこと聞くのかが謎なんだけど…確かに負けるのは嫌いだけどミニゲームで、遊びなわけだし怒る理由にはならないよ。ただ今度はちゃんと私にもパス出してくれると嬉しいな」
遊び……そうか、遊びか。遊びなんだから負けのうちには入らない

はずだ。たかが遊びなんだから……

「葵、恭平。もうそろそろ時間だし金払ってでようぜ」

「わかった。行こう？湊君」

そのすぐ後にカウンターへいって料金を払ってその日は解散になった。

★

翌日、またも智花につれられて昴の家へフリースロー５０本の挑戦に行った。正直今昴とは会いたくない

なんとなく顔を会わせずらいんだ。

向こうはそんな事思っていないだろうが俺が気にするんだよね

「おはようございます昴さん！今日もよろしくおねがいします！」

「うん。がんばってね、智花」

「はい！応援よろしくお願いします！お兄ちゃんも応援しててね！」

「ん、ああ。わかってるよ」

智花に話かけられても嬉しいはずなのにそっけなく返してしまう。

だめだ、こんな態度じゃまた嫌われる……

「41、42、よんじゅうさ……あ、はう。今日も外れてしまいました…また明日！よろしくおねがいします！」
智花は太陽のような笑顔で昴にいう。あんな顔、俺には向けた事がない。だがそれでいいのかもしれない。
前に言われた俺に対しての智花の好きが、家族としての好きであることを願っているんだから。
家族に向ける笑顔なんて最低限、それ以下でもいいんだ。

「うん。じゃあシャワー浴びて学校いこっか！恭平、家あがれよ。俺の部屋で好きにしててていいから」
「お、おう……さんきゅ」
駄目だ、いつもどおりにできない。
これじゃ駄目だ……

★

智花とは別に学校へと向かい、俺と昴で登校する。だが登校途中で俺からは一切話しかける事はなかった。
いつもの調子がでない

で、今は昼休みなわけで……昴と一緒に飯をくっている

「なあ恭平」

「……」

話かけられても返事をしない。朝からこんなんばっかだ

「お前今日どうしたんだ？授業中は珍しく寝てないし、まあそれが普通だが。なんか元気もないし」

「関係ないだろ……お前には」

弁当の最後のおかず、からあげを咀嚼しながら言う

「関係ないって、関係なくはないだろ？お前昨日からおかしいぞ？」

うるさいな……どうだっていいだろそんなこと

「ミニゲームで負けた事引きずってんのか？あれは遊びなんだから…」

ああ、もう……うるさいな！！

「関係ないっていっただろうが！それをお前をぐちぐちぐちぐちいいやがって……お前は俺の何になったつもりなんだよ！」

席から立ち上がって声を荒げて昴に向けて叫んだ。クラス中の視線が俺達に刺さる。

そんなことも関係無しに昴は俺に向かって何かを言う

「友達になったつもりだ」

「！！！……すまん」

「なんかあったなら話せよ。友達、なんだから」

昴の一言は今の俺に結構利くな。なんか落ち着く。

「……放課後、話聞いてもらっていいか？」
「ああ」
昴は俺を落ち着かせるスペシャリストだな。プロフェッショナルともいうかもしれん。

ナルシストが勝手に怒ったぞ（後書き）

もう駄目だ・・・
昴のキャラも崩壊してるし主人公がどういうキャラなのかもつかめなくなってる・・・

あとオリキャラ一人出していいですかね？
主人公のバスケのライバルみたいなやつを
性格は結構嫌な奴にしたいと思ってるんですが・・・

一緒に寝たっていいじゃない、兄妹だもの。（前書き）

もはや誰だよ……ってレベルまで智花がわけわからなくなってる。

６万ＰＶ突破！記念の番外編とか他の作者さんやってますけど

やる度胸ないのでやりません！

一緒に寝たっていいじゃない、兄妹だもの。

放課後。昴の家に来て今までの自分の事を全部いった。
「ふむ……自分の事を天才だと思っていた、そういうことか？」
「お、おう」

「お前痛いな。結構やばいレベルで」
「いうなよ！いや本当はいってほしいかもしれんけどいうなよ！」
昴の偽りのない一言が胸に来た。たぶん今の俺の精神にはロンギヌスの槍が刺さっていることだろう

「でもまあ……スポーツをすぐにできるようになるってのは羨ましくもあるし、むかっ腹がたつ」
「むかっ腹……？どんな感じのよ」
「ん、今までずっと努力してきてやっとその技術をものにできるってのに、いざ自分ができたってところで今までやったこともないド素人がすぐにできる。
こんなにむかつく事はない……と俺は思うぞ」
そんなもんか……俺にはよくわからないな。真面目にやってきたスポーツなんて陸上とカバディくらいだからな。

「ただまあ、恭平のレベルがどんなもんかってことだよな」
昴が顎に指をあてて何か考えるそぶりを見せている。レベルってなんだ？このまえの真帆と同じ奴か？
「よし。恭平がどれだけできるか試してみようか。」
「え……？どういうことだよ」

「まあやればわかるって」

★

長谷川家　庭

「とりあえず、俺の事を抜いてみろ」
「はぁ？このまえ無理だったんだからできるわけないだろ」
「やってみなきゃわからないだろ。ほれ、やってみ」
余裕の表情。こういうのみるのは嫌いだ。自分が負けた気がしてならない
「じゃあいくぞ。とう！」
ドリブルで昴に向かって突進する。
「よっと、抜けないな。しかもボールとられてるし」
が、あっさりとボールをとられてしまった。
「くそ・・・・・・なんでだ？」
「まあ、恭平ができるのは全部基本までってことなんだよ。
自分のこと天才だとか思ってた割には基本だけしか完璧にこなせない。
基本に忠実な天才ってことだ」
「つまり、中途半端なやつってことか？」
「まあそうなるだろうな。恭平が言う天才ってのはすぐになんでもできちまう奴のことだろ？
でも恭平は基本まで。それ以上は完璧にこなせない。」
「でも……夏陽はぬけたんだ」
「夏陽？ああ、竹中か。ていうか恭平、竹中と面識あったのか」
「お、おう。一応俺のコーチだ」

「……お前小学生にコーチしてもらってんのか？」
昴は俺にあきれたような視線を送ってきやがった。
いいじゃねえか別に。

「竹中はまだ未完成だから抜けたんだと思う。竹中は小学生にしては優秀だし、智花とも互角なくらい強い。だけどまだ基本でできてないところがあるんじゃないか？」
「結局は、基本ってことか？」
「そういうことだ。恭平は基本がある程度できてない奴と戦ったら勝てるかもしれない。
でも基本がちゃんとできてる奴には勝てない。なぜって聞かれたら恭平が基本が完璧にできて、基本しかできないからだ」
わからん、わからんぞ……とどのつまり俺は中途半端な天才なのか？
「あ、いっておくがお前は天才なんかじゃないからな。
最初しか完璧にできないやつなんか天才となんかよべないからな。
『中途半端にできるやつ』ってことだよ、恭平は」
中途半端……結局はそれにいきつくわけだ。
俺は天才なんかじゃないってこと。
ただの痛かった高校生。それまでだ。

「天才じゃないとかって、率直にいわれると結構効くな……
ていうか今思ったんだが夏陽との練習とかってやめたほうがいいのかな？」
「え、なんでだよ」
「だって、夏陽がちゃんとできてないんだからできるようになるまで練習させてやらんといけなくね？俺いると邪魔なんじゃないの？」
「いや、まあそうだろうけどさ……竹中にきいてみればいいじゃん。俺は竹中じゃないからわからん」
「そうだな。今度聞いてみるよ」
「おう。で、今日はどうする？帰るか？」

「うーん……前々から感じてたこととかが間違いだったってわかったらがっかりしたり、逆に長年の肩の重みがなくなったていうか……上手く言えないがスッキリしたんだよ。だから今日は帰る……と言いたいところだが今日は昴の家で遊ぶことにする」
「なんでそうなる。帰りたいときに帰ったほうがいいぞ」
なんだそのはやく帰れてきな発言は。怒るぞ
「昴の部屋でゲームやりたい。スト？でこてんぱんにしてやる」
「自分の家でやりゃあいいだろ」
「友達とやりたい気分なんだよ！家じゃ智花しかいないし、智花ゲームあんましやらないし。」
「まあ、格ゲーは基本友達とやりたいよな。よし、今日は7時までゲームやろうぜ」
「なんか微妙だな。あと基本って言葉使うな。今日このワードつかったらジュースおごり」
「なんだそれ……まあいいや、ボコボコにしてやるよ」
「なめるなボコボコにしかえしてやる」
「ふん。長年ミホ姉に鍛えられてきたコントローラー捌き、みせてやろう」

軽口をいいあいながら昴の部屋にスト？やりにいった。

★

昴の家でスト?をやって家に帰ってきた。めちゃくちゃ疲れた……
「ただいま〜……」
「お兄ちゃん、お帰りなさい。どうしてそんなにつかれてるの?」
玄関で最愛の妹、智花が出迎えてくれた。
「昴の家でゲームやってたらすげえ疲れた……最後の方リアルで闘ってたし……」
あれはやばかった。昴が予想以上に締め技上手くて焦った。
「け、喧嘩はよくないよ?怪我しちゃうし……」
「しかもジュースは3本奢るハメになるし。散々だったよ、今日は」
「大変だったんだね。お風呂わいてるから入って?」
おーう、智花よ心配してくれるのか?まったく愛い奴め。
「智花は入ったのか?」
「え?うん、入ったけど」
「そっか、なら入る」
「ええ!?な、なんかいけない気がするよ!私が先に入った場合と後に入った場合でなにか違ってたの!?」
智花が顔を真っ赤にして言った。なにか気にする事でもあるのか?残り湯狙ってるとかそんなこと思ってないだろうな。いや、智花は残り湯とかそんな単語知らないだろうな。

「いやほら。俺が汗いっぱいかいてるのに浴槽のなかに入ったらどうなる?俺の汗でいっぱいになって汚くなっちゃうだろ。そのとき仮に智花がまだ風呂に入ってなかったらどうなる?汚いお湯に浸かってるのとおなじだろ?」
「え?でもお風呂の中に入る前は体と髪の毛洗ってからはいるんじゃ……」
もっともだ。だがまだ理由がある
「それでも落とせてない菌があるだろ?そんなのに智花を入らせたくない」

「お、お兄ちゃん神経質すぎるよ……昔はそんなことときにしなかったのに。あれ？でもお兄ちゃんがそれを気にするって事は……？」
智花が顔を赤くしたままなにか考え事をしている。俺は早く風呂に入りたいのだが
「お兄ちゃんは私が入った後のお湯とかって気にしたりするの！？」
うおっ、なんでそんなこと大きな声で言うんだよ。ご近所さんに聞かれちゃうでしょうが。
「いや別に。俺はそんなことまったくこれっぽっちも気にしない」
「お湯抜いてくる」
「あれ？なんでそんな結論に達してしまうのかな！？智花さん！？」
風呂に向かって早足で歩いていった智花を止めなくては。
汗かいた後に風呂入らないとかなんかやだ。

「お兄ちゃんのバカ」
お湯を抜かせる事やめさせたらこんなこと言われた。
「なんで俺はそんな理不尽なことをいわれないといけないの？だれか教えて」
「お兄ちゃんが鈍感で失礼な人だから」
「わお。いったご本人に教えてもらっちゃったよ。で、なんで怒ってるのさ」
「別に怒ってはないよ」
いやいや、ほっぺた膨らませて怒ってないってのは無理があるんじゃないのか？
「……そい」
膨らんでいた智花のほっぺたをつついた。つつくっつーか押した

「ぱふぅ！もう、どうしてこんなことばっかりするの！」
「いや、なんか可愛かったからさ。やってみたくなった」
「か、可愛い……で、でもそれとこれとは別だから！可愛いって言われたのは嬉しいけど……」
「嬉しいんですか。俺智花の素直にそういう事言えるところすごいと思う。」
「そ、そうかな？普通にしてるつもりなんだけど……」
智花はさっきと同様に顔を赤らめた。さっきのどこにそんなことにさせるワードが？

「うんそうだよ。素直な所は本当にいいと思う。そんなわけだからそろそろ風呂に入らせてくれると嬉しい」
「で、でもお兄ちゃんは私のことかわいいっていってくれるけどそれは妹としてだよね？」
「そうだ。風呂に入れてくれると嬉しいぞ」
「わ、私はおにいちゃんの事が、その……好き、なんだけど」
「うんだからそれ家族としてのだと思うから。もう上半身脱いじゃって寒いんだけど、はやく風呂にいれてくれ頼むから」
今上着を脱いだわけだが一向に智花がどいてくれる気配がない。どうすればいいんだ
「お、お兄ちゃん！裸になるのはいけないと思うよ！早く服来て！」
「いや智花が話すの一旦中断して俺を風呂に入れれば全部済む話だよね。これ以上いってもどかないんなら強行手段とるぞ。」
「お兄ちゃんの裸……恥ずかしくてみれないよぉ」
智花よ。恥ずかしがるのは勝手だがはやくどいてくれ頼むから。智花が風呂のドアの前にたってるから入ろうにも入れないんだよ
「ああ、もう……退かないんならしょうがないな。」
俺はどこうとしない智花の腋《わき》に手を滑り込ませて抱っこしてやった。
「ふ、ふえ？お兄ちゃん！駄目だよ！そういうのは駄目だよ！」

「なにがだ。ほいこれでオッケー。ドア閉めるから指挟むなよ」
そういって俺はドアを閉めて全裸になって風呂に入った。
服来たまま風呂はいるやつなんていないと思うが。

★

「あー、いい湯だった。ひのきってやっぱ落ち着くわ」
俺の家の風呂はひのき風呂だ。前昴に言ったらすげえ羨ましがられた。
「母さん飯」
「そのまえに恭平。智花になにしたの？」
こんな感じのシチュエーション前もあったと思うんだよね、俺。
「なにもしてないよ。あ、抱っこはした」
「まぁ、抱っこしたの。いつのまにか昔みたいに仲良くなったのねぇ。智花がすごく顔を赤くしてるから何事かと思っちゃったわ。お父さんなんて恭平を殴りにいくって聞かなかったんだから」
あんたなんてことを。ていうか帰ってたのかよ父さん。
「父さんと智花は？」
父さんがいないのが気になって聞いてみた。智花はたぶん部屋だろう。
「お父さんはトイレにいってるわー。智花はあそこに」
「え」
母さんが指差したところはリビングの端っこのここからではみにく

い角度にある場所だ。
そこに智花はいた。
わかりやすく体育座りで落ち込んでる。
「この歳でお兄ちゃんに抱っこ……嬉しいけど恥ずかしいよぉ」
前言撤回。やっぱり落ち込んでないのかもしれない。
「智花ー」
智花の前にまわりこんで呼びかける。
「お兄ちゃん！？もうお風呂あがったの？」
「おう。ていうかなに言ってたんだお前は。９時だからもう寝なさい」
兄さんらしく注意してやった。でも最近の小学生って９時に寝ないんだよな。
智花なんて勉強してるから寝るのは１０時とか１０時３０分だ。
もっと肌に気をつかったりしないのか？
「いいもん。まだ眠くないし」
智花には珍しい反抗的な口調。なんか怒らせるようなことしたかな？
「しょうがないな……ほーらたかいたかーい」
後ろにまわりこんで智花に俗に言う『たかいたかい』をしてやった。
完全に赤ちゃん扱い。
「ふええ！？やめてよお兄ちゃん！はずかしいよぉ！」
「家の中で何を恥ずかしがる必要がある。寝るっていうまでやめないからな。いえーい、たかいたかーい。ああ、なんかやってる俺が楽しくなってきた。せーの……」
「お、お兄ちゃん！寝るから！寝るからおろして……」
最後の方は弱弱しくなってたが寝てくれるそうなのでたかいたかいはやめたやった。もうちょっとやってたかった。
「うぅ……お兄ちゃんのバカ」
「えぇ！？なんで！？」
最後に俺を罵って智花は部屋へといった。

「恭平。お母さん今のは恭平が悪いと思うの」
「やっぱりたかいたかいは子供じみすぎたか……でもあせってた顔は可愛かったからよしといよう」
「恭平……いつからそんな子に」
隣で母さんが嘆いていたが理由もわからないし気にしない。

★

飯を食った後に流石にまずいと思って智花の部屋に向かった。
智花の部屋からは明かりが漏れていてまだ起きているようだった。

「智花ー話そうぜー」
軽快にドアをあけたら、智花がベッドに突っ伏していた。なぜか俺の愛用の抱き枕をもって
「智花……それ、俺の抱き枕」
「知らないもん。今日はこれ抱いて寝たい気分だから、お兄ちゃんには渡せません」
「えー……それないと兄ちゃん寝つき悪くなるの知ってるだろ？返してくれよぉ」
あまりしられてないことだが、俺は愛用の抱き枕がないと寝つきが悪くなる。ていうかなにか人形てきなものでもいいから柔らかくて大きいものを抱いて寝たい。
こんにゃくはだめだぞ。臭いしあれは柔らかいとかそういう次元じゃなくてぷるんぷるんだ。
「だったら枕抱いて寝ればいいと思う」
智花さん。言葉の節々にトゲがあるように感じるんですが気のせい

ですよね？
「いや、俺は頭を枕においてなおかつ抱き枕を抱いて寝なければ駄目なんだ。枕ない場合、寝る事はとても難易度が高いものになる。寝るだけなのに」
わかる人にはわかるよね？
「じゃあ今日は寝なければいいと思う。1日くらい平気だよ。お兄ちゃんだもん」
「ねえ智花、言い方はすごく可愛らしいんだけどいってることはすごく怖いよ？智花は深夜にのどが渇いて台所に水を飲みに行く怖さ知らないでしょ。相当なんだからなあれ。うちじゃっかん平屋なんだからなおさらなんだからな」
うちの間取りは結構広い。1階がすごく長くて2階はそれの半分、といったところだ。
わかりにくい説明だね。
「私はいっつもお部屋にお水持ってきてるから平気だもん。お兄ちゃんとはちがって計画的だよ」
「お、それいいね。今度からそうするわ。でもそれはそれとして智花すごく冷たくない？もっと話しようよ」
「お話ならもうしてると思うよお兄ちゃん。」
「いやそうなんだけどさ……抱き枕、返してほしいなーなんて」
「さっきもいったとおり、私は今日抱き枕を抱いて寝たい気分だから無理だと思うよ」
「智花、さっきのはごめんってば。俺も遊び心でやっちゃっただけで……悪気はなかったんだ！」
悪気はないとはいいきれないが、そこはまあおいておくとしよう
「悪気がなかったら許されるほど世の中は甘く作られてないってこの前お父さんが言ってた」
おのれクソ親父。小学生のいたいけな娘になんてことを教えてやがる。
せめてあと1日遅く教えといてくれよ……

「なあごめんってば……許してくれよ」
「謝ればなんでも許してもらえる世の中じゃないってこの前お父さんが言ってた」
あの人とは一回戦争をしたほうがいいと思うんだ俺。
「よーし、そこまでいうんだったら今日智花と一緒に寝るわ」
ふ、ここまでいったら流石に返してくれるだろ。今智花が怒ってるからよりその可能性が増える事になる。
「ふえ？え、あ、あのそれはちょっとまだ……ふぁう……」
えー……そんな反応されても困るんだけど。早く抱き枕返してよ。
「わかった、一緒に寝ないから抱き枕返して」
「駄目」
駄目ですか、そうですか
「じゃあ俺歯磨きしてくる」
「私はもう終らせた」
「ああ、そう。なんで今それをいったのか兄ちゃんはとても疑問に思っています。」

★

「歯磨き終らせたぞー！抱き枕返せー！」
テンション上げめで言ってみた。いきなりテンポかえたらビックリして返してくれるかも。
「絶対に返さないから」
……作戦は失敗に終りました。
「じゃあ一緒に寝るしかないな。おやすみー」
そういって俺はためらいもなく智花の布団にもぐりこんだ
「お、お兄ちゃん！駄目だよ！お父さんに怒られちゃうよ！」

「知らん。俺は今父さんにむかついてるから父さんなんか関係ない」
「うう……なら、しょうがないよね。うん。しょうがなくお兄ちゃんと一緒に寝るんだから……しょうがなく……」
そんなにしょうがなくの部分強調しなくてもいいじゃないか。
ていうか今智花が俺に抱きつこうとしてたので抱き枕のガードが薄れた。抱きつこうとしたのが運のつきだったな。そして智花に抱きつかれる感触を味わえなかった俺は負け組みだな。
俺はその一瞬の隙を見逃さずに抱き枕の奪取に成功した。
「じゃあ抱き枕も帰ってきたことだし、自分の部屋で寝るわ」
「え？そ、それはその……今日は駄目！」
「なして？」
俺に廊下で寝ろってか。
「い、一緒に寝たほうが、いいとおもうの」
「いや、思わないだろ別に。まちがってるぞ智花」
「そういうんじゃなくて！お兄ちゃんと一緒に寝たいの！」
「え」
「あ、これはその……ふぁうぅぅ」
「ま、別にいいけど」
「ほ、ほんと？」
そんなに露骨に喜ぶな。可愛いから。
「これをみた父さんの顔もみて見たいしな。父さんが来るまで絶対に智花をはなさん」
「え、それって……」
「抱き枕代わりにしてやる」
「やっぱり……で、でもそれはそれで……」

こうして今夜は智花の部屋で智花と一緒に寝る事になった。
父さんがどんな顔するか楽しみで仕方ない。

一緒に寝たっていいじゃない、兄妹だもの。（後書き）

感想よろしくお願いします。

いや、別に見ようとおもって見たわけじゃない。（前書き）

智花がキャラ崩壊しまくりですけど……
もう開き直っていいですか？

いや、別に見ようとおもって見たわけじゃない。

深夜２時。
今智花を抱き枕代わりにして絶賛爆睡（？）中だ。
こんなこと考えられてる時点で寝てないけど智花が寝てるからよしとしようじゃないか。

「寝れない……」
それはなぜか？
理由は簡単。智花を抱いて寝てるからだ。
俺だって男だ。いくら妹で小学生だからって体が反応しないわけがない。
きもいと思う奴は勝手に思え。全ては智花の可愛らしさのせいだ。

「……水飲みに行くか」
喉が渇いたのでリビングへ水を飲みにいこうとするのだが……

「怖い。無理だ、いけない」
いこうとするだけでいけない。だって怖いし、高校一年生だけど怖いモンは怖いし。

そうだ、智花を起こせばいいんだ！
色々考えた末にこの結論に達した。

いや待て、冷静に考えろよおれ。

仮に今智花が起きてくれたとしても、怖いから水を一緒に飲みにきてほしいなんて言えない。恥ずかしくて言えない、絶対に。

「うーむ。そうだ、部屋に水持ってきてるって智花言ってたな……探してみるか」

そう思って智花の部屋の探索を開始した。机の上にコップらしきものがあったけど気にしない。

「そういや前来たときには気付かなかったけど棚の上にバスケットボールがあるな……なんで部屋の中にあるんだ。インテリアか？インテリアなのか？」

昴の部屋にもバスケットボールが置いてあった。今の流行りなのかな？今度俺も置いておこう。

「おっとっと。当初の目的を半分くらい忘れてた。水をのまなきゃ」

何の迷いもない動作で机の上のコップをとり、水をのんだ。

飲み終わって、机の上にコップを置こうとしたら手が滑ってコップが床にゴン！と音をたてて落ちてしまった。

フローリングだからよかったけどむき出しの床だったら完全に割れてたな、うん。

「うぅん……お兄ちゃん、起きてるの？」

「いや、寝てる。睡魔との闘いに負けて今惰眠を貪ってるところ。俺は今寝てるから起きるんじゃねーぞ？起きたらあれだから。あれやっから」

あれってなんだと自分でツッコミをいれて智花を睡眠の世界へと誘う。だがそんな努力も虚しく智花は体を起こしてしまった。

「お兄ちゃん、どうしたの？今は……2時？なんでこんな時間におきてるの？」

「それはこっちのセリフだ。なんでこんな時間に起きちゃったんだ」
「なにか音が聞こえたから、お兄ちゃんかなーって思って……」
「思って？」
「……起きました」
ああ、そうですか……
これ以外でなんて反応していいかわからねえよ。今の所俺が智花に言いたいのはさっさと寝ろってことかな。俺もだけど。
「お兄ちゃん。机の上のコップとって？喉渇いちゃった」
む？智花よ、水を要求したのか？なら残念。タイミングが少々遅かったようだな
「ごめん。俺が飲んだ」
「ええ！？うぅ……ならいいよ、お水汲んでくるから」
「廊下すげえ暗いぞ」
「え」
暗いという単語に反応して動きを止める智花。
「知ってるか？2時ってお化けが出やすい時間帯って言われてるんだ」
理由はしらんがたしかそんなことといわれてたような気がする
「そ、そんなの知ってるよ？でも、今は関係ないと、思う……」
語尾が弱いな。さては怖いんだな？俺が自分で言ってて怖く感じてるんだから怖いはずだ。
「廊下を歩いてるところに後ろから髪の短い男の幽霊が……うわーって！」
「それお兄ちゃんだよね」
「俺は幽霊になった憶えはありません」
確かになぜか知らんが俺をモデルにして話をしたが、なんでわかったんだ。さてはエスパーだな。
「もう、お兄ちゃんのせいで怖くなっちゃたよ。お兄ちゃんついてきて」
「まあ俺のせいで智花が怖い思いをするのはいただけないからな。

いいぞ別に。ていうかここで行かなかったら俺はオカマになる事を決意する」
「お兄ちゃんには男でいてもらわないと困るよ……これからなんて呼べばいいのかわからなくなっちゃう」
そこかよ。なんかこう、。もっとお兄ちゃん大好きみたいなコメントがほしかった。
「オカーマンって呼べばいいとおもうよ。ていうかついてくってってんだから早く行こうよ。関係ないが俺は今無性にトイレに行きたいので早く廊下に出たい」
小便がやばいことになってる。このまま我慢してたら膀胱炎確実だわ。

★

「あばばば。智花、怖い、もう無理だ。怖い」
廊下は予想以上に暗かった。智花は多少怖がってはいるが俺ほどではない。
まあ自分の家を怖がるっていうのも変な話だがな
「お兄ちゃん少しは静かにしようよ、もっと怖くなっちゃうよ？」
そうはいうがよ、すごく暗いんだよ。灯りつければいいじゃんって思う人もいるかもしれんが電気のスイッチは玄関付近にあるので玄関にいかなければ灯りはつけれませぬ。
「あ、やばいぞ智花、これ相当やばいかもしれない」
「ど、どうしたの？」
「尿意が、尿意がやばいことに……はやく行かなければ」
「ふええ！？廊下でお漏らしだけはやめて！」

「じゃあ早く行こう。いますぐいこう、いえ、いきましょう智花さん」
「別に敬語つかわなくてもいいのに……」
だってしょうがないじゃん。人間追い詰められれば敬語になるものさ。

「ふ～……助かった」
俺は無事トイレに辿り着き事なきをえた。
あとは智花の喉を潤すための水だ

「よかったねお兄ちゃん。まにあって」
「ああ、流石にこの歳で漏らすのはやばいのでな。本当に助かった。じゃあ今度は智花の水だな。ていうかすぐそこにリビングあるけど」
トイレのすぐ近くにリビングがあるので長々と歩かなくても済む
「ぱぱっと飲んでぱぱっと戻りましょうかね」
「うん」
すぐにリビングに行き、水を飲んだ。ついでに俺も水を飲んだ。また小便したくなったらやばいけどその場のノリで飲んだわ。

★

「さて、と。寝るか」

「え？お兄ちゃんここで寝るの？」
「こっちが『え？』だわ。智花が一緒に寝ようっていったんだろ」
それなのにえ？とか言われて……別に俺は自分の部屋で寝てもいいんだからな。
「そ、そうだったね。じゃあお兄ちゃんその……ふつつかものですが、よろしくおねがいしまふ、あ、します！」
緊張してるのか、智花はしますの所を噛んだ。兄相手に緊張することなんてないだろうに。

智花がベッドにもぐりこんだので俺もベッドにもぐりこむ。
うむ。智花のいい香りがするぞ。枕とかめちゃくちゃクンカクンカしたいわ。変態っぽいからやめるけど。
「おやすみお兄ちゃん」
「おう、おやすみ」
それ以上の言葉はかわさずに俺と智花は眠りについた。

★

ピピピ、ピピピ
5時に目覚まし時計の音がなる。まだ眠い、あれから3時間しか寝てないわけだしな……
「う、ん……お兄ちゃん、おはよー」
寝起きだからか、智花は舌があまりまわらないようだった。こうい

う智花も可愛いな。動画で撮りたいのだがビデオカメラは部屋にある。ちくしょう持って来てればよかった、ミスったわー……
「おはよう智花。今日も昴の家にいくのか？」
「うん、そうじゃなかったらこんなはやく起きないよ……」
まだ眠そうだな、それもそうか、実質あまり寝れてないのだし。
「ていうか父さんが来なかったな。つまらん」
ていうか娘の部屋に堂々と入ってくる父親は即行嫌われるルートなのだが。

高校生になったら智花も俺や母さん達に反抗するのだろうか？
『お父さんなんか、だいっきらい！！』
とか親父に言うのかな？ちくしょううらやまし……そう考えると憂鬱だ

「さて、今日の朝飯はなににするかなー。納豆は昨日食ったしな……どーしよっかなー」
朝食の献立ってすげえ悩むわ。本当は昨日の内に考えておきたかったんだけど考える暇がなかった。
「お兄ちゃん、簡単なものでいいよ」
「そうか。ていうか智花パジャマのボタン四つ外れてるぞ。あと一つ外れてたらアウトだったな」
「もうすでにアウトだよぉ！どうしていってくれないの！お兄ちゃんのバカァ！！」
ものすごい勢いで洗面所に走っていく智花。はは、可愛いやつめ
「あと寝癖すごいぞ、がんばってなおせよ」
洗面所あたりから声が聞こえたがスルーの方向で。
智花はおもしろいな
あとなんであんなにパジャマがはだけていたのかというと智花の寝相はすこぶる悪い。
あんなに可愛い顔をして寝てるときはバーサク状態だ。

寝てる途中なんどもベッドから落とされて大変だった。
「なんとかならないもんかね」
俺は顔を洗いに洗面所へ向かった。

「パーリラパリラパーリラフゥフゥ！！……しつれいしまーす」
某声優ユニットが歌っている歌を口ずさみながら洗面所にはいった。
途中で恥ずかしくなって歌うのやめたけど。

「ふぇ……」
「……智花にビンタされるか俺が見なかったことにするかどっちにする？」
洗面所では智花がシャワーをあびるべく、服を脱いでるところだった。
それをみて俺は冷静に対処する。流石俺、オットナ～！
「お兄ちゃんのバカァ……もうお嫁にいけない……」
智花はビンタもせず、俺に忘れてくれともいわずにその場に座りこんでしまった。
そのまま座るな。見えるところ全部見えてっから
「心配するな、昴がもらってくれるぞ」
「お兄ちゃん……ひどい、もうしらないから！」
スパっとたちあがるとシャワーを浴びにいってしまった。俺が嫁にもらうとか無理だからな。もらいたいけど無理だからな。

「とりあえず顔あらうか」
顔を念入りに洗っているとき、朝食の献立を思いついた。
「目玉焼きだな。ここは」
シンプルオブザベスト？たしかこんなんだったような気がする

「ワーカァッテイィルヨォヒトリィノムリョクサナンテ……」
これまた某声優ユニットが歌っている歌を口ずさみながら目玉焼きを焼いていた。また途中で恥ずかしくなってやめたけど

「……朝ご飯できた？」
頬を軽く膨らませながら智花が聞いてきた。これはあれだ、怒ってるな
「もうちょいまって。あと15秒。ここだけは絶対にゆずれない」
俺は目玉焼きを焼くとき好みの時間がある。これを守らないと納得できない

「できたぞーこの目玉焼きは自信あるわ、マヨネーズつけて食え。今回の目玉焼きはマヨネーズな空気をかもしだしてる」
「私お醤油の方が好き」
「ああ、そう？いやでも今回のはマヨネーズっぽいかなーって……」
「私、お醤油の方が、好きだから」
「はい、すんませんでした……」
なんだろう。智花の迫力がやばいんだけど。
裸をみてしまったからというのも理由の一つだろうが、あれか？自分の目玉焼きにかける調味料を勝手に決められたからか？いや、たしかに醤油もうまいけどさぁ……今日のはマヨネーズな雰囲気をかもしだしてるんだよぉ……
「智花ご飯どんくらい？」
「少しがいい」
「ばっか智花、朝がっつりくわなきゃだめだぞ？朝昼がっつりくって夜は少しだけ食べる。それが健康体になる初めの一歩だ。というわけで大盛りで」
「少しで、いい」
「ですよねー……」

朝は食欲あまりでないもんね。しょうがないよ、うん。

無言の食卓。咀嚼音と、箸と茶碗がぶつかる音だけが響いている。
率直にいうとものすごくきまずいのだが……
「あの、智花さん。怒ってます？」
「なにが？」
え？いつもの智花らしくないお返事ですよ？どうしようこれ、どうしよう。
「さっきの裸見ちゃったときの……」
「気にしてないからいいよお兄ちゃん」
絶対きにしてるでしょ。怖いモンだって。
「そろそろ行こう、お兄ちゃん、早く制服に着替えて」
「あ、はい。了解しました」
小学生に命令される高校生……なんてなさけない光景

「着替え終わったぞ、智花」
「じゃあ、いこっか」
ああ、ぎこちないざます……
「智花！！」
「ふぇ？はい！」
大きな声で呼んだため驚いてしまったのだろう。智花がきちんとした返事をした。
「なんでもするから許してくれ！さっきのは本気で謝る！ごめん！」
「はう……別に怒ってないっていったのに……でも、お兄ちゃんがなんでもいう事を……わかった。そのかわりなんでもいうこと一つ聞いてね」
「お、おう、まかせろ」

智花が１００点満点の笑顔を見せた。
よかった、智花は笑ってたほうが可愛いからな。

「なんでも、だからね？」
「はい……」

笑ってた方が可愛いけど今回のはなんか怖かった。

いや、別に見ようとおもって見たわけじゃない。（後書き）

感想よろしくお願いします！

５０本、それは静かに決まるもの。（前書き）

くさいなぁとおもいながら付けたサブタイトル。

タイトルも臭いし、俺の屁も臭いし……

そして内容の進行が急ぎ足になってしまっていて、矛盾しているところが多々あるかと……直せよって思うかもしれませんがそこはスルー……できないか。

あとで時間があれば直します。

どうぞよろしくお願いします。

５０本、それは静かに決まるもの。

「きっとくる～、きっとくる～、きっとくる～、デン！」

自転車に乗りながら有名ホラー映画の曲をくちずさむ。

あの映画は怖いからみてないけど曲はおもしろい。おもしろいっておかしいかな？

「お兄ちゃん、周りの人が見てるから歌うのやめて？」

「はっは、智花はアフォだな。今の時間はランニングしてる人しかいないぞ？何を恥ずかしがる必要がある」

「その人たちがこっちみてくるからやめてっていってるんだけど……」

智花、お前気にしすぎだぞ。そんなんだったらあれだ。運動会で走ってる所見られたくないって言ってるようなもんだぞ……違うか？違うな、うん。

「わかったよ、じゃあ黙って昴の家に行くとしますか」

「そうしてくれると嬉しいな」

・・・・・・・・・・・・・・・・・

「……ひっかるく～もをつきぬ～け、ばいおべぇぇぇばいおべぇぇぇ」

「やめてっていったのに……」

いや、急に歌いたくなるときってあるじゃん？それだよそれ

★

そのあと俺が急に歌いだすこと二回。曲は電磁砲でなんやかんやするアニメのＯＰとＥＤだ。

で、なにも起こることなく昴の家に到達できたわけだが……

昴が家の前ではぁはぁしてた。傍からみたら危ないひとだ。いや、傍からみなくても危ない人だな

「おはよう昴」

「おはようございます昴さん」

「ふぅ、おはよう二人とも、今日は早いんだな」

息を整えた昴が挨拶を返した。なんで挨拶できたんだろう俺。

「なんで息荒くしてんだ？急にムラムラしたとか？」

だとしたら完全に危ない人だ。

「んなわけあるか！朝のランニングだよ」

「昴さん、ランニングしてらっしゃるんですか？」

ランニングか。そういや最近やってねえな

「まあね、最近バスケの練習再開したから」

「ほう、それは本当かな？」

「な、なんだよ恭平」

「いや、なんでもないが？」

別に疑ったりしたわけじゃない。急にそういってみたくなっただけだ。

「そういや恭平はいつもなにしに来てるんだ？」

「お兄ちゃんには、付き添いで来てもらってます。一人で来るのは時間がかかってしまうのでお兄ちゃんの自転車に乗せてもらってる

んです」
「べ、別に昴に会いにきたいとか、そういうんじゃないんだからね！」
「いや、そういう目的できてるんだったら即行で追い返してるが……恭平は妹思いだな」
「なして？」
「いや、智花をわざわざ送るために来るなんて、いい奴だなって」
いや、当たり前じゃね？智花のためならなんでもできる気がするもん俺。

「別にいい事してる意識はないんだがな……つうか早くフリースローやっちゃえよ智花」
「あ、そうだった……では昴さん、よろしくお願いします！」
「うん、がんばれ智花」
昴の応援を背に受け、智花は連続５０本を目指してフリースローを開始した。

★

「ふぁう……今日も駄目でした」
「まあそんな簡単に出来るもんじゃないし、仕方ないよ」
「でも、早く昴さんに皆のコーチしてほしくて……」
「……そっか。智花、シャワー浴びてきな」
「はい……」
智花、元気ないな。そんなにショックなのか？
「なあ恭平」

「なんぞ？」
昴が話かけてきた。なんだ？告白ならお断りだぞ。
「明日からは飯こっちで食わないか？智花もフリースローし終わったらおなかすいてるだろうし」
ふむ……そうか、そっちのほうがいいかもな
「じゃあ、よろしくたのむわ」
「おう」
昴の家の朝食か……今、朝だけど明日の朝が楽しみになってきた
「んじゃあ智花がシャワーからでたら学校いくか」
「おう、その間に飯食ってくるから部屋でまっててくれ」
「ういーっす」

★

今昴の部屋にいるんだが……なんか妙だ
思春期男子高校生の部屋に流れている特有のオーラが昴の部屋にはない。
まあ、簡単にいっちゃうと『俺のオタカラここにあるぜ』オーラだ。
オタカラっつーか俗にいうえろ本だ。
「ない……上手く隠しているのか？だとしたら昴……筋金入りだな」
あっちの意味で。
「ベタだけどベッドの下とか？」

ベッドの下をみるが、そんなものはない。あるとしたら埃くらいだった
「タンスの後ろは？」
ここも埃しか……いやまて、下敷きが挟まってた。
「残るところは……額縁の裏だな」
ドキドキする……俺のコスモがビクビクしてるぜ
「お兄ちゃん、ベッドに登ってなにしてるの？
「ふぉおおお！！？」
ビックリしたぁあぁ！危うくベッドから転落するところだったぜ
「なんでもないぞ智花。急にベッドに登ってみたくなっただけだ」
いや、流石にこの言い訳は無理があるだろ自分。
「そうなの？お兄ちゃんはたまに変な風になるときがあるよね」
ストレートに言われると傷つくな……
「そうなのか、そういや昴遅いな。いつまで飯食ってるんだろうな？」
「お兄ちゃん、人には人のペースがあるんだよ？」
「いや、そうだけど……もう15分たってるぜ？俺なら5分で済ませるね」
「お兄ちゃん……朝はバナナ1本に5分かけてるよね……」
「……それはまだ眠いからスローペースになってるだけだ」
食べるのが遅いわけではない。断じてない。

「すまん恭平、智花。母さんの飯消化するのに時間かかっちゃってさ」
「なして？」
「母さんはいつも飯を作りすぎちゃうんだよ。普段は冷蔵庫で保存するんだけど、今日はやけに豪華だったからな……
残すのももったいないと思ったんだ」
なるほどな……ていうか作りすぎたもの全部食ったのか昴。やるなぁ
「じゃあ恭平、行こうぜ。智花も」

「おう、智花は美星さんに送ってもらうんだよな？」
「うん。それまで家にいろっていわれたよ」
「そっか、じゃあ俺達は先に行くから。じゃ～な～」
智花と別れ、自転車で学校へ向かった

★

「え～、ここの式はxに3を代入して……」
……眠い。
何がxに3を代入して、だ。
お前の口の中にタバスコを代入してやろうか
朝昴の家をでて、時間はニュートリノもびっくりな早さでたち、今四時間目。
もうすぐ授業も終わりに近づいている。
キ～ンコ～ンカ～ン……ッッッコ～ン
なんだこのチャイム。壊れてるんじゃないだろうか。
まあそんなことはさておき、四時間目の授業が終わった。
「起立、礼、ありがとうございました」
「あじゃじゃした～」
適当に挨拶をすませ、昴の机に向かう
「昴、飯食おうぜ」
「おう。でもちょっと待ってくれ、葵からメールだ」
メール？同じ校内にいるんだから会いにくりゃいいのに
「今日の同好会は無しだってさ、皆予定があるらしい」
「ふ～ん……まあ昴も夕方から用あるしな」

「は？」
昴はアホみたいな声をだし、アホみたいな顔をしている。このアホめ。
「いや、今日から夕方も智花が昴の家にフリースローやりに来るだろ？聞いてなかったのか？」
「まったく聞いてなかった」
だって今言ったしね
「まあそんなの後でいいから飯食おうぜ……うお！昴貴様、ハンバーグを弁当に入れてくるとはなかなかのツワモノだな」
「別に普通だろ……恭平、玉子焼きと玉子焼きトレードしようぜ」
「よかろう。卵の中になにはいってる？」
「……卵だ」
「テメェそんなんでトレード成立すると思ってんのか！俺の玉子焼きの中にはベーコンが入ってるんだぞ！」
「知らん。いただきます」
「あぁ！だ、だめ！それはらめえぇぇぇぇぇ！！！」
「気持ち悪い声をだすな！」
昴に玉子焼きをパクられた腹いせに奴のメインディッシュであろうハンバーグをいただいてやった。
ざまあみろ……そこまできにしてなかったけど

★

放課後、昴の家

「智花遅いな」

「そんな早く来るわけないだろ。俺達が早いんだよ～、さぁ、智花がいない内に俺と昴の愛を確かめ合おうＺＥ☆」
ぎこちないウィンクと共に右手を昴に差し出す。あ、はたかれた。
「気持ち悪いっての……お、あれ智花じゃないか？おーい」
ふ……昴よ、そんなに智花が待ち遠しかったのか？いつでも会えるようにコーチやっちまえよ。
「今日から放課後もよろしくお願いします！昴さん」
「ああ、こちらこそよろしく智花」
「そして俺のこともよろしく」
「恭平は何もしないだろ」
いやいや、何をいってるんだこの腐れロリコン野郎は。あ、俺もロリコンか。失言でございます……
「では、さっそく挑戦してよろしいでしょうか？」
「全然構わないよ。はい、ボール」
ありがとうございます、とお礼を言ってから智花はシュートし始めた。

★

それからしばらくたち、曇り空だった空から雨が降ってきた。
昴と智花は雨に濡れ、俺は縁側でそれを傍観。我ながら卑怯だと思う。
「４６……４７……４８……４９……」
フリースロー５０回まであと、残り１回。
「……智花、邪魔するようで悪いんだけど。せめてこれを」
昴が智花の顔へと腕を伸ばす。智花の体が少し揺らいだが、静かにそれを拒否した
「いえ、大丈夫です。だって、あと少しですから……」

昴も多少戸惑いの色を顔に浮かべたが、腕を止める事はなかった。
「ごめん、無理だ」
「ふぁ」
昴は雨に濡れた智花の顔をタオルで拭う
「……外れて、ほしいですか？」
昴が智花の顔をふき終わると、智花がどこか寂しげな表情で昴に聞いた。
「……女バスの五人は、元気？」
話をわざとそらす昴。だがこの質問は、答えるまでもない質問だ。
「教えてあげません。昴さんが自分の目で確かめてください」
いい終わると智花はシュートフォームを作る。
「じゃあ、これが５０本目、最後のシュートだな」
「はい」
静かに跳躍し、リングへとボールを放つ。

それはとてもきれいな放物線を描き
見るもの全てを魅了するとても鮮やかなシュートだった。

ボールはボードにあたることなく、静かにネットを揺らしていた。

５０本、それは静かに決まるもの。（後書き）

更新がとても遅れ、大変申し訳なく思います。
これも全部テストのせいだ。
テストのバーカ！

……感想よろしくお願いします

撮影は計画的に（前書き）

久しぶりの更新・・・
更新できなかった理由はあれです
ブランク？スランプ？まあどっちでもいいけどそれです

撮影は計画的に

「なあ恭平。その荷物はなんだ？」
智花がフリースローを決めた翌日、昴と共に慧心学園に向かうバスに乗っていた。
「これか？知りたいか？そんなに知りたいか？ん？」
「うぜえよ……言いたくないならいいけどさ」
「ならいいや」
昴の持ち物が学校指定のカバン、俺の持ち物は学校指定のカバンの他に大きめのリュックを持っていた
しばしの沈黙。それを破ったのは昴の方だった。
「なあ、やっぱりそれなんなんだ？」
「ちょ、お前そんなに知りたいのか？んん？」
「お前本当はすごくいいたいだろ」
なぜわかった。
「まあ、向こうについたら嫌でも知りたくなるぞ」
「そうか？ならいいけ……よくない。どうせ怪しいモンだろ」
「ち、ちげぇよぉ！なにいってんだよ昴！ちげぇよぉ！」
「お前な……少しは自重しろよな……」
何を言ってるのかわからないな。
まあ、何かあるのは明確なのだが今ここで言うつもりはない。なぜならすぐにわかることなのだから

★

バスを降り、慧心学園の大きな門を抜け、体育館へと向かう。

その途中、中学生と思しきグループと目があったのだが、なんか笑われた。
あれか、俺のこの荷物のせいか。
だが、そんなの俺は気にしない。俺が思ったのはただ一つ。

私立、レベルたけぇ。

何のレベルかって？そりゃあもう女子のレベルさ。さっきのみた？可愛すぎじゃね？見た？見た？
あと今すれ違った女子の匂いだが、それはもういい匂いでした。ご馳走様でした。

「すぅーはぁー……」
俺がいかがわしい考えを抱いていると、昴が扉の前で深呼吸をし始めた
「なんだ？緊張してるのか？」
「んなわけあるか。ただ、まあ、心の準備だ」
初めと同じやり取り、だが一つ違うのが昴の反応だ。
前はもう少し緊張していたはずだ
「じゃあ、いくぞ」
昴が鉄扉に手をかけ、ガッ引き開けると

『おかえりなさい！あなた！』
「俺の出番！！」
リュックからカメラと機材一式をとりだし、３秒で準備をすませ、

指が擦り切れるほどの早さでシャッターを切る。
完璧だ。
「はぁ……勘弁してくれ」
昴が息をもらし、がっくりと肩を落としていた。

★

「さぁ、とりあえずここに座って、おやつにしましょうあなた。恭平さんも」
「あはは！あなた久しぶり！おら、ポッキー食えポッキー、美味いよ」
「おー、おにーちゃんときょうへい。いちご味があるよ？ひな、いちご味好き」
「こらひな！今だけは『あなた』だろ！きょーへーはなんて呼べばいいんだっけ？」
「叔父さんよ真帆」
お、叔父さん！？せめてお兄さんにしてよ！俺の扱い雑じゃないか！？
ていうか、裸エプロンってどうなのよ、法的に。
あ、スク水着てた。ちょっとまて、スク水もまずいんじゃないか？
「なぁ、ちょっと聞いていいかな」
「はい、なんでしょう」
昴が皆から顔をそむけながら言う。なんで見ようとしないんだ？俺なんてガン見&撮影だぞ
「その常軌を逸した格好はなんだ！？あと呼び方もなんのつもりなんだ！？」
おお、ダブルツッコミか。高度なテクニックだ。

「長谷川さんのことを調べた結果、ツボはメイド服などではなく、もっと家庭的なほうが好きと判断しました」
なるほど……確かにエプロンは家庭的だな、うん。
「水着エプロンのどこが家庭的なんだ！？」
「ええと、仰る意味がよくわからないのですが……それにさすがに裸はちょっと抵抗がありますし……そこらへんは想像でおぎなっていただけると」
裸エプロンとか知ってるのか……紗季、恐ろしい子……！
「そういう意味じゃありません！」
「なあ、昴の趣味とかはどうでもいいんだが、智花と愛莉はどこだ？あの二人だけメモリーに保存しときたいんだけど。一秒でも早く撮りたいんだけど」
だめだ、抑えろ俺！本当の紳士は慌てず騒がず……真性のロリコン紳士になると決めたじゃないか！三日まえくらいに！

とか自分の脳内で自分とたたかっているとふと視界の隅っこに二つの影がみえた
「なん……だと？」
ああ、だめかもしれない。俺はシャッターを切る前に死んでしまうのかもしれない。
そんなことを考えながら一心不乱にシャッターを切り始める。撮れてんじゃん、写真。
「ぐ、だめだ俺……こんなことをしていたら本当の変態みたいじゃないか！俺はあくまでも紳士的に」
「いや、もう変態だぞお前」
「昴！そんなこというな！こんな光景を見たら誰だって写真撮りたくなるじゃねえか！」
「はぁ、お前の頭をどうにかして治す方法はないのか？」
ないんじゃないかな？紳士をやめる理由がどこにある？

「うぅ、紗季ちゃんにまかせておけば安心だとおもってたのにぃ……」
「ふぁ……お兄ちゃんがこっちみてる……恥ずかしいよぉ」
二人よ、そんなこというんじゃない。バッチリ似合ってるから
「なあ紗季。これは君の発案か？」
「え？はい、そうですけど。気にいってもらえましたか？」
その言葉を聞いた瞬間、昴は地面に額をこすりつける体制になった。
「お願いです。今すぐ着替えてきてください」
まあ俗に言う……いや俗にいわなくても土下座だ。

★

「球技大会？それがあんな格好で俺達を迎えようとした理由なの？」
まあ俺はぶっちゃけ部外者だけどな
「おう！ぜってー負けられないんだ！特にD組には！あ、でも衣装を選んだのは紗季一人だよ？他のみんなはノータッチ！」
うん、智花が水着エプロンとか選んでたらそれはそれで……いいんじゃないか？
「く、なに？なにがいけなかったの？」
「紗季、そんなに悔しがるな。次はもっと別のでいってみようか」
「別の……例えばどんなのがいいんでしょうか？」
「それをいっちゃうと俺の趣味趣向がばれてしまうのでいいません」
いわない。絶対にチアガールなんていわない！
「あのさ、普通に頼んでよそれくらい。こんな脅迫じみたことしなくても」

「そんな、脅迫なんかじゃ……うぅ」
「ぎゃはは、サキさん偉そうなこといっておきながら私より全然駄目じゃねえか！クラスでは氷の絶対女王（アイス・エイジ）政なんて怖がられてても男心をつかむのはてんで苦手なご様子で！」
真帆、お前は紗季の失敗がそんなに面白いのか……
「〜〜〜〜！！」
真帆にバカにされて顔を真っ赤にする紗季。
そんなにショックなのか？いや、自分のチョイスした服が失敗したらそりゃ恥ずかしいよな。

「――――で、聞きたい事が山ほどあるんだけど、秘策なんて必要なのか？普通に戦えば勝てるだろ？」
まあ、このまえは男バスに勝てたんだからそう思うよな。俺もそう思ってるし。なにより素人に負けるはずないだろ。いや、こっちも素人だけどさぁ
「もちろんまけるつもりはないけどさあ、６－Ｄにはバスケ部が５人もいやがるから」
「え？５人？部員増えたのか？」
昴の発言に皆が少し黙る。
が、賢い智花は昴の発言の意味がわかったらしくフォローしてくれた
「ち、違うんです！６－Ｄには男バスが５人いて、この球技大会も男女混合で行われるそうですよ？」
ほう、そうなのか。初耳だ
「へえ……でもこっちのクラスには竹中がいるじゃないか。なにもしなくても勝てると思うんだけど」
「それが……真帆となつ……竹中の仲が悪くて」
「ふん、あんにゃろー筋が通ってねえんだよ！６－Ｄに負けるのは嫌だけど私とバスケするのはもっとやだとかぬかしやがって！きょーちょーせーゼロだ！」

「真帆、それあんたが四年のとき書かれてたことでしょうが。とにかく、６－Ｄには負けるわけにはいかないんです。長谷川さん。なんとかなりませんか？」
「お願いすばるん！すっげー秘策で私たちを勝たせてよ！」
「んー……それは次の練習までに考えておくから、練習しないか？」
「えー！やだよー！今考えてよ！ね、お願いすばるん！」
「真帆、長谷川さんに迷惑でしょう。ほらとっと離れる」
紗季に言われムッとした表情をつくる真帆。だけどそんなに早くにはさすがの昴も考えつかないだろう
ここは我慢ということで……

「じゃあそろそろ練習はじめようか。練習メニューどこにあったっけ？」
「あ、あの、昴さん！今日は久しぶりの練習ですし試合をするというのは……」
「そうですね、私もそれがいいです。みんなもそれでいいよね？」
紗季の言葉に愛莉やひなたもそれでいいと同意するのだが……真帆だけはやる気なさげに同意した
そんなにひきずることでもないだろうに……

「あ、昴。俺は今日帰るわ」
試合をするとのことで昴争奪戦を繰り広げる女バスメンバー＋αに声をかける
「え？なんでだよ、恭平もやってこうぜ」
「そ、そうだよお兄ちゃん、久しぶりの練習なんだし……」
「うむう、折角のお誘いを無下にするのも大変申し訳ないとか思うのだが、ちょっとやらないといけないことがあるんだよね」
「やらなきゃだめなこと？」
俺の発言に昴が質問する。そう、やらなきゃいけないことがあるのだ。昨日帰るときに商店街でちょろっと見かけたバイト募集のチラ

シ。時給がよかったからやってみようと思い昨日その店にいってバイトをしたいということを伝えてじゃあ明日面接にきてちょといわれたから今日その店に行く予定だった

「ちょっと野暮用。つーことで俺はしばらくこここれない。まあ来ていい理由なんかもともとなかったしな。じゃあ昴、また明日」

「ん、おう」

みんなに挨拶し、慧心学園の前にあるバス停に立つ

トベーートベーー！！

バスをまっているといきなり携帯が鳴り出す。振動に驚きながらも携帯の画面を確認すると、そこには母さんからのメールが届いていた

『バイトするのもいいけどちゃんと勉強してね？あとお小遣いは無しにするとお父さんがいっていました』

メールにはこうかかれていたが、特になんとも思わずにバス停の前に止まったバスに乗り込んだ。

撮影は計画的に（後書き）

球技大会は都合上カットさせていただきます

球技大会の描写は書かずに恭平サイドのお話を書こうと思っています

バイト初日は眼鏡と一緒（前書き）

ああ、もうggdgdだ・・・

書き溜めてた小説は消えてるし、投稿しようと思ったらなんかエラーでて全部書き直しになるし・・・深夜に書くのもうやめようかな

バイト初日は眼鏡と一緒

「ふ……やってきたぜ、今から面接やらなにやらでお世話になってしまう店に」

俺がバイトする予定の店は地域ではなかなか評判の高いらしいファミレスだ。

繁盛していて、店員もそれなりにいたはずなのだが急にバイトを募集するとはなにかあったのだろうか？

店の正面から入っていき、レジの前にいたお姉さんに結構いい感じの顔で

「すいません、バイトの面接にきたのですが」

「あ、はい、今店長をお呼び致します」

顔をひきつらせ、早口で俺に伝えると逃げるように厨房の方に逃げ込んだ

「ふう……心にくるものがあったぜ」

あんなことをやられたら誰だって傷つくはずだ。現に俺が傷ついてるしね！

１５秒ほどたって店長らしき人がでてきた
でてくるの早すぎないか？もしかして暇なのかこの人
「えーと、確か湊君だったよね、じゃあこっちにきてくれ」
店の奥につれていかれ、狭い部屋に店長と二人きりになる。
この店長、なかなかいい顔をしている渋いダンディなので不思議と変な気分になってくる
アッー！な展開とか自然と想像してしまうのはなぜだろう
「うん、じゃあ湊君ね、君採用ね」
会ってすぐに採用されてしまった。
「え、ちょ、まだ何もいってないんですけど」
「ああ、ごめんごめん、人手不足で猫の手も借りたいくらいでね……誰でもいいから入ってくれないときつい状況なんだ」
ほう……それはまた大変な状況にきてしまったもんだ。だからあんなに時給がよかったのか？
「湊君はなにか特技とかあるのかな？」
「いきなりですね。そうですね……強いて言うなら、人付き合いとかは上手なほうですけどあ、あと最近バスケやり始めました」
「よし、採用で」
「いやだからはやいですってば」
「ごめんごめん、でも人付き合いが上手な人には特に入ってもらいたかったんだよ」
「なんでですか？」

「ちょっとバイトの高校生に毒舌な子がいてね……その子と上手く付き合える人が欲しかったところなんだ」
「へー……じゃあ採用ってことでいいですかね？その人とあってみたいですし、明日から来てもいいですか？」
その毒舌なバイトに興味が沸いた。なぜか？聞かれたらなんとなくとしか答えられん。

「え？何言ってるの？今日からに決まってるじゃない」
なん……だと？たしかに早く仕事を覚えるに越したことはないがこっちにも心の準備というものがあるし……

「えーと、それはちょっときついかも……」
「お願いだ！このとおり！君のためならケツだって差し出すよ！」
この店長、俺の見立て通りホモのようだ。ホモな人にはノンケをホモにするオーラをまとっているとばあちゃんがいってたような気がする

「わかりました。ケツはいりませんが、今日からバイトに入らせてもらいます。ただ、初心者なので優しくお願いします」
「仕事場に優しさを期待するな」
和やかなムードから一変。個室のドアが開き、そこから個室に入ってきたいかにも頭良さげなイケメン眼鏡が立っていた

「あ、ああ！こんにちは木崎君！今日のシフトは早かったよね！いやーよかった、木崎君がいてくれると本当に助かるよ！」
ん？店長の様子が変わったような気がする。この木崎って呼ばれた男に遠慮してるというか距離をおいてるというか……本当の自分を

さらけ出していないような……

「そんなお世辞はいらないので、店長。この新人の教育は僕に任せてもらえないでしょうか」

「ええ？ま、まあ別にいいけど」

「はい。じゃあ早速やりますか。おい新人、こっちにこい」

「む、なんだよその言い方は」

「黙れ。お前は僕に従ってればいいんだ」

なんだこいつ。喧嘩売ってるのか？

木崎とかいう眼鏡にレジの前まで連れてこられた

「まずレジ打ちからだな。まずは計算の仕方だが、一度しか説明しないからよく聞いておけ」

なぜにワンチャンスなんだ

「いいか？まずは客のレシートの総額を打ち込んでだな・・・」

「ほう」

「客から受け取った金の額を打ち込んで、相手にレシートを渡して終了だ。必要ならば釣りも渡すとなお良い」

必要ならばって、普通あったら渡すだろ。

「じゃあ、やってみろ。ちょうど会計の客もいることだしな」

「オッケー任せろインテリ眼鏡」

俺は客が食べた額、１４００円をレジに打ち込んで行き、客から受け取った金の額をレジにうちこんでいく

「えーと、お釣りは１２６００円です」
「ちょっとまてお前。１４０００って打ち込んでたろ今」
この眼鏡は何をいってるんだ？そんなはずがないじゃないか・・・
「あ、やべ」
みてみると１４００円と打ち込むべきところが１４０００円になっていた。
いやあ、凡ミス凡ミス
「・・・もういい。ここは俺がやっておくからお前はそこで見てろ」
「任せろ。みるのは得意だ」
この眼鏡、さっきは嫌な奴かとおもったけどイジりやすいやつじゃないのか？

★

「さて、次は皿を洗ってもらう」
レジ打ちも無事（？）に終わり、今度は厨房にきていた。
「皿洗いなら得意だぞ。１０枚に１枚しか割らなくなった」
前は１００％の確立で皿を割っていたものだ。
「もういい、お前今日は上がれ」
「オッケーだ眼鏡。そもそも俺は明日からくる予定だったんだぞ」
「そんなの知るか」
眼鏡め。俺の事情をことごとく無視しやがる。

「じゃ、俺は着替えて帰る」
「いや、待て湊」
初めて眼鏡が俺の名前を呼んだ。いや苗字だけど。
「お前、バスケやってるんだってな」
「立ち聞きとはいい趣味してるじゃねえか」

どうやら俺と店長の話を眼鏡は聞いてたらしい

「湊。お前バスケ初めて何年目だ？」
「聞いてなかったのか？最近始めたっていっただろ。一ヶ月くらいだよ」
「そうか・・・話にならないな」
「あ？」

たしかに俺は初心者だが今の言い方にはカチンときた

「一ヶ月程度じゃまともにシュートも入らないだろう」
「……だったらなんだよ」

俺のシュートは高い確率でゴールに入る。
……１０本に７本くらい？まあ、七割だ。

「今のうちにバスケのことなんか忘れておけ。高校からじゃ、ロクに上手くもならん」
「は？お前知らねえの？高校からバスケ初めてプロになった人だっているんだからな」
「その話はしっている。それはその人が人並み以上の努力を重ねてきたからだ。今のお前にはそんなものがまったく感じられない。おそらくは、遊び半分でやっているのだろう」

「……遊びじゃねえよ」
「ほう、だったら理由はなんだ？」
くそ、なんなんださっきからこいつは。いちいち突っかかってきやがる
「……妹と仲良くなるため」
「十分不純な動機ではないか。やはり、遊びと変わらないな」
「なんだとう！？お前、あれだぞ！スラムダンクの主人公だって不純な動機でバスケ初めてすげえ上手くなったんだぞ！」
「それとこれとは話が違う。いや、そもそも次元が違う。あれは漫画の世界であって、こっちは現実だ。そううまいこと事が運ぶものか」
「は、いっとくけど俺バスケめちゃくちゃうまいからな」
「ほう、大した見栄だな。初めて一ヶ月の素人が上手い？笑わせてくれる。お前の発言はバスケに青春をかけてきたものへの冒涜だ」
悔しいけどなにも言い返せない。俺が言ってるのは反論になっていないただの屁理屈だ
「く、だいたいお前はなんなんだよ！スポーツやってなさげな顔してるくせに偉そうにいってんじゃねえよ！」
「お前はさっきの話からわからないのか？俺は現役バスケ部だ」
現役バスケ部あたりはわからないなさすがに。
「ふん、どうせポジションは補欠だろ」
「スタメンでシューティンングガードだ」
「……う」
「う？」

「うっせバーカ！お前なんかあれだ！試合中に足グネってマネージャーに看病されてしまえ！ゴリラ似の！お前なんかに負けてないからなあああああ！」

俺の叫びが店内にエコーする。なにごとかと思った客たちが一斉に俺たちの方をむいてきて恥ずかしかった

「……お前に勝った覚えもないがな」

そんな木崎の言葉は耳に届かなかった。

ていうか、今思ってみればなんてありがちな捨て台詞を吐いてきてしまったのだろう。

バイト初日は眼鏡と一緒（後書き）

ふう・・・軌道修正って一番難しいと思います。
さて、ここからどういうふうに原作にもっていこうかな

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6474w/

ロウきゅーぶ！　妹観察日記

2011年12月17日02時05分発行